先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2018
Volume 3
8月

VIEW21

探究者たれ！

特集
「問い」を起点に考える探究学習

改革事例から導く！
「学校教育デザイン」を描く道標
福岡県・私立筑紫女学園中学・高校

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング
英語 福井県立敦賀高校 牧野剛士
世界史 京都府・京都市立堀川高校 吉谷智美

指導変革の軌跡
宮城県涌谷高校
大阪府・私立初芝富田林中学校・高校

ベネッセ教育総合研究所
http://berd.benesse.jp

今月の表紙 三重県立松阪高校 尾邊英也先生

広い、広い牧場で学ぶ

生徒 ３年生になって、８月まで部活動を続けて大丈夫か、勉強に時間を割くのがよいのではないかととても悩み、先生に相談しましたよね。先生から「どうすれば後悔しないのかは、自分で分かっているんでしょ？自分が納得するようにやりなさい」と言われて、「よし、どっちもやろう」と決心しました。先生が応援してくれることが本当にうれしくて、迷いがなくなったんです。

生徒 私も、３年生までＳＳＨの活動を続けるかどうか悩んだ時に先生に相談しました。先生から、「探究活動も受験勉強も、どちらも諦める必要はないよ」と励まされたから、３年生でも頑張ろうと決意したんです。

先生 ２人とも、「両方やりたい」と思っていることは明らかだったからね。自分の気持ちを大切にして挑戦すれば後悔しないでしょ？　勉強は先生たちがフォローするから安心してやり抜けばいいんだよ。

生徒 僕は数学が好きで、１年生の頃から授業の内容だけでなく自分のペースで先の学年の単元まで勉強していました。先生に「数学以外の教科の成績が心配です」と話したら、「納得するまで数学をやり切ってみればいいじゃないか」と言ってくれましたよね。

先生 １つのことを極める経験をした人は、ほかのこともできるようになるものだからね。

生徒 先生と話していると、自分はどうしたいのか、自分の気持ちがはっきりしてくるんです。

先生 先生はただ、君たちの可能性を信じて応援しているだけなんだよ。

生徒 その応援の力が大きいから、気持ちが落ち込んだ時などに「ハッパをかけてもらおう！」って、先生と話したくなるんです。「最近どうなんや？」って、先生が私の話を聞いてくれるから、私も先生に自分の思いを話して……、最後には「今日から私はこうする」と、やるべきことが引き出されているんです。

生徒 僕らはすごく広い牧場にいるんです。とても自由に動けるけど、はるか遠くには柵があって守られている。どうすればよいか分からなくなった時に先生の姿を探すと必ずそばにいて、僕らの話を聞いてくれるんです。広い牧場で、いろいろな可能性を自分で模索し、選択する力を身につけている気がします。

先生 それこそが自律する力、生きる力なんだと思うよ。君たちは確かに成長しているね。うれしいよ！

尾邊英也先生　教職歴 37 年。同校に赴任して 14 年目。3学年主任。ＳＳＨ企画委員。

三重県立松阪高校　全日制／普通科・理数科／共学／1学年 約 320 人／ 2018 年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、東京大、名古屋大、三重大、京都大、大阪大などに 145 人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、南山大、同志社大などに延べ 551 人が合格。

VIEW21 〈ビュー21〉高校版 2018 Volume 3 8月

CONTENTS

2 特集

「問い」を起点に考える 探究学習

4 課題整理
次期学習指導要領の解説から読み解く「探究」と、データで見る学校現場の状況

8 座談会
探究学習における課題設定力を育むために
――日々の授業で私たちができること――
大阪大学 全学教育推進機構 准教授 佐藤浩章／
宮城県仙台第三高校 滝井隆太 ／ 長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 槌本六秀

14 実践事例 1
自分の思考状態を客観的に捉え、何をどう考えるべきか気づかせる
新潟県立新津高校

18 実践事例 2
生徒が自ら発する「問い」を大切にし、探究し続ける姿勢を育む
茨城県・私立聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校

22 改革事例から導く！「学校教育デザイン」を描く道標

22 福岡県・私立筑紫女学園中学・高校
教育の不易と流行の視点で教育活動全体を見直し、指導・評価の改善を起点に改革

24 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

24 英語
福井県立敦賀高校 牧野剛士
生徒に自分の意見を表現させる活動中心の授業で、4技能をバランスよく伸ばす

28 世界史
京都府・京都市立堀川高校 吉谷智美
ペアワークや音読などの言語活動、教科を横断した問いかけで、生徒の思考を広げ、深める

32 指導変革の軌跡

32 宮城県涌谷高校
学力向上・社会意識の醸成
基礎学力を定着させ、社会への関心を育む指導で、生徒の進路意識を高める

36 大阪府・私立初芝富田林中学校・高校
学校改革
「チーム初富」の精神とミドルリーダーの力で、目指すは第1志望決定率100%

40 改良！ 指導ツール ビフォーアフター
2年生2学期 第1志望研究

44 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

44 港湾職業能力開発短期大学校神戸校 港湾流通科
理論と技術の体系的なカリキュラムで実践的な港湾・貿易業務を学ぶ

46 北九州市立大学 地域創生学群
1年次から複数の実習を同時に行い、地域社会のマネジメント力を身につける

48 これからの会議・研修のあり方、つくり方
行動変容を促す振り返り

50 VIEW'S REPORT
早稲田大学政治経済学部が2020年度、一般入試改革を実施
グローバルリーダー育成に向け、思考力や主体性等を測る入試へ

52 シリーズ 私立中高一貫校に聞く
「リーダー」を育む6か年デザイン
東京都・私立豊島岡女子学園中学校・高校
大阪府・私立高槻中学校・高校

60 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち
「先生自らが継続する姿を示せ！」
北海道岩見沢農業高校 熊谷孝宏

今月の表紙メッセージ

探究者たれ！

◎今号の特集のテーマは「探究学習」です。私が『VIEW21』高校版を担当するようになってから、「探究学習」を特集で取り上げるのは今回で3回目になります。回を重ねるごとに、社会環境の変化や大学入試改革の進展を受けて、その重要性が高まる一方、依然として実践にあたっての課題を抱える学校・先生は少なくないようです。次期学習指導要領が公示された今、「探究学習とは何か」「教師が果たすべき役割は」という根本の「問い」に今回は改めて向き合うことにいたしました。「答えが1つではない課題」に取り組もうとする生徒をどう導き、支援すればよいのかと試行錯誤されている先生方と思いを同じくするべく、編集部も「探究者」でありたいと思います。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木 崇

http://berd.benesse.jp
本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

印刷製本／（株）協同プレス　編集協力／（有）ベンダコ　執筆協力／中丸 満、二宮良太
撮影協力／荒川 潤、川上一生、高橋龍次、谷口 哲、藤木潤一
＊本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
＊本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます
©Benesse Corporation 2018

「問い」を起点に考える探究学習

本誌6月号の特集では、現場の教師の声を基に整理した、
次期学習指導要領を読み解くための視点の1つとして、「探究」が挙げられた。
実際、次期学習指導要領では、「総合的な探究の時間」を始め、
「探究」と付された科目が複数新設される。それに象徴されるように、
今後、探究学習や探究的な活動を取り入れた学びの充実がますます求められることになるだろう。
そこで今号では、探究学習とはどのような学びなのか、改めて整理した上で、
その実践の状況など、高校現場の実態を踏まえ、
探究学習の充実に向けて取り組むべき課題と教師の役割について考えていく。

次期学習指導要領における高校の教科・科目構成
（科目構成等に変更があるものを抜粋）

□…共通必履修　■…選択必履修　赤字…探究と付された科目　※グレーの枠囲みは既存の科目

国語科
- 論理国語
- 文学国語
- 国語表現
- 古典探究（赤字）
- 現代の国語
- 言語文化

地理歴史科
- 地理探究（赤字）
- 日本史探究（赤字）
- 世界史探究（赤字）
- 地理総合
- 歴史総合

公民科
- 倫理
- 政治・経済
- 公共

数学科
- 数学Ⅲ
- 数学C
- 数学Ⅱ
- 数学B
- 数学Ⅰ
- 数学A

理科
- 物理
- 化学
- 生物
- 地学
- 科学と人間生活
- 物理基礎
- 化学基礎
- 生物基礎
- 地学基礎

外国語科
- 英語コミュニケーションⅡ・Ⅲ（＊1）
- 論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（＊2）
- 英語コミュニケーションⅠ（＊1）

＊1 「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の統合型
＊2 スピーチやプレゼンテーション、ディベート、ディスカッション等
※英語力調査の結果や CEFR のレベル、高校生の多様な学習ニーズへの対応なども踏まえ検討

家庭科
- 家庭基礎
- 家庭総合

情報科
- 情報Ⅱ
- 情報Ⅰ

理数科
- 理数探究（赤字）
- 理数探究基礎（赤字）

総合的な探究の時間
- 総合的な探究の時間（赤字）

※実社会・実生活から見いだした課題を探究することを通じて、自分のキャリア形成と関連づけながら探究する能力を育むというあり方を明確化する。

＊中央教育審議会初等中等教育分科会配布資料（2018 年 5 月 15 日）を基に編集部で作成

本号のテーマ

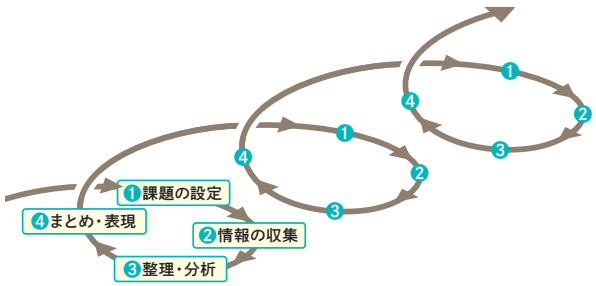
探究学習とはどのような学びか改めて整理し、生徒が取り組む上での課題や教師の役割について考える

1 探究学習とはどのような学びか、そして現場の実態は？

課題整理【P.4 ～ 7】

探究学習とはどのような学びか

◎探究学習とは、生徒が下図の❶～❹のプロセスを通じた学習活動を発展的に繰り返していく学び。



＊文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成

◎教科・科目における「探究」は、当該教科・科目のより深い理解を目的とし、教科の内容項目に応じた課題に沿って行う探究的な活動である。一方、「総合的な探究の時間」等における「探究」は、課題発見・問題解決に必要な資質・能力の育成が目的であり、複数の教科・科目等の見方・考え方を組み合わせるなどして働かせ、探究のプロセスを通して資質・能力を育成する。以上のような違いはあるが、「探究」はすべての教科・科目での展開が求められていると言える。

◎各教科・科目で身につけた資質・能力、探究学習で身につけた資質・能力それぞれが既知の特定の状況においてのみ役に立つのではなく、未知の多様な状況において自在に活用することができるものとなるよう、それぞれを相互に関連づけ、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすることが求められる。

現場の実態は

◎ベネッセの調査によると、７割強の学校が探究学習を実施。
◎探究学習のプロセスにおいて、約４割の学校が「課題の設定」に課題を感じている。
◎推進における主な課題は、「指導の目線合わせ・意識の統一」「指導時間の確保」「指導・コンテンツ準備の負荷軽減」。

2 探究学習における課題にどう取り組むか、教師の役割は？

座談会【P.8 ～ 13】

大阪大学
全学教育推進機構准教授
佐藤浩章（ひろあき）

宮城県
仙台第三高校
滝井隆太

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
槌本六秀（つちもとむつひで）

生徒が自ら深い課題設定をするための指導とは

◎課題設定に必要な「問いを立てる力」を生徒に育成するためには、教師自身にもその力を高めることが求められる。
◎教科学習では、習得すべき知識が科学者の研究等によって導き出されたプロセスを生徒に追体験させる問いや、授業・単元の中で一番大事だと思うところを生徒が見つけられるような問いを立て、生徒の気づきを促す。
◎「総合的な学習の時間」や教科の授業において、教師や先輩の問いの立て方を観察し、その後、教師や先輩に手伝ってもらいながら自分で問いを立ててみることを何度も繰り返すことで、最終的には生徒自ら問いを立てられるようになる。

探究学習で求められる教師の役割

◎教師は、自分の持つ知識を生徒に効率的に授ける「ナレッジギバー」から、生徒が良質の問いを立て、その答えを見つけ出すことを支援する「学びのファシリテーター」への役割転換が必要。
◎探究学習の目的や評価の視点、教師の役割について、自校の教師と対話を重ねて共通理解を図り、自分事として捉えてもらう機会をつくることが求められる。

実践事例

1 新潟県立新津高校（にいつ）【P.14 ～ 17】
自分の思考状態を客観的に捉え、何をどう考えるべきか気づかせる

2 茨城県・私立聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校（せいとく／とりで）【P.18 ～ 21】
生徒が自ら発する「問い」を大切にし、探究し続ける姿勢を育む

次期学習指導要領の解説から読み解く「探究」と、データで見る学校現場の状況

これからの時代に求められる資質・能力を育む学びとして、ますますその重要性が高まる「探究学習」。しかしながら、その実践においては様々な課題を学校現場は抱えているようだ。ここでは、次期学習指導要領の解説を基に、高校教育において求められる探究学習とはどのような学びなのか改めて整理するとともに、その実践の状況や直面している問題などを調査データなどから探っていく。

探究とは問題解決的学習を発展的に繰り返すこと

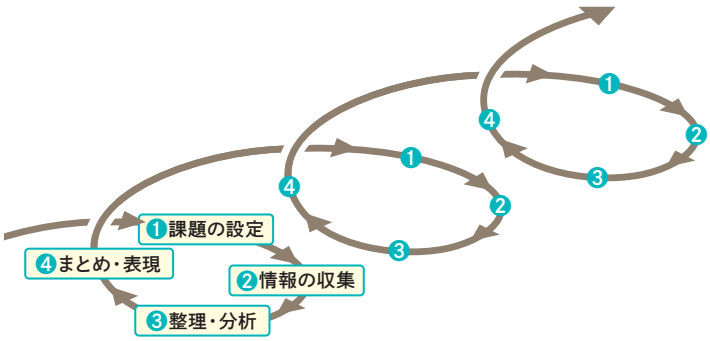
文部科学省より2018年7月に公表された「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」によると、「問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」ことを「探究と呼ぶ」としている。そして探究は、生徒が、「①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見つけ、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結びつけたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見つけ、さらなる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく」こととし、「物事の本質を自己とのかかわりで探り見極めようとする一連の知的営みのこと」と定義している（**図1**）。

なお、①～④の探究のプロセスは固定的に捉える必要はないとされている。それは、「物事の本質を探って見極めようとする時、活動の順序が入れ替わったり、ある活動が重点的に行われたりすることは、当然起こり得ることだから」だ。

すべての教科・科目で「探究」が展開されることが求められる

探究のプロセスが繰り返される学び（以下、ここでは原則「探究学習」と呼ぶこととする）は、現行の「総合的な学習の時間」や次期学習指導要領で新設される「総合的な探究の時間」などでの展開が求められている。一方で、次期学習指導要領において、「総合的な探究の時間」のほかにも「探究」と付された科目が複数新設される（**図2**）など、各教科・科目の学びにおいても「探究」が一層重視されてきているが、両者の「探究」に違いはあるのだろうか。18年7月公表の文部科学省「高等学校学習指導要領解説総則編」では、その点について次の

図1　探究における生徒の学習の姿



- 日常生活や社会に目を向け、生徒が自ら課題を設定する。
- 探究の過程を経由する。
  ❶課題の設定　❷情報の収集　❸整理・分析　❹まとめ・表現
- 自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される。

＊文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

ように説明している。

「（各教科・科目における「探究」は）当該教科・科目における理解をより深めることを目的とし、教科の内容項目に応じた課題に沿って探究的な活動を行うものであるのに対して、『総合的な探究の時間』や『理数探究』、『理数探究基礎』は、課題を発見し解決していくために必要な資質・能力を育成することを目的とし、複数の教科・科目等の見方・考え方を組み合わせるなどして働かせ、探究のプロセスを通して資質・能力を育成するものである」

また、「高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編」では、「総合的な探究の時間」などで展開される探究学習が、特定の教科・科目にとどまらず、横断的・総合的な視点で実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を対象としていること、そしてその問題を、複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて、様々な角度から俯瞰して捉え、考えること、さらに生徒が取り組む課題は、解決の道筋がすぐには明らかにならない、もしくは唯一の正解が存在しないものであり、それらに対して最適解や納得解を見いだすことを重視していることが、各教科・科目における「探究」と異なる点としている。

以上のような違いはあるものの、押さえておきたいのは、すべての教科・科目の学びで「探究」が展開されることであり、「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」等で行われる「探究」と教科の系統の中で行われる「探究」の両方が教育課程上にしっかりと位置づけられ、それぞれを充実させることが、今後ますます求められているということである。

各教科・科目の学びと探究学習をつなぐ

探究的な活動を含む各教科・科目の学び、そして「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」等で行われる探究学習それぞれを充実させる一方で、両者をつなぐ視点も重要である。すなわち、各教科・科目で身につけた資質・能力と、探究学習で身につけた資質・能力を相互に関連づけ、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすることである（P.6図3）。その点を重要視する理由として、「高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編」では、「身につけた資質・能力は、当初学んだ場面とは異なる新たな場面や状況で活用されることによって、一層生きて働くようになる」こと、そして、「これからの時代においてより求められる資質・能力は、既知の特定の状況においてのみ役に立つのではなく、未知の多様な状況において自在に活用することができるものであることが求められている」ことを挙げている。各教科・科目や「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」等で身につけた資質・能力が、それぞれを身につけ

図2　高校の各学科に共通する各教科・科目及び総合的な探究の時間

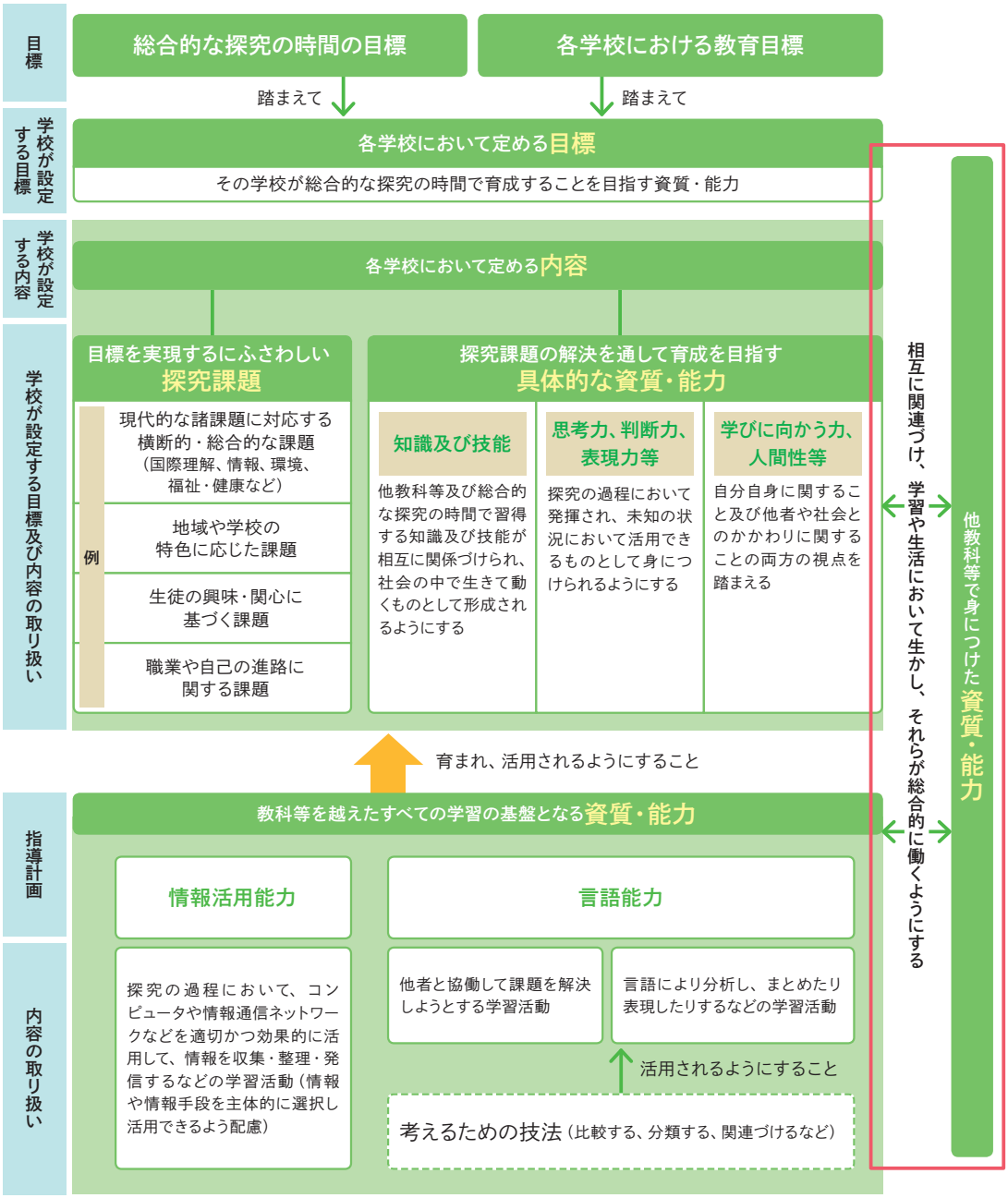
＊赤い下線は変更のある科目

教科	科目	標準単位数	必履修科目
国語	現代の国語	2	○
	言語文化	2	○
	論理国語	4	
	文学国語	4	
	国語表現	4	
	古典探究	4	
地理歴史	地理総合	2	○
	地理探究	3	
	歴史総合	2	○
	日本史探究	3	
	世界史探究	3	
公民	公共	2	○
	倫理	2	
	政治・経済	2	
数学	数学Ⅰ	3	○2単位まで減可
	数学Ⅱ	4	
	数学Ⅲ	3	
	数学A	2	
	数学B	2	
	数学C	2	
理科	科学と人間生活	2	「科学と人間生活」を含む2科目または基礎を付した科目を3科目
	物理基礎	2	
	物理	4	
	化学基礎	2	
	化学	4	
	生物基礎	2	
	生物	4	
	地学基礎	2	
	地学	4	
保健体育	体育	7～8	○
	保健	2	○
芸術	音楽Ⅰ	2	○
	音楽Ⅱ	2	
	音楽Ⅲ	2	
	美術Ⅰ	2	
	美術Ⅱ	2	
	美術Ⅲ	2	
	工芸Ⅰ	2	
	工芸Ⅱ	2	
	工芸Ⅲ	2	
	書道Ⅰ	2	
	書道Ⅱ	2	
	書道Ⅲ	2	
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	○2単位まで減可
	英語コミュニケーションⅡ	4	
	英語コミュニケーションⅢ	4	
	論理・表現Ⅰ	2	
	論理・表現Ⅱ	2	
	論理・表現Ⅲ	2	
家庭	家庭基礎	2	○
	家庭総合	4	
情報	情報Ⅰ	2	○
	情報Ⅱ	2	
理数	理数探究基礎	1	
	理数探究	2～5	
総合的な探究の時間		3～6	○2単位まで減可

＊文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総則編」を基に編集部で作成。

た場面とは異なる新たな場面で活用される状況をつくるためには、各教科・科目等で育む資質・能力を教師間でしっかりと把握・理解し、各教科・科目等間での関連を図ることが必要となる。その具体例の1つとして、「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」では、「単元配列表」の工夫が挙げられている。ここで言う単元配列表とは、各教科・科目等の単元の配置に加えて、相互の関連を線で結ぶことで、1年間の流れの中で各教科・科目等との関連を見通せる年間指導計画を指す。その作成において、「単元名や学習活動だけでなく、育成を目指す資質・能力が記され、それらが相互に関連することが示されれば、それぞれの学習活動は一層充実し、資質・能力が確かに育成される」としている。そして、「総合的な探究の時間」等で行われる探究学習において、各教科・科目等で育成された資質・能力が発揮されたり、逆に探究学習で育成された資質・能力が各教科・科目等の学習活動で活用されたりといった経験を通じて、生徒が身につけた資質・能力は汎用的な資質・能力として育成されると説明している。

図3 「総合的な探究の時間」の構造イメージ



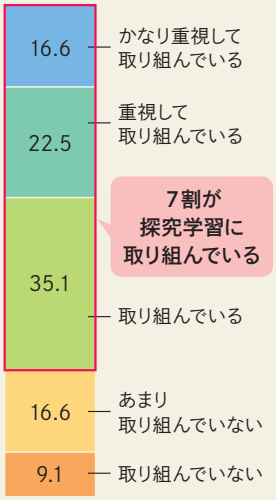
＊文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

次期学習指導要領実施を前に自校の「探究学習」を模索

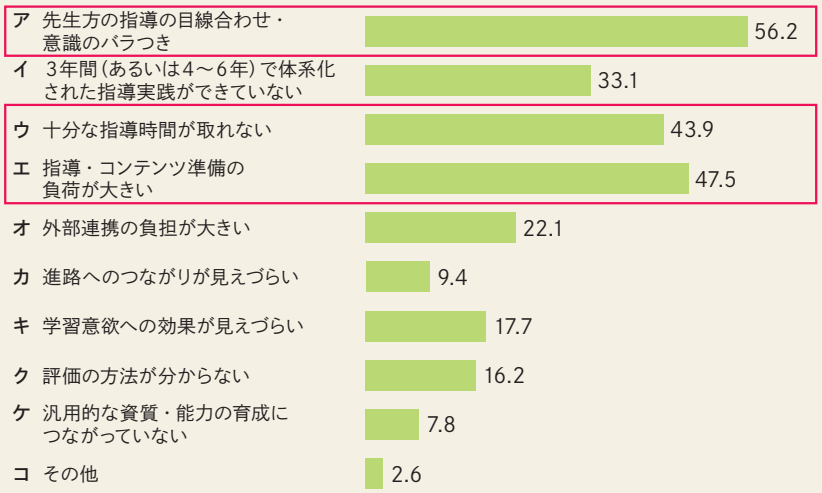
では、学校現場における探究学習の取り組みはどのような現状なのか。「総合的な学習の時間」での探究学習の実施状況を調査したところ、多くの学校が探究学習に取り組んでいることが分かった（**データ1**）。しかし、その推進上の課題として、教師間の目線合わせの難しさ

「総合的な学習の時間」における探究学習の実施状況

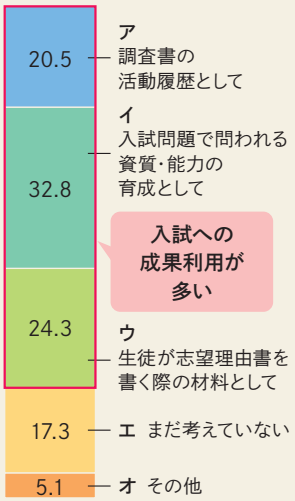
データ1
探究学習の実施状況(%)



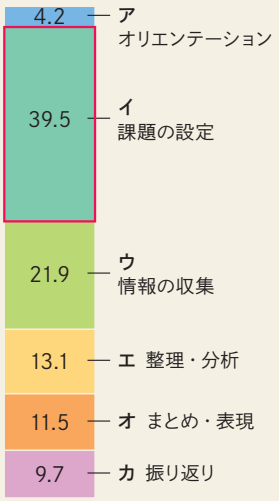
データ2
探究学習の推進上の課題 ※複数回答(%)



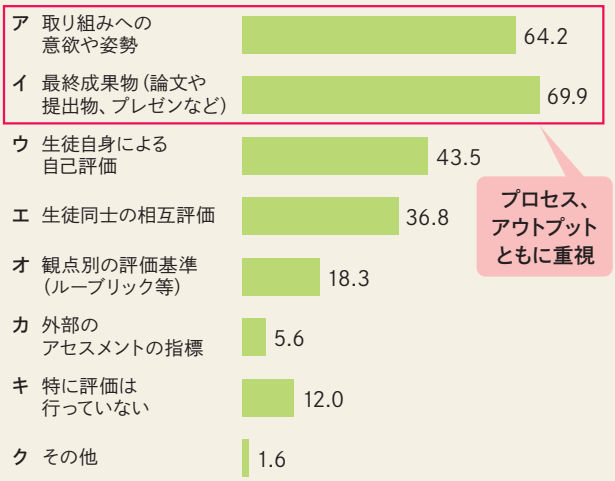
データ3
探究学習の成果利用(%)



データ4
探究学習のプロセスの課題(%)



データ5
探究学習の評価で実践していること ※複数回答(%)



注）数値は小数第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。
＊2018年6月実施「総合的な学習の時間」における探究学習の実態調査。全国の高校約1,000校へのアンケート調査結果。

などを挙げる教師が多く（**データ2**）、さらに、生徒に探究学習に取り組ませる上で、探究のプロセスの最初のステップである「課題の設定」に課題を感じている（**データ4**）。

「総合的な学習の時間」における探究学習は、生徒と教師それぞれが試行錯誤をしながら取り組んでいる状態と言えるだろう。そうした中、現場の教師は、取り組みへの意欲や姿勢、最終成果物などを通じて、生徒の探究学習への取り組みをしっかりと評価し（**データ5**）、その結果を大学入試という生徒の未来につなげようとしている（**データ3**）。探究学習の何を評価し、生徒にどのようにそれを還元して、進路実現への後押しとしていくのか、各校において一貫性のある指導ストーリーを描くその重要性が、今後ますます高まっていくことだろう。

「総合的な探究の時間」のみならず、各教科・科目等の学びにおける「探究」も一層求められる次期学習指導要領の実施を控え、自校の探究学習はどうあるべきか、そしてその実現に向けてどのような組織体制が必要なのか、そのヒントを次ページから探っていく。

座談会

探究学習における課題設定力を育むために

――日々の授業で私たちができること――

「総合的な学習の時間」はもちろん、各教科でもその実践がますます求められる探究学習。ただ、実践にあたっては、「どこから着手すればよいのか」「どうすれば生徒に深い課題を設定できるのか」「何に重点を置いて評価すればよいのか」といった課題を現場は抱えている。探究学習を実践する現場の教師と大学の研究者が、探究学習における諸課題をどう考え、取り組んでいけばよいかを話し合った。

出席者

大阪大学
全学教育推進機構
准教授
佐藤浩章
さとう・ひろあき

宮城県
仙台第三高校
滝井隆太
たきい・りゅうた

長崎県・私立
純心中学校・
純心女子高校
槌本六秀
つちもと・むつひで

探究の素地を教科学習を通して養う

佐藤　探究学習は、多くの学校で「総合的な学習の時間」において行われるようになりましたが、探究学習と呼べるものになっているか、実態は学校によって異なるようです。また、「総合的な学習の時間」で探究学習を行っていても、教科の授業は知識・技能の習得やその活用まででとどまっているケースが多く、カリキュラム全体で探究力を育成する高校はまだ少ないようです。次期学習指導要領では、各教科における探究的な学習活動が一層求められるため、教科知識と探究力の両方を獲得できる授業づくりを各教科で進め、各教科と「総合的な学習の時間」をつなぐことがますます重要になります。

滝井　本校ではすべての教科・科目で、探究的な学習活動を取り入れることにしています。例えば、評論の授業では、新聞の社説や研究者の論文の一部などを読んで評論のテーマに関する背景知識を得たり、そのテーマについて先に議論したりした上で、教科書に入るという単元設計をしました（授業の詳細はP.10参照）。また、古文などで新しい文法事項が出てきた時は、知識として教える前に、既に獲得してきた知識では解決できない問題として提示し、生徒が新しい知識を自ら見つけるように促します。言わば謎解きのような授業の仕立てにすることで、生徒は探究的な学習活動の中で、知識を主体的に獲得していきます。

これまでの「総合的な学習の時間」の中で、生徒の課題発見力や問題解決力の乏しさを痛感した教師は少なくないと思いますが、それは探究学習を「総合的な学習の時間」だけで行おうとしてきたからではないでしょうか。各教科でも探究学習の要素を取り入れ、それを生徒に経験させることで、「総合的な学習の時間」における探究学習をより充実させることができると思います。

槌本　私が担当する化学では、私が「教える」のではなく、生徒が「内容を説明する」ことを中心に授業を進めています。各単元の最初の授業は、生徒が教科書を読んで理解したこと、その単元で一番大事だと思われることをグループで話し合うことから始まります。同じ教科書で予習しても、単元の中で何を一番大事だ

と考え、それをどのように説明するのかは生徒によって異なりますし、最初は教科書の記述をそのまま暗記したような説明をする生徒もいます。しかし、グループで分かったことを共有し、単元で一番大事なことを話し合ううちに、内容を深く理解し、自分の言葉で説明できるようになります（授業の詳細はP.11参照）。

生徒は何回も教科書を読み込みながら、1つの事項を説明するためには周辺の事項を理解しなければならないことに気づき、徐々に単元の内容を俯瞰し始めます。教科の中で物事を俯瞰的に理解する力を身につけることは、「総合的な学習の時間」における探究学習に取り組む上で、必要な資質・能力だと考えています。

佐藤　先生方は、そうした探究学習を取り入れた授業を、3年間通して実施しているのですか。

槌本　基本的に生徒の学習活動は3年間同じで、演習問題に取り組む時も、協働的に教え合う形式です。ただし、国公立大学の個別学力検査対策では、生徒が自力では気づかないような視点での考察も必要ですから、私が発問する場面が多くなります。それでも、ただ問題を解かせるような時間は少なく、生徒が実験図だけを見て「この図を基にどんな入試問題ができるか」を話し合い、問題と解答をつくるような授業を行います。

滝井　本校でも、学年による意図的な授業形式の違いはなく、あくまでも生徒の実態、身につけさせたい力、教材を踏まえて、単元ごとに教科団で話し合って授業づくりを進めています。一方で、生徒が「知識伝達型の授業でなくても成績は伸びるのだろうか」と不安に思わないように、過去の生徒の実績を紹介し、この授業スタイルで大丈夫なのだと初期指導で理解させることが重要です。

生徒が自ら学びを獲得する「問い」をつくる

佐藤　私は、生徒が探究学習を進められるかどうかの鍵は、課題設定力にあると思います。しかし、生徒の課題設定力が、不足していると感じる高校教師は多いようです。

私は、探究学習における課題設定力を、「問いを立てる力」に置き換えた方がよいと思っています。例え

大阪大学　全学教育推進機構　准教授
佐藤浩章　さとう・ひろあき

愛媛大学大学教育・学生支援機構教育企画室准教授・副室長を経て、現職。著書に『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン』（ナカニシヤ出版、共同編集代表）、『講義法（シリーズ大学の教授法2）』（玉川大学出版部、編著）など。大阪大学で開催する高校教師を対象とした探究学習の指導セミナーの講師も務める。

宮城県仙台第三高校
滝井隆太　たきい・りゅうた

教職歴25年。同校に赴任して9年目。授業づくり研究センター副センター長。教務主任。国語科担当。

宮城県仙台第三高校

◎建学の精神は、「心身の健康」「真・善・美の追求」「愛と知の稔（みのり）」。スーパーサイエンスハイスクールとして、課題研究の深化とグローカルサイエンスリーダーの育成に注力する。
◎設立　1963（昭和38）年
◎形態　全日制／理数科・普通科／共学
◎生徒数　1学年約320人
◎2018年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、千葉大、一橋大、京都大などに236人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ356人が合格。
◎URL　http://www.sensan.myswan.ne.jp/

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
槌本六秀　つちもと・むつひで

教職歴22年。同校に赴任して23年目。進路指導主事。理科担当。

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校

◎「清く・かしこく・やさしい女性に」を教育方針として、カトリックの精神に基づき豊かな人間性を育む教育活動を展開。英語教育にも力を注ぎ、グローバルに活躍する女性を育成する。
◎設立　1935（昭和10）年
◎形態　全日制／普通科／女子
◎生徒数　1学年（高校）約180人
◎2018年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、信州大、広島大、山口大、長崎大、首都大学東京、長崎県立大などに21人が合格。私立大は、専修大、津田塾大、明治大、近畿大、長崎純心大などに延べ166人が合格。
◎URL　http://www.n-junshin.ed.jp/

ば、探究学習の課題として、「地域の過疎化」などがよく挙がりますが、そのような漠然とした課題を設定すると、調べ学習で終わってしまいがちです。探究学習にするには、「私たちの住む○○町が限られた予算でできる過疎化対策とは」「若者が住み続ける○○町と離れていく○○町の違いは」など、検索サイトでは到底答えが見つからない、自分事として捉えられる問いを生徒自身が立てることが重要で、そのためには問いをメタ化できる力が必要です。一方、私は、探究学習を担当する高校教師と接する中で、教師自身が問いを立てることに苦労していることに気づきました。これまでは、教科書に書かれている問いの解き方と答えを教えることが重視されてきたため、それは仕方のないことかもしれませんが、教師自身が問いを立てる力を向上させることが、生徒に問いを立てる力を身につけさせるための第一歩だと思います。

滝井　教科における探究的な学習のポイントは、教師が生徒に、思考を刺激する問いを投げかけることだと思います。例えば、与謝野晶子の「柔肌の熱き血潮に触れもみで寂しからずや道を説く君」という短歌に関して、「時空を超えた革新的短歌と評されるのはなぜか」という問いを生徒に提示しました。生徒は短歌の意味、時代背景、作者の情熱的な生き方を調べながら、問いに向き合い、この短歌をより深く学んでいきます。また、化学の教師と協働し、「質量保存の法則があてはまらない物質は何か」という問いを立て、物質の特定と原因を探究する中で、別の知識の適用に気づく授業をつくりました。生徒は与えられた問いに向き合うために、それまで学んできた知識を使い、実験で試行錯誤します。生徒の思考を刺激し、既習の知識を整理したり、新たな知識を自分で獲得しようとしたりすることは、受験学

仙台第三高校　滝井隆太先生
3年生「国語（現代文）」の例

評論「グローバル化のゆくえ」（山崎正和）を教材に、「グローバル化する社会の中で、どのような心構えの下で生きていくべきか」を、硬派で論理性の高い文章を丁寧に読み解いていく中で生徒に考えさせる。全８時間の単元における学習目標として次の２項目を設定している。

❶論理的で緻密な分析に基づいた現代社会に対する認識と、それに続く社会のあり方への提示を基にした思索の深化。
❷現代社会に混沌としながら存在するグローバル化やナショナリズム化という流れを理解し、その中でどのように生きるべきかという指針の獲得。

単元の流れ

1～3時間目〈私たちを取り巻く社会を認識する〉

- 1時間目：トランプ大統領の就任宣言、中国の「一帯一路構想」、イギリスの「ＥＵ脱退」などの報道記事や論文を黙読し、要点を説明できるようになる。
- 2時間目：前時の内容を踏まえて、さらにグローバリズムの進行が世界経済に与える影響について経済学者が語った文章を読み、「世界が進んでいく（進んでいる）方向」について、自分の考えをまとめる。
- 3時間目：「グローバル化の功罪」をテーマにディスカッションを行う。

単元で扱う教材に関連する複数の資料を読んで内容を整理し、自分の考えをまとめたり、他者の考えに触れたりする

4～6時間目〈自分の考えを持つ〉

- 4～6時間目：「グローバル化に伴って表出するであろう問題をどのように解決できるか」という問いに対する自分の考えを書き、ほかの生徒と共有し、考えを深める。そして、教科書を通読し、さらに筆者の考えについて賛成の立場で小論文を書く。

４時間目で初めて教科書本文の全体を通読し、設定された立場で小論文を書く

7・8時間目〈問題演習に取り組む〉

- 7・8時間目：グローバル化社会における「文化」について考察した文章とともに出題された大学入試問題を実際に解いてみる。そして、世界のグローバル化の潮流について教師が解説し、単元のねらいについて深い理解を促す。

◎仙台第三高校では、生徒が自ら学びたいテーマを発見・設定し、主体的に問題解決に取り組む学習活動を「非構成的アクティブ・ラーニング」と定義し、「課題研究」、「探究」（教科）で実践。さらに、学習する分野や教材、活動などを教師が設定し、限定された範囲内で生徒が主体的に学び、探究学習に必要な力を身につけることを目指す学習活動を「構成的アクティブ・ラーニング」と定義し、各教科の授業で実践している。探究型の授業の研究・開発組織を編成し、全教師が参加。授業の研究・改善に協働して取り組んでいる。（詳細は、本誌2016年 10 月号 P.10 ～ 14 参照）

力と探究力を同時に担保することにつながります。

佐藤 高校の教科学習では、「正解が1つしかない問い」「答えが無数にある問い」のどちらの問いを立てることも可能だということですね。重要なのは、研究者が具体的事象から普遍を見いだすようなプロセスを生徒に体験させることによって、生徒本人が知識創造活動に興味を持てるように促すことです。その意味では、特に「質量保存の法則」の事例は、問いを起点にした科学者の探究の追体験だと言えると思います。

槌本 教科における探究的な学習を進める際、教師間で力量の差が出るのが、教師が立てる生徒の思考を刺激する問いの質だと思います。私は若い教師に、「教科で探究的な学習を行うために最も重要なことは、その単元やその日の授業の中で、一番大事だと思うところを生徒自身が見つけられるような問いを立てることだ」と話しています。一番大事なことを教師が「どうだ！」とばかりに語る授業ではなく、生徒が自分で発見する授業が教科における探究的な学習であり、そのために必要なのが問いの追究です。授業で一番大事なところが何かは教師は分かっていますから、一番大事なところを見つけられるような問いを立てることは、本来、どの教師にもできるはずです。

そして、生徒が一番大事なところにたどり着き、「分かったかも！」という表情を見せた瞬間に、「じゃあ、これだったらどうなる？」と次の問いを投げかければ、生徒は「分かった！」という喜びとともに、さらに深く次を考え始めます。

佐藤 一番大事なことに生徒自身で

純心中学校・純心女子高校　槌本六秀先生

1年生「化学基礎」の例

1年生「化学基礎」では、最初の授業で、中心に「原子」とだけ書いたプリントを1人1枚配布し、原子について知っていることやイメージを書かせる。その後、数時間かけて、生徒は教科書や参考書を基に単元の内容をグループでまとめ、クラスで発表する。そうして単元の内容を深めながら、再度、「原子」とだけ書いたプリントに自分が理解したことを書いていく。1つの単元でプリントの作成は全3回行われ、プリントは生徒にとって学びの深化を自覚させるポートフォリオとなる。この授業での特徴は、単元の内容をどのようにプリントにまとめ、どのようにグループで説明するかを生徒自身が考える（説明課題の設定を生徒自身が行う）ことにある。

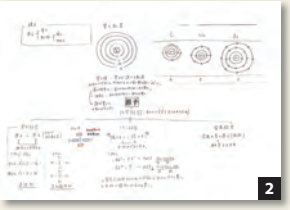
単元（第1編「物質の構成と化学結合」）の流れ

❶最初の授業で、15～20分かけて、原子について思いつくイメージや知っていることを何も見ずに自由に書かせる。グループで書いた内容を共有し、原子について説明するにあたって鍵になると思われる説明課題を生徒が設定し、それに従ってグループでの発表を複数回行っていく。生徒が設定した説明課題は、その後の学習を通してグループ内で適宜修正される。 →1

1

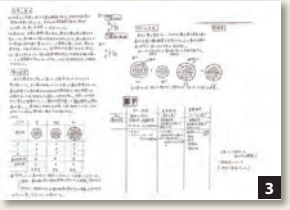
❷単元の途中、槌本先生が説明課題を設定し、生徒にその説明を求めることもある。教師が生徒の状況を見ながら、生徒が気づかない問いを与えることで、それまでのグループ内での学習内容がつながり、広がっていく。この段階で多くの生徒が単元について「理解した」と手応えを感じている。

「理解した」と思わせることで、その後の定期考査で思い通りの成績が取れなかった生徒が点数に一喜一憂せず、「授業では理解したはずなのに、なぜテストができなかったのか」を考え、自分の学習を見直すことにつながる。


2

❸15時間ほどかけて説明課題を練り直しながら発表を繰り返し、1単元が終了。その後、定期考査が実施されるが、考査後に最初の授業で配布したプリントをB4判に拡大したものを配布。最初の授業と同じ時間で、知っていることを自由に書かせる。ここで生徒は自身の成長を実感する。 →2

❹さらに1週間後、A3判の用紙を配布し、45分間をすべて使って、何も見ずに課題レポート風に書かせる。生徒自身が、理解したことを何も見ずに言語化して紙面上に書き込むことで、さらなる成長を自覚する。 →3


3

◎槌本先生は、生徒がグループになって単元の内容を話し合い、発表し、その内容を受けて教師が最小限の説明や演習を行うという生徒主導のアクティブ・ラーニングを実践している。生徒が単元の内容を説明する際の鍵となる「課題」は、生徒自身が設定する場合もあれば、槌本先生がいくつかの選択肢を提示し、そこから生徒自身が選ぶ場合もある。生徒には単元全体の内容を俯瞰する力、自分が理解したことを他者に分かりやすく伝える力など、様々な資質・能力が授業で求められる。（詳細は、本誌2016年8月号P.26～29参照）

気づくような授業づくりは、「答えは相手にある」というコーチングの基本原則にのっとったものです。教師が答えを教えた方が効率的に思えますが、生徒に気づきを委ねた方が、深く定着する学びになります。

槌本　「総合的な学習の時間」における探究学習で生徒主体の課題設定ができるようになるためには、日々の授業の中で教師の課題設定から学んだり、生徒同士の対話から自分たちで課題を設定したりする経験が不可欠だと思います。その上で、答えが1つではなく、実社会、実生活における問題解決につながる深い課題を設定できるようになるためには、課題設定だけに1年間かけてもよいくらいだと思っています。

滝井　「総合的な学習の時間」における探究学習の課題設定では、上級生の取り組みから学ぶことも重要です。本校の理数科の課題研究では、先輩が取り組んだ研究を受け継ぐケースもあるのですが、先輩の研究を参考に、新しい仮説を立てたり、別の視点で分析したりすることで、課題が洗練されるように感じます。生徒が設定した課題や取り組み事例を蓄積していくことも必要です。

佐藤　認知的徒弟制と呼ばれる、見習い修行の過程を理論化した学習モデルは、モデリング（modeling）、コーチング（coaching）、スキャフォールディング（scaffolding）、フェーディング（fading）という4段階で習得の過程を説明しています。まず、熟練者のやり方を観察し、次に熟練者からやり方を丁寧に教わり、そして困難なところだけ手伝ってもらい、徐々に熟練者が少しずつ支援を減らしていくというプロセスで、多くの職業技能は伝承されています。探究学習にはこのモデルが使えます。つまり、探究者の自立のプロセスをたどらせます。まず、生徒が教師や先輩の問いの立て方を観察し、その後、教師や先輩に手伝ってもらいながら自分で問いを立ててみる。それを「総合的な学習の時間」や教科の授業において、何度も繰り返すことで、最終的には生徒自ら問いを立てられるようになるでしょう。

学習する組織への脱皮が今、学校に求められている

滝井　一番大事なところに生徒が気がつくような授業づくりは、やはり一人の教師の力では難しく、教科団などで単元の指導計画、1コマの授業デザイン、そしてその中での問いのあり方について話し合いながら行うべきものだと思います。本校でも、今では1つの授業を教科団で練り上げる風土がかなりできていますが、そこに至るまでには相当の時間がかかりました。それぞれの授業でどのような問いが生徒の思考を刺激するのかは、教師にとっては「答えが1つではない問い」であり、不安を抱く先生もいましたが、「これからの教師は教科知識を授けるプロであると同時に、生徒が主体的に学習する環境を整えるプロでありたい」と、これからの教師像について対話を重ねてきました。

佐藤　教師の間に探究学習が広がっていく様子は、イノベーション（技術革新）の広がりに似ています。まず、使命感を感じた人がイノベー

佐藤浩章准教授から高校現場の先生方へ

ナレッジギバーを脱し、教師自身が探究学習者へ

探究学習が広がることで、これからの学校には、教師が答えを持ち合わせない問いを設定し、答えを自らつくり上げる生徒が増えていくことでしょう。その時教師には、自分の持っている知識を生徒に効率的に授ける「ナレッジギバー」から、生徒が良質の問いを立て、その答えを見つけ出すことを支援する「学びのファシリテーター」へと役割転換が求められます。

私は大学で、どのような教員の授業が学生の満足度が高いかを調査しました。そこで明らかになったことは、「分からないことは分からない」と言う教員の授業の満足度が高いということです。大学教員は確かにある分野の専門家ですが、学習内容が横断的になるほど、答えられないことも出てきます。そんな時に満足度の高い教員は、「それは分からないから来週までに調べておく」「別の専門家に聞いておく」などと回答をします。「分からないことは分からない」と正直に言えるのは、知的に誠実な証拠ですし、それは探究学習者の条件です。高校の先生方には、自らが探究学習者の生きたモデルになることが求められているのではないでしょうか。

ターとなって着手し、興味を持ったオピニオンリーダーが巻き込まれ、さらに追随者へと徐々に広がる……。探究学習も一気に普及することはなく、最初はイノベーターが孤軍奮闘から始めて、少しずつ仲間を増やすしかない。だからこそ、イノベーター同士が職場を越境してつながり、悩みや喜び、課題の克服方法や成果を共有していくことが必要です。

槌本 探究学習に対する校内の目線合わせ、特に「総合的な学習の時間」で「課題設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」などのどのプロセスに重きを置くのかを明確にしておくことも大切です。答えが1つではないような課題の設定を生徒に求めているのであれば、明確な答えや結論を出すことよりも、「課題設定」そのものや論理的な試行錯誤といった、途中のプロセスに重きを置くのがよいと個人的には思います。評価の視点を明確にしておけば、教師も安心して「課題設定」に時間をかけて取り組めるはずです。

滝井 生徒が生きる未来を考えると、これまでの教育のままでは不十分なことは誰もが認めていて、探究学習の必要性も理解している。それなのに、自分の学校、自分の授業だけは変えたくないというのはおかしいですよね。探究学習に不安を抱いている教師にこそ、探究学習を自分事として考えられる機会が必要です。本校では、すべての教師が探究学習のあり方と授業改善について考える「授業づくり研究センター」に所属し、全員でこれからの社会と生徒に求められる資質・能力について話し合ってきました。トップダウンや特定の教科だけでの探究学習の導入であれば、今のように全校規模では定着しなかったと思います。

槌本 探究学習の目的についても改めて学校で明確にしておく必要があります。本校の「総合的な学習の時間」は、探究学習を通してこれまでの各教科の学びの意味を感じてもらうとともに、1つの課題に取り組むにしても、様々な分野の知識が必要であることを実感させ、合教科・合科目的な学習理解を促すための活動です。教科学習の重要性に気づいた生徒が、不得意教科・科目であっても主体的な学びを始めるのは、「やらなければならない教科・科目」から「自分にとって必要な教科・科目」になったからです。自校の探究学習は大学での研究に接続していくタイプのものなのか、地域の企業や自治体と協働し、地域人材を育成することを目的としているのか、あるいは本校のような学びへの意味や理解を深めるためのものなのか、共通認識を図っておくことが大切です。

佐藤 学校は、生徒にとっては学習する場ですが、教師にとって学校という組織が『学習する組織』であるかと言えば、必ずしもそうとは言えなかったかもしれません。一人ひとりの教師は、担当教科について研究し、授業を改善してきたけれど、組織全体として「未来の学校とは」「探究学習とは」といった大きな問いに向き合うことは少なかったのではないでしょうか。その意味では、探究学習に取り組むということは、大きな問いに組織として向き合うということで、探究者としての教師の資質・能力が問われていると思います。

実は、置かれている状況は大学も同じです。高校の授業は着実に探究学習へと移行し始めているのに、大学1、2年次の授業の多くは依然として知識伝達型です。最近は高校で探究学習を経験した学生から不満の声が上がることもありますが、「将来、研究をするためにはまず知識が必要」と授業を変えることを拒む教員もいます。まさに高校と同じ課題を抱えているわけです。

私は、今日先生方から聞いた話を大学に持ち帰って、「高校も変わっているのだから、大学はもっと変わらないといけない」と訴えていきたいと思います。大学入試を探究型に変えるだけで、大学は満足してはいけません。大学、高校、さらには中学校、小学校とも連携しながら探究学習を進めていくことが、私たち教師には求められていると思います。

実践事例 1

新潟県立新津高校

自分の思考状態を客観的に捉え、何をどう考えるべきか気づかせる

新潟県立新津高校では、大学入試改革や次期学習指導要領を見据え、2017年度3学期に「総合的な学習の時間」で探究学習を始めた。課題設定の手法である「リサーチクエスチョン」によって、生徒たちに課題を設定させるなど、生徒の主体性を大切にしたプロセスにしている。さらに、教師が、生徒に思考状態を客観的に捉えさせる働きかけをして、思考力を高めている。

3年間で資質・能力を育む探究学習プログラムを構築

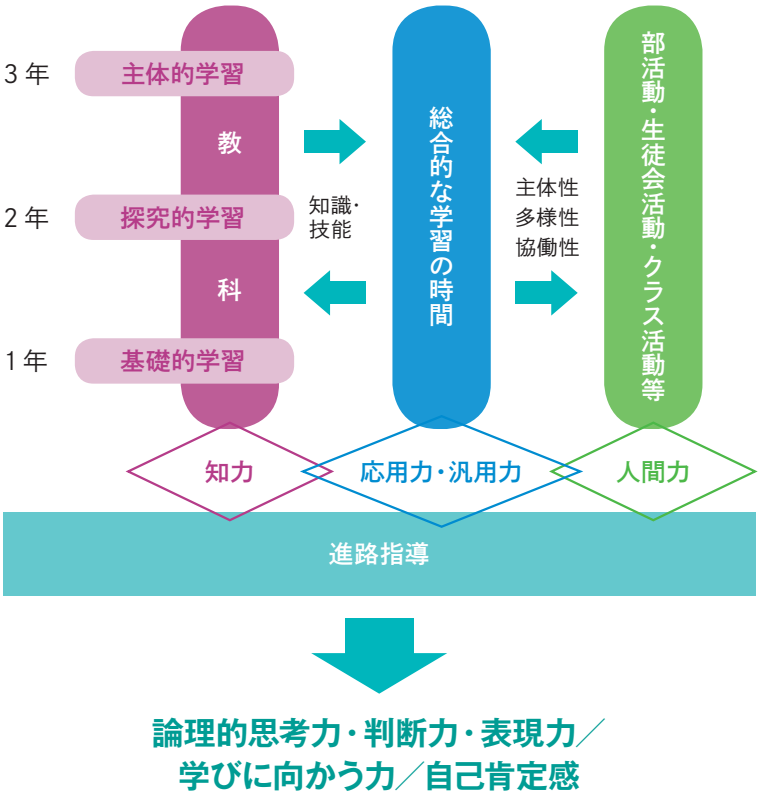
新潟県立新津高校は、2017年度3学期から、「総合的な学習の時間（以下、総合学習）」で、3年間の体系的な探究学習を始めた。受け身の学習姿勢や自己表現が苦手という生徒が多いといった課題に対応し、大学入試改革や次期学習指導要領に向けた指導の転換を図るのがねらいだ。17年4月、校長の発案により、校長、教頭、教務主任、学年主任、進路指導主事などによる検討委員会「総学ユニット」を設置し、半年以上をかけて内容を検討した。進路指導部（総合担当）の平野深雪（みゆき）先生は次のように語る。

「総合学習は、それまで学年主導で行っていましたが、根本から見直し、学校全体で展開する3年間のプログラムにしました。さらに、教育活動全体における総合学習の位置づけを捉え直し、教科学習や課外活動と関連させて資質・能力を伸ばしていく方針を確認しました（図1）」

総合学習の進め方を具体的に見ていこう（図2）。

1年次は「探究の作法を知る」ことを目的とし、各種活動を通して探究学習に必要な思考力や協働学習の技法などを身につけていく。例えば、①思考トレーニングでは、小論文の作成を通して論理的思考の型を

図1 教科学習、「総合的な学習の時間」、その他の活動の位置づけ



＊学校資料を基に編集部で作成

新潟県立新津高校

◎校訓に「學ぶは高き人の道」を掲げ、「しなやかな心」「あたたかい心」を持つことを大切にする。生徒の自己実現の支援として部活動の指導を含めて人間形成に力を入れるほか、進学者数の目標は「新潟大学50人以上、国公立大学100人以上、難関大10人以上」を掲げる。
◎設立　1921（大正10）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約270人
◎2018年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、筑波大、千葉大、新潟大、大阪大、首都大学東京などに88人が合格。私立大は、中央大、津田塾大、東京理科大、明治大、立命館大、同志社大などに延べ420人が合格。
◎URL　http://www.niitsu-h.nein.ed.jp/

新潟県立新津高校
齊藤恭広 さいとう・やすひろ
教職歴31年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。

新潟県立新津高校
平野深雪 ひらの・みゆき
教職歴35年。同校に赴任して2年目。1学年特進クラス副担任。進路指導部（総合担当）。

新潟県立新津高校
小松 彰 こまつ・あきら
教職歴28年。同校に赴任して5年目。2学年副任。進路指導部。

新潟県立新津高校
西條和久 にしじょう・かずひさ
教職歴26年。同校に赴任して1年目。2学年副任。進路指導部。

学び、②社会人講話・出前講座では、企業や地域から招いた外部講師による講演などを通して、社会の課題を捉える力を養う。さらに、③課題解決学習で、課題を見つけたり解決したりする学習をグループで行う。

2年次には、「課題研究」を行う。課題研究は、日本、国際、地域、生活、環境、医療・健康、数学、理科の8分野が設定され、それぞれ1～3人の教師が担当する。生徒は、各分野の担当教師から説明を受けた上で希望分野を選び、自身が探究したいことをレポートにまとめて提出。そのレポートの内容に応じて、研究分野が割り振られる。次に、「大学講義体験」で、分野ごとに大学教員による出前授業を受講する。講師には、大学における研究・探究の位置づけや進め方を生徒に説明してから、専門分野の講義に入ってもらうように依頼している。大学での探究をイメージさせ、生徒の課題研究への意識を高めさせることがねらいだ。

5W1Hの疑問文をつくり、疑問を明確にしていく

そうした準備を経て、1年間を通して探究する課題を設定する。担当教師は、自分の専門分野を踏まえた1～2つのテーマを設定（**P.16図3**）。進路指導主事の齊藤恭広（やすひろ）先生は、教師側が枠組みを決める理由を次のように説明する。

「学校としての継続性を考え、教師にあまり負担がかかり過ぎないよう、課題研究のテーマは、教師自身の専門の範囲内で設定しました」

同じテーマの下に集まった生徒たちは、その中で深く掘り下げたいこと、解決したいこと、証明したいことなどを話し合い、共通の関心事やキーワードを考え、「リサーチクエスチョン」に落とし込む。さらに、それらを基に、5W1Hの視点で疑問文を作るなどして考えを広げ、グループで研究テーマを探っていく。

「最初、生徒の考えは漠然としていましたが、『いつだろう』『何だろう』『なぜだろう』といった疑問に置き換える中で、『自分が考えたいのは、これかもしれない』と気づく姿が見られました」（平野先生）

どのような進め方でリサーチクエスチョンを立てさせるかは、担当教師によって異なる。日本分野担当の小松彰先生は、大学の卒業論文のようにデータを収集して新たな事実を

図2 「総合的な学習の時間」の3年間の流れ（案）

学年	目標・内容		具体的方策	
1学年	社会をつなぐ	①思考トレーニング ②社会人講話、出前講座 ③課題解決学習～社会的視点から課題発見・課題解決へ～ ④表現トレーニング	探究の作法を知る	①論理的思考の型を練習する ②課題発見の方法を学ぶ ③協働でのアイデアの出し方、絞り方を実践する。情報収集の方法を知る。情報整理・分析の方法を知る ④論文の書き方を学ぶ
2学年	学問を拓く	課題研究～学問的視点から～ ①大学講義体験 ②課題設定 ③研究活動 ④発表 ⑤論文	探究の道を知る	①「研究・探究」とは何かを知る ②課題発見の方法を実践する ③研究の手法、論理的思考の方法を学ぶ。希望分野・専攻を選択し、グループで課題研究を実践する ④発表する（プレゼンテーション、ポスターセッション） ⑤個人論文を作成する
3学年	進路を創る	自己実現のための進路選択へ	探究を応用する	進路探究レポート作成 志望理由書作成 論理的思考・表現実践等 ※内容も含め今後検討

＊学校資料を基に編集部で作成

客観的に解明することを目指して問いを設定させた。

「生徒同士が自由にグループを組み、テーマに関して話し合わせると、生徒から『こんな問いはどうだろう』といったアイデアが数多く出されました。それに対して、『調べる内容が明確か』『実際に調べられそうか』と私が質問し、生徒に再び話し合わせて問いを深めていくという方法で進めました」（小松先生）

課題発見の難しさを体験させることも大きな成長

調べ学習ではインターネットでの検索が主要な方法となるが、それだけでは答えが分からない問いになるよう導くことも意識したという。

「例えば、地元の方言に関することなど、限られた小さなエリアでの事象は、インターネットではなかなか調べられません。そうした問いに対し、いかに信頼できるデータを集めて探究するかを経験させたいと考えました」（小松先生）

一方、数学分野で「折り紙を折って多面体を作る」をテーマに設定した西條（にしじょう）和久先生は、最初に土台となる知識を与えてからリサーチクエスチョンを設定させた。

「このテーマでは、数学の一定の知識がないと何をどのように考えて課題を設定すればよいかが分からないと考えました。そこで、最初に基本的な正多面体の折り方を習得させてから、『もっと簡単な折り方はないか』『半正多面体の場合はどのように折るのか』といった問いの立て方があることに気づかせて、リサーチクエスチョンを考えさせました」

期限内にリサーチクエスチョンを設定できないグループもあったが、無理に設定させなかった。

「課題発見の難しさを体験させることも、課題研究の大きなねらいですから、設定できないことも経験の1つと捉えています。生徒には、時間をかけてもよいので、とことん自分たちなりの問いを見つける努力をするように伝えました」（平野先生）

自分を客観的に捉えてどう考えるべきかに気づかせる

課題研究で、教師はどのような姿勢で生徒を指導しているのか。生徒の主体性を大切にするのが原則だが、自分の力だけでは前に進めない生徒もいる。そこで、生徒にメタ認知を促し、自分の力で考えるよう支援する。

「課題設定がなかなかできない生徒に考える視点を与えると、『そう考えればよいのか』と気づいて思考が動き出すことがよくあります。生徒は考えても分からなかったのではなく、『考え方』が分からずに考えられなかっただけなのです。自分の状況を客観的に捉え、どのように思考すればよいのかに気づかせる働きかけを心がけています」（平野先生）

また、生徒には考える上で必要な知識がまだ十分にないため、教師がある程度の見通しを示すことも必要だと捉えている。

「自分の意思で課題を設定すれば、探究の意欲が高まりますから、生徒が自由に発想できるよう、教師が話し過ぎないように気をつけました。ただ、生徒の発想が実を結びそうかどうかを見極め、時には『それを調べるのは難しいかもしれないから、こう考えたらどうだろう』などと探究の方向づけをするようにしました」（小松先生）

課題研究の結果は、年度末にプレゼンテーションやポスターセッションにより発表する。その際、生徒たちに必ずしも「答え」を発表することを求めていないと言う。

「研究は本来、答えを見つけるも

図3　「課題研究」のテーマ

系	分野	テーマ
人文社会	日本	日本語に興味を持って辞書を使って調べてみよう
		言葉の変化を探る（地域・時代）
		外国人が見た日本　日本人が見た外国
	国際	英語の文型について考えよう
		外国の文化や社会、日本とのかかわりについて
	地域	身近な地域の歴史や自然環境について考えよう
		少子・超高齢社会を考える～安楽死・年金・医療・働き方～
生活環境医療	生活	鉄道の街・新津駅の発車メロディーを考える
		子どもにとってよい絵本とは何か
		すぐにやる気を出すにはどうしたらよいか
		日本人は働き過ぎか？
	環境	プラスチックの研究
	医療・健康	ニュースポーツを考えよう
		医療技術の進歩と生命の尊厳について
自然科学	数学	テニス・スマートセンサーを活用したデータ分析
		折り紙を折って多面体を作る
	理科	近未来技術として実現可能なものを考える

＊学校資料を基に編集部で作成

のではなく、新たな問いを見つけることが目的だと、大学講義体験で話された先生がいました。『このリサーチクエスチョンを調べたら、新たな問いが生まれた。そこで2つめの問いを調べ始めたが、この段階で期限が来てしまった』と、自分たちの思考の過程を明らかにする発表であればよいと考えています」（平野先生）

リサーチクエスチョンの設定に苦労したり、当初の計画からずれてしまったりと、「失敗」と言えるような結果であっても、それは意義のある課題研究として発表するように指導している。

生徒の探究心を進路指導につなげる

進路指導の面では、各活動の振り返りやワークシートを1冊のファイルにポートフォリオとして蓄積し、指導に生かしている。

「次のステップに向かう資料としてポートフォリオを管理し、3年間で自分にどのような成長や変化があったのかを、自分自身で語れるようにしたいと考えています。効率的に蓄積するために、eポートフォリオの導入も検討中です」（齊藤先生）

また、探究学習と進路学習をつなげるために、ベネッセの「進路サポート」（＊1）も活用している。

「課題研究では、『こういう手段を講じ、こんな努力をした』といったプロセスを大切にすることが、汎用的な力の育成につながります。生徒のそうした姿をきちんと評価し、伸ばすことで、進路学習に向かう姿勢も主体的になっていくでしょう。発表の場などを通して、生徒の成長を後輩に伝えることも大事にし、学校全体で取り組みを深めていきたいと思います」（齊藤先生）

私の探究学習

◎「日本」分野

得た知識を基に仮説を立て、考えを広げる重要性を実感

2年 佐藤日向野（ひなの）さん（左） 吉田奈未さん（右）

佐藤さん 日本文学や日本史に興味があり、この分野を選びました。自分で調べて整理し、どうすれば伝わりやすいかを考えるのが好きなので、課題研究はとても楽しみでした。グループで話し合ううちに、ゲームを行う際のチーム分けでかけ声に地域差があることが話題になり、探究してみようと考えました。大変だったのは、何をどのように調べれば分かるのか、研究の道筋を考えることです。「これを調べると、こんな結論が出るのでは」といった仮説を何度も立てたことで、得た知識を基に考えを広げる力がついたと思います。

吉田さん 最初のリサーチクエスチョンを「チーム分けについて～新津高校を中心に」としたところ、先生から疑問文にするようアドバイスをいただきました。どのような疑問文が適切か悩みながら試すうちに、「チーム分けのかけ声の違いには何がかかわっているか～地域ごとの違いに着目して」とすると、自分たちが研究したいことがはっきり見えました。1つの考えで満足せず、いろいろな仮説を立てると考え方が広がることを体験しました。ニュースを見る時など、日常生活の中でも仮説を立てるよう心がけて、深く考える習慣を身につけたいと思います。

◎「数学」分野

多面体について探究し、数学的思考への関心が高まった

2年 黒谷友宥（ゆうすけ）さん（左） 落合隆斗（りゅうと）さん（右）

黒谷さん 課題研究はグループで行うので、1人で考えるよりも楽しく、助け合いながら進められて効率的でした。多面体を作る上で大切なのは、「こうしたら、こうなる」と、論理的に根気強く考えることだと学びました。例えば、12面体は5角形を組み合わせて作りますが、5面体の段階でつまずいて諦めたら、12面体は作れません。地道にステップを踏み、成果につなげていくことを体験できました。今後、そうした考え方を他教科の学習などにも生かしていきたいと思います。

落合さん 多面体の折り方を学んでから、「どうしたら半正多面体を折ることができるか」をリサーチクエスチョンとしてグループで研究を進めています。様々な多面体は全く異なる形に見えますが、最初にパーツとなる形を考え、それを組み合わせていくという、基本的な作り方は共通しています。思いつきで折り進めるのではなく、最初に仮説を立て、結果を予測してから取り組むことが大切になります。私は文系で数学があまり得意ではありませんでしたが、もっと数学的な思考力を高めていきたいという気持ちになりました。

＊1 ベネッセの教材の1つで、生徒一人ひとりの視野を広げ、将来の進路について考えるきっかけを与える教材。

実践事例２

茨城県・私立聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校

生徒が自ら発する「問い」を大切にし、探究し続ける姿勢を育む

文部科学省の「教育課程特例校」の指定を受け、8年前から女子教育プログラムを展開してきた聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校。そのプログラムの成果と課題を踏まえ、生徒に「探究の心」を育もうと、あらゆる教育活動の改革を進めている。「問い」と「協働性」の重要性を全教師で共有し、生徒が自由に問いや考えを発言できるよう、指導を工夫している。

「女性キャリア」の成果と課題を踏まえて改革を推進

茨城県南部の取手市に位置する聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校は、２０１０年度から、文部科学省の「教育課程特例校」の指定を受け、女子教育プログラム「女性キャリア」を推進している。それは、「女性として生き抜く力を身につける」をコンセプトに、中学1年次～高校3年次の週2時間、自己や社会への理解を深める探究学習、インターンシップなどを行うプログラムだ。高校3年次には、それらの集大成として、生徒個々に自分で課題を設定して調査・考察を行い、Ａ４判２枚程度の「卒業レポート」にまとめる。

湯澤義文副校長は、プログラム導入後の生徒や教師の変化をこう語る。

「『女性キャリア』での多様な体験を通して、自分の関心を深く追究したことがおそらく影響したのだと思いますが、理系学部を選ぶ生徒や、全国の国公立大学を志望する生徒が増え、進学先は一気に多様になりました。自分の関心を授業外でも探究する生徒が目立つようになり、元々、放課後などに個別指導を熱心に行う文化がありましたが、それが一層熱を帯びていきました」

そうした生徒の変容に応じて、授業でも探究的な学びを取り入れようという動きが現れ、同様の考えを持つ教師たちが互いの実践を共有する輪が広がっていった。その一方で、学校運営として、大学入試改革や次期学習指導要領への対応が検討事項に挙がっていた。

そうした背景から、18年度、「探究」「グローバル」「協働」を「新 取手聖徳ＳＴＹＬＥ」として掲げ、あらゆる教育活動において「探究の心」を育成する指導を、全校体制で推進していくこととなった。「自ら探究する生徒を育む」といった観点で、授業や定期考査、「女性キャリア」、学校行事、課外活動などの改革を進めている。その中心を担う教育開発部長の小林慎太郎先生はこう強調する。

「『女性キャリア』では成果も得られましたが、動機づけがうまくできていなかったため、自分が設定した課題でも深められず、レポート提出が目的化していたところもありました。今の指導で生徒が真に探究する姿勢を本当に育めているのかという問題意識が、今回の改革の出発点にあります。どのような問いであっても、自分の内面から出てきた問いだからこそ、生徒は自ら追究し、そこでの学びや経験が生きた資質・能力になると、全教師で共有しています」

大切なのは、成果ではなく「プロセス」

改革の柱の1つは教科指導だ。す

茨城県・私立聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校

◎教育理念は、「思いやる力」「かなえる力」「助け合う力」。「和」の精神の下、マナーや所作を学ぶ礼法、日本の伝統文化への理解を深める書道の授業のほか、全校生徒・教師が一堂に会して昼食を摂る会食がある。
◎設立　1983（昭和58）年
◎形態　全日制／普通科・音楽科／女子
◎生徒数　1学年約100人
◎2018年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道教育大、福島大、茨城大、東京藝術大に6人が合格。私立大は、獨協医科大、慶應義塾大、上智大、津田塾大、東京女子大、日本女子大、法政大、早稲田大、関西大などに延べ106人が合格。
◎URL　https://www.seitoku.jp/toride/
同校の取り組みの様子が分かる動画や資料等を、HPで随時公開予定。下記の2次元バーコードを読み取ってアクセスしてください。

聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校副校長
湯澤義文 ゆざわ・よしふみ
教職歴32年。同校に赴任して32年目（姉妹校勤務を含む）。

聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校
小林慎太郎 こばやし・しんたろう
教職歴7年。同校に赴任して6年目。教育開発部長。

聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校
亀川かすみ かめがわ・かすみ
教職歴5年。同校に赴任して5年目。進路指導部副部長。

聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校
栗原太郎 くりはら・たろう
教職歴4年。同校に赴任して4年目。教育開発部副部長。

べての教科の授業で探究的な学びを行うこととしている。そこで重視するのは、「問い」と「協働性」だ。

「探究学習というと、成果物を出すことに主眼が置かれがちですが、主体的に取り組んでいなくても質の高い成果物を出す生徒はいます。成果物は重要ですが、それが目標ではありません。自ら探究する姿勢を育むために、生徒が自ら問いを持ち、その解決に向けて必要となる他者との協働性を育むことを、最も大切にしています」（小林先生）

授業例を見ていく。進路指導部副部長の亀川かすみ先生は、担当する高校2年次の国語の授業で、『山月記』の本文を読んだ後、グループで疑問を出し合い、その中から1つを選んで話し合いを行った。疑問は「言葉の意味が分からない」といったレベルでもよいと、生徒に伝えた。

「例えば、『なぜ「虎」なのか』『袁傪は虎になった李徴をどう思っているのか』といった疑問が上がると、自分の考えを出し合って、物語を深く読み解いていきます。教科書を読めば分かることが疑問に挙がっても、教科書を再度読み、答えが書いてあることに生徒が気がつけばよいと考えています。どのようなレベルでも自分で問いを持って読み進めることが、深い思考、読み解きにつながるからです」

生徒自らが考えを深めていくためには、自由に発言できることが重要だと考え、高校1年次から協働学習の進め方を工夫する（**写真1**）。教育開発部副部長の栗原太郎先生は、担当する世界史の授業で、まず教科書を読み、その内容を自分の言葉で分かりやすく説明し合うペアワークを行う。そして、発言に慣れてきたら、4人グループの活動に移行する。

「最初から4人にすると沈黙する生徒が出てくるため、ペアワークから始め、安心して発言できる場なのだと実感させます。そうした雰囲気ができると小さな疑問でも率直に質問し、周りの生徒も真剣に答えるようになります」

写真1　協働学習を進めやすいよう、空き教室の机や椅子の配置を変え、静電気で貼れるホワイトボードも用意。対話がしやすい教室にした。

授業と連動して定期考査も変えようと、思考力・判断力・表現力等を総合的に評価する問題を配点の3割程度含めることを全教科の目標にした。授業が探究的でも、テストが知識を問うものばかりであれば、生徒は知識をただ暗記すればよいと捉えてしまう。指導と評価の一体化は重要だと考えたからだ。

例えば、亀川先生は、前述の『山月記』を扱った考査で、「授業で生徒から出てきた問いの中から1つを選び、選んだ理由と自分の考えを述べよ」という記述式問題を出した。

「自分にとってその問いがどういった意味があるのかを考え、問いに価値づけをすれば、問いを出す時に、単に疑問を列挙するのではなく、自分に価値のある問いを出せるのではないかと考えました」（亀川先生）

それらの問題の評価はルーブリックを作成して行うが、その際、探究学習の評価のために実施しているベネッセ「GPS-Academic」（＊1）のルーブリックが参考になったという。

＊1　ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）を記述式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

生徒同士のやり取りで探究学習の課題を練り上げる

「問い」と「協働性」は、あらゆる教育活動で重視されている。

中高の入学時に行う「SFC（＊2）」では、中高での学習方法の指導に加え、構成的グループエンカウンター（＊3）などを行い、自分の考えをはっきり言うことが全員の成長につながるという協働学習の意識を持たせる。その後、授業や面談などでも教師が何を発言してもよいと繰り返し伝え、生徒の発言をしっかり受け止めることで、生徒は次第に自由に発言するようになり、互いの発言を認め合うようになるという。

「女性キャリア」でも、各学年で学級のルールづくりなどを行い、協働性を高めていく。さらに、高校3年次で行う「テーマ別ゼミ」の前段として、高校2年次3学期に約10時間、各自が関心のある分野への考えを深める場を設けた。そこでは、心理、教育、理工など、関心がある分野が同じ生徒同士でグループとなり、例えば、その分野に関する疑問を、疑問に思う理由や疑問と社会との関係などとともに出し、それに対してメンバーが質問や意見を出し合うといった活動を行った。

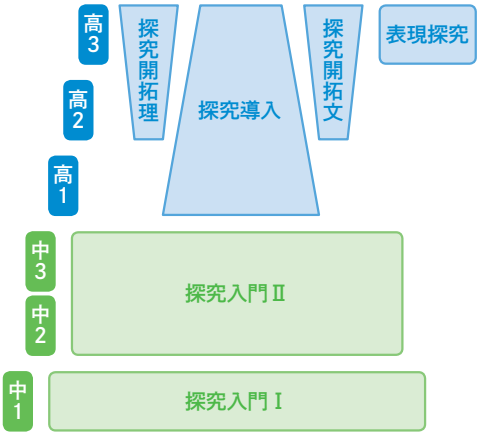
「それまで協働学習を繰り返してきた生徒たちですから、疑問や意見を出し合い、出された側もしっかり受け止め、『テーマ別ゼミ』での探究課題を何度も練り直していました。例えば、演劇教育から国際バカロレアにテーマを変えた生徒は、志望学部も変更していました。探究学習で重視するのは、生徒自らが意欲的に取り組むことです。『なぜそれを選んだのか』『関連することには何があるか』など、省察につながるような声かけをしています」（栗原先生）

レポートの提出期限は高校3年次2学期半ばだが、途中で中間発表を行い、生徒同士で相互評価を行う。その意見を受けて調べ直したり、再考したりするため、レポート提出は例年12月になる生徒が多いという。

生徒たちの様子を見て、柔軟に活動を変えていく

18年度から開講した「探究補講」は、自由参加の放課後講座（図）だ。

図　「探究補講」の講座



＊学校資料を基に編集部で作成

各講座を複数の教師で担当し、講座の内容を参加者に応じて検討する。例えば、「探究導入」の1回目には高校1～3年生の約20人が参加。アイスブレークの段階で異学年同士でも協働学習ができると感じ、予定していた場づくりの活動をせず、「浦島太郎」のアナザーストーリーをつくる活動を行った。ライティング・ワークショップの導入として、生徒の自由な発想を引き出すのがねらいだ。

「毎回、担当教師で振り返りを行い、次回の活動計画を練っています。その計画も、生徒が意欲的に活動できるよう、講座中にも担当者で話して柔軟に変えています。協働しながら講座をつくり上げることは純粋に楽しいですし、指導力を高める場にもなっています」（亀川先生）

写真2　数年前に職員室内に設けた生徒の学び合いのスペースは、連日、大勢の生徒が訪れて盛況だ。それを受けて、教師の学び合いのスペースも設けた。

教科を越えて実践や課題を共有する教員研修に転換

教員研修も「問い」と「協働性」を重視した内容に転換した。例えば、アクティブ・ラーニングをテーマにした研修では、事前に悩みを調査し、同じような悩みを持つ教師同士を1つのグループにして、悩みや実践内容を出し合って解決策を議論し、それらをまとめて全体で共有した。

また、職員室に教師用の学び合いのスペースを設けた（写真2）。

「学び続ける生徒を育てようとするならば、教師自身も学び続ける存在でなければなりません。職員室で

＊2　聖徳フレッシュメンズ・キャンプ。中学1年生と高校1年生が対象。　＊3　生徒同士が自己を開示し合う活動を通して、互いを認め合う意識を育むカウンセリング手法。

教師同士で話し込むことも多くなったので、腰を据えて話し合えるスペースを設けました」（栗原先生）

探究学習を支えるツールとしてICTを有効活用

指導改革の成果は生徒の姿に表れている。授業後も話し合いを続ける生徒たちの姿は日常的に見られるようになり、授業に関係なくテーマを決め、論文や書籍を読んだり、関係者に話を聞きに行ったりして、自分で探究を深める生徒もいる。学びの目的をつかんだ生徒は、学力が加速度的に向上すると、小林先生は言う。

「私たちが思い描くのは、入学時から正比例で学力が上がるのではなく、自分でドライブをかけてグンと伸びていく生徒です。問いや協働性を重視すると授業進度が遅くなる場合もありますが、後で生徒たち自身がばん回していきます」

今後は、生徒が成長を実感し、教師が指導に生かせるよう、探究学習におけるICTの活用も進める。

「ICTは探究学習を支える有効なツールだと考え、授業後も議論できるチャットや学習成果を蓄積するeポートフォリオなどの環境を整備しました。また、HP上で、生徒の様々な取り組みも発信していきたいと考えています」（小林先生）

同校では、生徒の9割が推薦・AO入試を受験する。探究学習を教育活動の軸とし、希望進路の実現に結びつけたいという思いが強くある。

「18年度の入学生から、選択科目を増やし、各自の関心に応じて学びを進められるカリキュラムに改訂しました。卒業後も自分で目標や課題を決めて学びを進めていく、そうした探究の心を育んでいきます」（湯澤副校長）

私の探究学習

自分とは違う意見があるからこそ理解を深められて面白い

3年 豊島（とよしま）すみれさん

「女性キャリア」のテーマ別ゼミで、私がテーマに決めたのは古文の中で最も好きな『とりかへばや物語』です。ストーリーの軸であるトランスジェンダーについて、時代ごとの受け入れられ方の変化を研究したいと考えました。しかし、この物語の研究はほかの古典文学に比べて進んでいないため、文献が少なく、テーマが成り立たない可能性が出てきました。そうした時には、周りの友人からのアドバイスがとても参考になりました。

実は、中学校でも協働学習をしていましたが、周りと違う意見を言うと反論されると思い、だんだん発言しなくなりました。でも、この学校ではどんな意見も尊重されます。1年生の頃は皆、どこまで言ってよいのか様子をうかがっていましたが、先生方が「思ったことを率直に発言していいんだよ」と言われるので、誰もが自分の思うことを発言するようになりました。私も自由に発言しますし、友だちから指摘をされても、その度に別の視点を得られるので、「意見が違うことが面白い」と思うようになりました。得た視点で再度読むと、新たな気づきがあり、物語の魅力をさらに知ることができます。いろいろな解釈があり、答えが1つではないことを考えるのは面白いと感じています。

在学中に課題に取り組みきれなくても学校のために今、動きたい

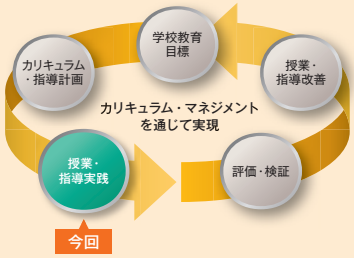
3年 山口真央さん

高校1年生の時、文化祭の出し物が実現の可能性を十分検討しないまま賛成多数で決まりそうになり、多数決という方法に疑問を持ち始めました。中学校時代から裁判を題材にしたドラマが好きだったこともあり、政治哲学者のハンナ・アーレントを中心に民主主義や全体主義などの本や論文を読み、たどり着いたのが「公共性」です。先生と裁判員制度について話していく中で、私の関心の共通点は多様性の受容や情報の透明性などの「公共性」にあるのではないかと気づきました。最近では、公共性の観点から、刑事裁判傍聴プログラムについて、法務省の方に話を聞きに行きました。大学でも、公共性の実現に向け、関連分野を探究する予定です。

今の課題は、明和会（生徒会）会則の改正です。明和会副会長を務めていますが、現在の選挙では、唯一の判断材料である立会演説から約1時間で投票しなければならず、公共性に欠けると思いました。選挙の変更には、生徒総会で明和会会則改正の賛成を得なければなりません。私と同じように考える後輩と、来年の生徒総会で議案を出せるよう準備を進めています。私の在学中には実現しなくても、後輩たちのために今、行動しなければと思いますし、公共性にもつながることだと考えています。

改革事例から導く！
「学校教育デザイン」を描く道標（しるべ）

CASE　改革事例



教育の不易と流行の視点で教育活動全体を見直し、指導・評価の改善を起点に改革

福岡県・私立筑紫（ちくし）女学園中学・高校

社会で活躍する卒業生から育成を目指す生徒像を定める

創立以来、福岡の地で理想の女子教育を追い求めてきた筑紫女学園中学・高校は、この数年、教育活動全体の見直しを進めてきた。松尾圭子校長は、その理由を次のように語る。

「『自律・和平・感恩』の校訓に示される本校の教育の不易は、これからも揺らぐことのないものです。その一方で、国の教育改革を受けて進めるべき、言わば教育の流行については、本校の教育活動の中にそれをどのように位置づけ、どのような資質・能力を生徒に育むのか、必ずしも明確ではありませんでした。そこで、本校の教育活動全体を総点検して、本校が育成を目指す資質・能力を明確にし、社会で自立できる生徒を育てたいと考えました」

同校は、2016年度に育成を目指す生徒像の議論を始めたが、様々な生徒像が挙がり、1つに定めることができなかった。そこでイメージしたのが社会で活躍する卒業生だ。彼女たちの共通点は何かを議論し、その結果、育成を目指す生徒像を「自己及び他者を理解することに努め、人と社会に寄り添うことのできる人間」と定めた。その上で、社会の変化や次期学習指導要領の内容、同校が抱える課題などを加味し、生徒に育む資質・能力を策定した（図1）。

図1

育成を目指す生徒像と資質・能力

本校教育の目指す筑女生像
自己及び他者を理解することに努め、人と社会に寄り添うことのできる人間

筑女生として身につけさせる資質・能力
身近なところに問題を見つけ、自他を見つめ（他を思いやり、自分が何ができるかを考える）、知識を用いて皆と協力して問題解決へと向かうことのできる力

資質・能力の詳細　知識・理解、思考力・判断力・創造力、表現力・発信力、協働力・傾聴力、計画力・実行力、主体性・積極性、振り返りを次につなげる力

＊学校資料を基に編集部で作成

新入生研修のグループ活動でルーブリックによる評価を体験

教育の軸を明確にした上で、17年度、教育活動を「学習指導」「キャリア教育」「人間性の育成」の3本柱で整理し、3年間の流れとともに、各取り組みや指導の関連性を明確にした「創"MIRAI"プログラム」を作成した。進路指導部長の友重雄一郎先生は、そのねらいをこう話す。

「これまで単発的に行っていたそれぞれの教育活動や指導のねらいを根本から見つめ直し、理想の生徒を育てるという明確な目的の下、それぞれにつながりを持たせて1つのプログラムに集約させていきました」

例えば、高校1年次4月に行う「新入生研修」（2泊3日）では、18年度から、高校生活や学習に関して説明する従来の内容に加え、高校3年間を通してどのような資質・能力をどのように身につけていくのかを実感させるため、大学のアドミッション・ポリシー（以下、AP）を読み解くグループ活動を取り入れた。その活動では、生徒は大学名が伏せられた状態で複数の大学のAPを比較し、各大学の特徴や共通点などの分析を通じて、広く求められる人材像や自分が伸ばす必要があることなどを話し合ってまとめ、発表。さらに、18年度、全教科で導入したルーブリックを同活動でも用いて、各自で取り組みを振り返り、自己評価を行った。進路指導部の毛利祐貴先生はこう説明する。

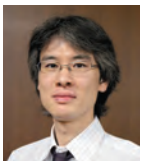
＊「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。

筑紫女学園中学・高校校長
松尾圭子 まつお・けいこ
教職歴35年。同校に赴任して1年目。

筑紫女学園中学・高校
小森あずさ こもり・あずさ
教職歴30年。同校に赴任して27年目。高校1学年主任。生徒指導部。

筑紫女学園中学・高校
藤井哲史 ふじい・てつふみ
教職歴24年。同校に赴任して15年目。教務部長。

筑紫女学園中学・高校
友重雄一郎 ともしげ・ゆういちろう
教職歴23年。同校に赴任して23年目。進路指導部長。



筑紫女学園中学・高校
毛利祐貴 もうり・ゆうき
教職歴14年。同校に赴任して13年目。進路指導部キャリア課長。

「ルーブリックで示した各資質・能力の到達目標について説明した上で、自分たちの活動を振り返らせました。各教科の授業でも、それと同じようにルーブリック（図2）を使って評価し、学習・活動履歴をポートフォリオとして管理することを説明し、3年間の学習や生活の見通しを持たせました」

ルーブリックの導入で授業改善がさらに進む

そのようにして、3年間の目標と評価の手法を入学直後から意識させることで、生徒は身につけるべき資質・能力を意識しながら学習に取り組むようになり、自己評価の記入欄には「○○はできたが、△△がまだ苦手」など、自分自身を客観視できている記述が多く見られるという。

ルーブリックを使った評価は、指導と評価の一体化を進めるため、全教科で単元ごとに行うが、実際に導入し、授業の改善と表裏一体の関係にあることを実感したと、高校1学年主任の小森あずさ先生は語る。

「資質・能力をしっかり伸ばそうと考えると、各単元の授業の構成を見直す必要が出てきます。以前と同じ教材を使う場合でも、活動内容や発問が生徒の思考などを促すものに変わりました」

また、18年度中に「Classi」（＊1）のeポートフォリオを導入する予定であり、目的達成の手段としてICT活用を推進していく。

今後は課外活動の見直しも進めると、教務部長の藤井哲史（てつふみ）先生は語る。

「学校行事や部活動などの位置づけを明確にした上で、それらの活動のあり方を捉え直し、教育活動全体で効果的に資質・能力を伸ばすカリキュラム・マネジメントを実現させたいと考えています」

図2

単元ごとのルーブリック（例）　高校1年次「化学基礎」の「酸と塩基の反応」

教科ルーブリック　高1　化学基礎　単元ルーブリック

年　組　番 氏名

記入日　年　月　日

単元目標
◆ 酸と塩基の反応
① 酸・塩基の定義や酸性・塩基性について，その本質が何であるかを説明できるようになる。
② 酸や塩基の価数，強弱の分類法を，化学式や電離度に基づいて説明できるようになる。
③ pH の定義を理解し，その計算方法を習得する。
④ 酸・塩基の反応を理解し，中和するときの量的関係とその計算方法を習得する。
⑤ 塩の定義と分類方法，塩の水溶液の性質，塩が起こす反応を理解する。
⑥ 中和滴定により，未知の濃度の酸や塩基を求めることができることを，実験操作を含めて理解し，その計算方法を習得する。

評価項目			評価基準（「A」が現段階での到達目標のめやす）				自己評価の記入欄	
			現段階の目標の先まで到達している（目標以上のレベルに到達している） S：★★★	ここで身につけて欲しいことができている（目標に十分到達している） A：★★	最低限のことができている（目標に一応到達している） B：★	最低限のことができていない（目標到達に努力を要する） C：★	S・A・B・C	評価の判断理由
学	知識（＋基礎的技能）	知識・理解	代表的な酸・塩基の名称と化学式，係数や強弱，電離や定義について説明できる。	代表的な酸・塩基の名称と化学式が書け，係数や強弱で分類できる，電離や定義まで理解できている。	代表的な酸・塩基の名称と化学式が書け，係数や強弱で分類できる。	代表的な酸・塩基の名称と化学式が書け，係数や強弱で分類できない。		
			pH と $[H^+]$，$[OH^-]$，K_w の関係性と計算方法の手順について説明できる。	pH と $[H^+]$，$[OH^-]$，K_w の関係性を理解し，計算することができる。	pH と $[H^+]$，$[OH^-]$，K_w の関係性を理解できている。	pH と $[H^+]$，$[OH^-]$，K_w の関係性を理解できていない。		
			酸・塩基の反応について，反応式，塩の分類，量的関係の計算，滴定操作の原理について説明できる。	酸・塩基の反応について，反応式，塩の分類，量的関係の計算に加えて，滴定操作が理解できている。	酸・塩基の反応について，反応式が書け，塩の分類ができ，量的関係の計算ができる。	酸・塩基の反応について，反応式が書け，塩の分類ができ，量的関係の計算ができない。		
		思考力・判断力・創造力	何を求めたいかに応じて，どのような滴定実験をすればよいかを考えることができ，それを説明できる。	習得した知識を基に，滴定実験に取り組み，結果について考察することができる。	酸と塩基の知識を，身近な物質や身近な事例と関連付けることができる。	酸と塩基の知識を，身近な物質や身近な事例と関連付けることができない。		
			自分の意見や考えを，相手の理解度に応じて説明する。	自分の意見や考えを，理由や根拠を明確にして説明する。	自分の意見や考えを，他者や集団の理解に応じて説明する。	自分の意見や考えを，他者や集団の理解に応じて説明する。		

＊学校資料をそのまま掲載

＊1　株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

福岡県・私立筑紫女学園中学・高校

◎浄土真宗の教えに基づく人間教育を建学の精神とし、それを象徴的に表した「自律・和平・感恩」を校訓として掲げる。一貫して知と心を育てる女子教育を実践し、1991年に中高一貫教育を開始した。
◎設立　1907（明治40）年
◎形態　全日制／普通科／女子
◎生徒数　1学年約500人
◎2018年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大、佐賀大、長崎大などに52人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、筑紫女学園大などに延べ627人が合格。
◎URL　https://www.chikushi.ac.jp/hsc/j/

導かれた道標

指導と評価を一体化させ、それを生徒と教師が共有することで、授業改善が進む

主体的・対話的で深い学びへ

実践 アクティブ・ラーニング

英語

生徒に自分の意見を表現させる活動中心の授業で、4技能をバランスよく伸ばす

授業ハイライト

●2年生「コミュニケーション英語Ⅱ」で、人種差別をテーマに人権問題について考える「The Fight for Rights」の全7時間のうちの1時間目。本文を読み、人権について自分の意見を持つ。授業では教師も生徒もすべて英語を使う。（P.27に単元の指導計画を掲載）

15:05 導入

まず、牧野先生は、大きな蛇口の横にある粗末な蛇口を使う黒人の写真をプロジェクターに映し、黒人が粗末な蛇口の方を使う理由を生徒にペアで話し合わせた。先生に指名された生徒が「大きな水道は白人しか使えないから」など、英語で述べた。次に、人種差別を表す看板を映し、20世紀前半のアメリカにおける差別の実態を伝えた。

福井県立敦賀（つるが）高校
牧野剛士 まきの・たけし

教職歴15年。同校に赴任して9年目。
進学指導部。英語科担当。
小学校教員としてキャリアをスタート。
5年前の大学院進学が転機となり、
アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に取り組む。

牧野先生のアクティブ・ラーニング

大学院進学を機に、自身の指導を見直した

初めは小学校の教師だった牧野剛士先生は、高校の英語科教師に転身した直後、自身が高校時代に受けていた講義形式で訳読中心の授業を行っていた。「そうした授業で、生徒が実践的な英語を身につけることができるのかという不安がありましたが、どうすればよいのか手探りの

福井県立敦賀高校

◎敦賀高等女学校、敦賀商業補修学校、県立敦賀中学校等を母体に創立。文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」アソシエイト校、OECD「地域創生イノベーションスクール2030」の福井クラスターとして、環境・エネルギー分野の探究学習に力を入れる。
◎設立　1948（昭和23）年
◎形態　全日制／普通科・商業科・情報経理科／共学
◎生徒数　1学年約210人
◎2018年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東京大、福井大、大阪大、神戸大、広島大、福井県立大などに88人が合格。
私立大は、慶應義塾大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ202人が合格。
◎URL　http://www.tonkou.ed.jp/

15:17 黙読、True or False

生徒全員が起立し、各自で本文を黙読し、読み終わった生徒から着席した。次に、ワークシートにあるTrue or Falseの3問にペアで取り組んだ。解答者はジャンケンで決める。答える際には「最初の文章はT、なぜなら……」と、T or Fの根拠を本文の中から示すのがルールだ。そして、先生に指名された数人の生徒が3つの問いの答えを英語で発表した。

15:10 本文のリスニング

牧野先生は、今のアメリカは多様な人種が同じ社会に共存すると説明し、「きっかけをつくったのは誰か」と問いかけてから、本文のリスニングを行った。本文の内容は、バスに座っていた黒人女性が運転手から白人に席を譲る（stand）よう言われて拒否し、刑務所に入れられたという話だ。生徒はCDから流れる音声を2回聞いた後、本文の内容をペアで確認し合った。

状態でした」と、牧野先生は当時を振り返る。

活動主体の授業を模索する中、転機となったのは5年前、大学院生になったことだ。1年間休職し、母校の福井大学で恩師から英語の指導法を学び直した。さらに、先進校の授業を見学し、外部の英語指導の研究会にも積極的に参加して、知見を広げていった。そして、大学院生2年目は、教壇に立ちながら論文を書いて修士課程を修了した。

大学院時代に牧野先生が学んだことは、授業で生徒に自分の意見や思いを表現させれば、自然に英語力が身につき、そして、授業だからできる学習をさせてこそ、思考力を高められるという指導だった。大学院での経験を踏まえて、4技能のバランスのよい習得と生徒の意見や思いを大切にする、現在の授業スタイルが生まれた。

思考の活性化・深化への配慮

授業の最初と最後に必ず英語で意見を述べさせる

生徒の思考力を高めるために牧野先生が最も重視しているのは、生徒に自分の意見を持たせることだ。そこで、毎回必ず、授業の最初と最後に、生徒が自分の意見を表現する時間を設けている。今回の授業では、導入時に人種差別を象徴する写真を見せて生徒同士で話し合わせ、授業の後半では自分が本文に登場した黒人女性の立場ならどうするのかを、まず個人で考え、次に3人1組で交互に意見を述べさせた。自分の言葉で語ることによって、実践的な力を身につけ、併せて人種差別を自分事として捉える感性を養うというねらいがある。

「日本語においても、人は自分の意見や思いを言葉にすることで言語能力を獲得してきたはずです。英語でも、自分の意見を述べさせることで実践的な語学力が身につくと考えています」（牧野先生）

そうした活動の鍵は、生徒から多様な意見が出てくる問いを投げかけることだ。今回も、差別に対する怒り、悲しみといった感情のほかに、人種差別は当時の常識（Common Sense）だから何も感じない（Nothing）といった意見が挙がった。そうした多様な意見に触れることによって、生徒が自身の考えを深めていくことも、授業のねらいだ。

家でできることは家でやる、授業だからこそできる学習を重視

授業の最後に、問いについての自身の意見を英文で改めて書かせることも、思考を深めるための工夫だ。ペアやグループでの活動を踏まえて、最終的には自分で考えることで、洗練された英文を書けるようになるという。

その際に使うのは、A4判のノートを半分に裁断した「think & writeノート」だ。A4判では英文をたくさん書いても余白が生まれ、物足りなさを感じてしまう。そこで、ノートを小さ

15:42 オピニオンをノートにまとめる

授業の最後に、本時の活動について、①オピニオン、②発音・声量、③コミュニケーション、④会話のそれぞれについて3段階で自己評価を記入。そして、何を感じ、どう行動したかの問いについて、全体発表の意見も参考にしながら、自分の意見をノートに書いた。ノートは牧野先生に提出。後日、牧野先生は添削して返却する。

15:30 オピニオンをグループでシェア

自分が黒人女性の立場だったら、何を感じ、どう行動したか。理由を含め、個人で1分間考えた後、3人1組になり、1人1分間で意見を述べ合った。そして、牧野先生に指名された数人が発表。感じたことは「sad」「angry」「nothing」が挙げられ、行動については全員が「stand」と回答。その理由は「刑務所に入るのは嫌だから」「当時の常識だから」と英語で説明した。

くし、そこにぎっしり書かせることで、生徒が達成感を得られるようにしている。

また、生徒が英語を使う時間を多くするため、牧野先生は授業で使うワークシートを事前に配布し、本文の通読や新出単語の確認、ペアワークで行うTorFの準備など、生徒に予習をさせている。新出単語やイディオムの解説はワークシートに書いておき、授業での説明は5分程度で終わらせ、時間がなければ割愛する。

「1人でもできる学習は自分自身で行い、授業では友人とのコミュニケーションなど、1人ではできない学習に時間を充てるようにしています」

場づくりへの配慮

語数を増やすことを意識させ、発話への積極性を引き出す

今では、生徒は自然に英語を話したり書いたりしているが、入学当初は積極的に英語を使う姿勢が見られなかった。そこで、牧野先生は、生徒が文法の間違いや発音の良しあしを気にせず、積極的に英語を使える環境づくりを心がけてきた。

その工夫の1つが、発話語数への意識を持たせることだ。3人1組でグループワークを行う際、1人目は自分の意見を述べるスピーカー、2人目はそれを聞くリスナー、3人目はスピーカーの発話の語数を数えるカウンターとする。リスナーは、スピーカーの発言を聞き、言葉に詰まった時には質問を投げかけて、話が続くようにする。そして、カウンターは、スピーカーが1分間に話す英文の語数を数える。

「語数を数えることで、スピーキング力をもっと高めよう、内容の濃い意見を言おうという意欲が喚起されることを期待しています」

1年次からオール・イングリッシュで話すよう促してきたことも、工夫の1つだ。生徒が話しやすいよう、難しい単語や文法を使わず、自分の知っている英語で話すようにと言い続けてきた。そして、生徒の発言がたどたどしく、単語の羅列であっても、牧野先生は細かな文法の間違いを指摘せず、生徒が伝えようとしていることをくみ取り、フォローする。それらの支援を地道に繰り返すことで、生徒は抵抗なく英語を話せるようになっていった。

成果と課題

生徒主導で学びを深める活動を取り入れていきたい

最大の成果は、生徒が積極的に英語を使って活動するようになったことだ。スピーキングやライティングでの語数が増え、1年生から牧野先生の授業を受けてきた生徒の多くが、4技能すべてが伸びていると実感している。牧野先生が以前に担当した学年では、1年次から2年次にかけての1年間で、「GTEC」のグレード5

単元の指導計画

【教科・科目】英語・コミュニケーション英語Ⅱ　**【単元・作品】**Chapter 4『The Fight for Rights』**【設定時数】**全7時間の中の1時間目
【単元目標】人種差別についての歴史を理解し、「人権」について自分の意見・考えを英語で表現できる。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	Part1 アメリカで人種差別がなくなっていったきっかけ	①リスニング・リーディングを通して、Part1 の内容を理解できる。【知識、技能】②ローザの立場になって考え、自分の意見を表現できる。【技能、思考力、表現力、協働性】	①アメリカでは人種差別が行われていた事実を知り、差別解決のきっかけをつくった人物について学習することを知る。②リスニング・リーディングを通して、Part1 の内容を理解する。③自分がローザの立場だったらどうしたのかを話し合う。④自分の意見を「think & write ノート」に書く。	【主体的な学び】画像を用いた導入で、人種差別の歴史について興味・関心を持たせる。コミュニケーション活動後の自己評価シートへの記入。【対話的な学び】ペアワークを多く取り入れ、スピーキング・リスニングの機会を増やす。コミュニケーション活動では、自己評価シートの項目を意識させる。【深い学び】登場人物の立場になって考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。	・ワードカウンター ・ワークシート ・think & write ノート
2	Part1 と、Part2 ローザの事件と黒人解放運動の始まり	① Part1 で出てきた表現を理解できる。【知識】②本文の意味を意識しながら、音読活動ができる。【技能、表現力】③ローザがバスの席を立たなかった理由について、自分の意見を表現できる。【技能、思考力、表現力】	① Part1 で用いられている新出の英語表現の解説を聞く。②意味を意識しながら、音読活動を行う。③ Part2 の前段階として、ローザがバスの席を立たなかった理由を考え、意見を発表し合う。	【対話的な学び】ペアワークを多く取り入れ、スピーキング・リスニングの機会を増やす。コミュニケーション活動では、自己評価シートの項目を意識させる。【深い学び】登場人物の立場になって考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。	・ワークシート
3	Part2 ローザの事件と黒人解放運動の始まり	①リスニング・リーディングを通して、Part2 の内容を理解できる。【知識、技能】②当時の黒人の立場になって考え、自分の意見を表現できる。【技能、思考力、表	①リスニング・リーディングを通して、Part2 の内容を理解する。②自分が当時の黒人だったら、ボイコットに参加したかについて話し合う。③ Part2 で用いられてい	【主体的な学び】コミュニケーション活動後の自己評価シートへの記入。【対話的な学び】ペアワークを多く取り入れ、スピーキング・リスニングの機会を増やす。コミュニケーション活動では、自己評価シートの項目を意識させる。【深い学び】登場人物	・ワークシート
6	Part4 ローザから若者へのメッセージ	①リスニング・リーディングを通して、Part4 の内容を理解できる。【知識、技能】②「差別をなくすために自分たちができること」について考え、自分の意見を表現できる。【技能、思考力、表現力、協働性】③ Part4 で用いられた表現を理解できる。【知識】④本文の意味を意識しながら、音読活動ができる。【技能、表現力】	①リスニング・リーディングを通して、Part4 の内容を理解する。②「差別をなくすために自分たちができること」について考え、話し合う。③ Part4 で用いられている新出の英語表現についての解説を聞く。④意味を意識しながら、音読活動を行う。	【主体的な学び】コミュニケーション活動後の自己評価シートへの記入。【対話的な学び】ペアワークを多く取り入れ、スピーキング・リスニングの機会を増やす。コミュニケーション活動では、自己評価シートの項目を意識させる。【深い学び】「人種差別の歴史」から「身近に存在する差別」に話を移し、「差別」を自分たちの問題として考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。	・ワードカウンター ・ワークシート ・think & write ノート
7	まとめの英作文	①「差別をなくすために自分たちができること」について、クラスメートの意見を理解できる。【技能、多様性、協働性】②「差別をなくすために自分たちができること」について、自分の意見を 80 語程度で書くことができる。【技能、思考力、表現力】	①ペアワーク→グループワーク→クラス全体での発表（グループ代表者）といった流れで、前時に考えた「差別をなくすために自分たちができること」を共有する。②「差別をなくすために自分たちができること」について、自分の意見を 80 語程度で書く。	【主体的な学び】「差別をなくすために自分たちができること」について多様な考え方があることを知る。【対話的な学び】ペアワーク→グループワーク→クラス全体での発表（グループ代表者）といった流れで意見を共有し、自分の意見を話したり、他者の意見を聞いたりする機会を増やす。【深い学び】「差別」を自分たちの問題として考えさせる。様々な意見を発表させ、それを教師が板書し、多様な考え方があることを学ぶ。様々な意見を参考に自分の考えをまとめ、書くことで自分の意見を整理する。	・英作文

＊牧野先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全7時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（https://berd.benesse.jp/）からダウンロードできます。「HOME →教育情報→高校向け」でご覧ください。

以上が33人増加した。

今後の課題は、生徒主体の活動を一層増やすことだ。

「教師主導の場面がまだ多いので、例えば、4人1組となり、生徒が役割を分担して、探究的な学びを進めたり、生徒主導でディスカッションを行い、思考を深めたりする活動を取り入れたいと考えています」

「まだまだ手探りの状態」と牧野先生は言う。4技能の向上と思考力を育むための試行錯誤は続く。

生徒の声

石原尚昌（なおあき）さん　英語力が伸びたのは、毎回授業で自分の考えを英語で話したり書いたりしてきたからだと思います。文法の正確さが気になって英語を話せない時があるので、自信を持って思いを伝えられるよう、文法力も高めていきたいです。

松葉康佑（こうすけ）さん　無理に難しい表現を使わず、自分が伝えやすいように話したり書いたりすればよいという牧野先生のアドバイスを聞き、英語を使うことへの抵抗感が減りました。中学時代と比べ、4技能のすべてが伸びていると感じています。

松本聖矢さん　ペアワークでは意見を述べ合うことが多く、自分とは異なる考え方に触れられるのが面白いです。発表の時には、英語がたどたどしくても、牧野先生がフォローしてくださるので、失敗を恐れずに英語を使えるようになりました。

主体的・対話的で深い学びへ

実践 アクティブ・ラーニング

世界史

ペアワークや音読などの言語活動、教科を横断した問いかけで、生徒の思考を広げ、深める

15:20 授業開始

授業ハイライト

●人間探究科3年生の学校設定科目「世界史実践」の「イギリスの覇権と欧米の国民国家建設」を学ぶ全9時間の8時間目後半～9時間目前半。ペアワークを主体に、フランス・アメリカにおける国民国家の形成について学んだ。（P.31に単元の指導計画を掲載）

授業前の休み時間に、生徒が学習の舞台となる北アメリカの地図を黒板に描き、生徒同士で正確かどうかを指摘し合った。地図の板書は輪番制だ。次に、ペアとなるよう机をつけ、その真ん中に資料等を置いた。授業が始まると、吉谷先生は「教科書と資料集は何ページから？」と質問し、「素早く答えられると、参照の力がつくよ」と励ました。

京都府・京都市立堀川高校
吉谷智美 よしたに・ともみ
教職歴16年。同校に赴任して9年目。
地理歴史・公民科担当。
現在の形式での授業の実践は、約12年目となる。

吉谷先生のアクティブ・ラーニング

世界史を心から楽しみ、歴史を俯瞰して考える視野を育む

吉谷先生が自身の授業改善に取り組み始めたのは、教職4年目のことだ。以前の授業では、生徒が教師の解説や板書をノートに写すことが中心で、集中が続かず、私語も見られたという。

「生徒の心に残る授業を目指して、先輩の先生方の指導をまねたり、アドバイスを受けたり

京都府・京都市立堀川高校

◎学校の最高目標は「自立する18歳の育成」。1999年度に専門学科「探究科」が設置され、普通科・探究科ともに基礎的な探究能力の育成と、進路実現に向けた確かな学力を培う独自の教育活動を展開する。
◎設立　1908（明治41）年
◎形態　全日制／普通科・人間探究科・自然探究科／共学
◎生徒数　1学年約240人
◎2018年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大などに204人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ345人が合格。
◎URL
http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/horikawa/

15:35 フランス第３共和政

続いて、フランス第３共和政についての学習。吉谷先生は、資料を見せたり、歴史のエピソードを紹介したりしながら、テンポよく解説。さらに、既習内容を思い出させたり、資料や地図を確認させたりする質問をこまめに投げかけ、ペアで確認させた。生徒の視線は、先生やペアの相手、教科書など、常に動いている状態だった。

15:30 フランス第２帝政

前時の復習後、フランス第２帝政の学習に入った。授業は毎回、生徒が教科書の段落や一文を音読し、吉谷先生が該当箇所を解説する流れで進む。音読は、先生が代表者を指名したり、ペアでじゃんけんに勝った生徒が読んだりと、形態は様々だ。先生は、ナポレオン三世が登場する現代文の評論について触れるなど、他教科と結びつけて解説した。

して、授業改善を進めてきました」

転機となったのは現任校への赴任だ。同校では「自立する18歳の育成」を学校の最高目標に掲げ、3年間の全教育活動で生徒を成長させるカリキュラム・マネジメントに注力する。吉谷先生はその中で世界史が果たす役割を考えた。

「世界史の授業を通して、先人の決断の積み重ねが歴史を形作ってきたことを実感させることで、現代を生きる私たちの決断の大切さに気づき、自分の言動に責任を持つようになると考えました。そこで、授業では『だから、今の世界はこうなっているのか』と、納得できる体験を多く持たせるようにしています」

また、異文化や多様性を理解して受け入れる姿勢の涵養や考えを的確に伝える言語活用能力の育成も、世界史の役割と捉え、力を入れている。

思考の活性化・深化への配慮

教科書の読解をベースに思考を促す発問をこまめに入れる

授業は、教科書の読解をベースに展開する。

「以前は、私が整理した内容の解説だけをしていましたが、先輩の先生から『それでは生徒が復習しづらいと思う』と言われました。そこで、生徒が自分1人でも考えながら学習できるよう、教科書に沿って授業を進めることにしました」

授業では、生徒が教科書を音読する場面が何度もある。授業冒頭で授業の全体像を把握するために学習範囲のすべてを読んだり、途中で重要な箇所を読んでポイントを押さえさせてから解説をしたりと、そのパターンは様々だ。

「声に出すことで頭が働きやすくなり、最初に概要を把握させることで、その後の解説も生徒の深い理解につながります。また、難解な漢字や長いカタカナの語句は、スラスラ読めるようになると、知識の定着もしやすいようです」

そして、解説には生徒の思考を活性化させる様々な発問を織り交ぜ、授業中、ずっと考えさせるようにしている。今回の授業では、フランス第2帝政の学習に入る際、「1848年に起こった革命は?」「その時にできた政治の体制は?」など、復習の質問を投げかけ、まず既習内容を思い起こさせ、次の学習内容につないでいった。さらに、フランスの自由主義では「どんな人が自由主義者になったと思う?」と発問し、事象の背景を考えさせてから解説した。

同校では、普段から教科を問わず、教師間で授業内容や生徒の様子について情報交換し、それを授業に還元するなど、教科間の関連を意識した指導を展開している。今回の授業で登場したナポレオン三世は、同時期に現代文の授業で扱う丸山眞男の評論にも出てくると現代文の教師から聞き、吉谷先生は現代文の授業でも教科書をしっかり読むように働きかけた。さらに、アメリカの南北の産業構造を地理の気候条件に結びつけて説明した。他の教科の授業でも、同様に教科を横断した発問が頻繁にあるため、生徒

16:00 アメリカの国民国家の成立

アメリカで国民国家が形成された経緯について学習した。吉谷先生が考える視点を提示し、ペアで意見を交換して考えを深め合った。例えば、「ペアで教科書を読み、米英戦争が経済的独立につながったと判断できる箇所を探して」と、学び合いを促した。生徒たちは教科書の内容を整理し、説明し合った。そうした活動が授業時間の終わりまで続いた。

15:45 アメリカの産業構造

アメリカの地域における産業構造に関する学習に移行。吉谷先生は、「アメリカの統合を象徴するものは何だと思う?」と質問し、アメリカ民謡「線路は続くよどこまでも」をカセットから流して、学習のイメージを持たせた。アメリカの学習に関するプリントが配布され、生徒は先生の解説を聞きながら、プリントに重要事項とメモを適宜書きとっていった。

は自分たちで学習内容の関連性を見つけ始めると言う。言語活用能力の育成に向け、個別の論述指導にも力を注ぐ。定期考査前、生徒は数十の問題の中から10題を選んで論述し、特に力を入れた3題にマークをつけて提出する。吉谷先生はそれらを添削して返却する。

「史実の正確さに加え、設問の意図を捉えた記述かどうかも重視します。例えば、『ルターの宗教改革の展開を説明せよ』という設問では、宗教改革ではなく、ルターのしたことを答えたために論旨がずれた記述になる場合があります」

1年次の「世界史A」の授業から、そのように論述問題に取り組ませ、「世界史は暗記科目」という生徒の思い込みをぬぐい去る。

「知識は説明できなければ役立たないことを、生徒は次第に理解します。そうすると、『中学校で覚えた内容は、こういうことだったのか』と気づき、世界史の楽しさを感じていきます」

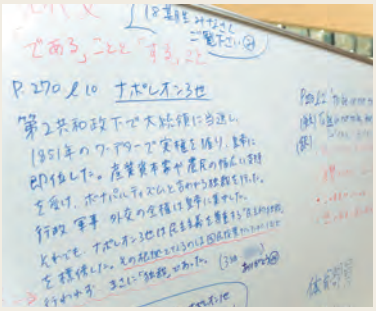
場づくりへの配慮

ペアで補い合いながら新たな気づきや考えの広がりを得る

吉谷先生は、ペアワークを主体に授業を進める。ペアの生徒同士で机をつけ、その真ん中に教科書や資料を置いて一緒に見ながら話す。

「1人で音読するよりも聞く相手がいる方が、明瞭に読もうという気持ちになります。考える場面でも、相手に伝えたいという意識があると一生懸命に考えます。相手の意見を参考に考えを広げ、新しい見方に気づくよさもあります」

生徒は、先生からの指示がなくても、ペアの相手と相談しながら学習を進めていた。先生の解説を聞き逃したり、理解できなかったりしても、ペアで補い合えるため、授業についていけないという生徒が少なくなる。教師が生徒の学習活動により広く目配りできるだけでなく、授業のスピードを上げられる点も利点だと言う。



廊下にあるホワイトボードを活用し、生徒が世界史の発展的な内容について自由に議論。この日は、ナポレオン三世に関して、現代文の授業で学んだ丸山眞男の評論との関連を解説していた。

成果と課題

多面的な思考力を伸ばし、事実の背景に目が向くように

そのような授業にしてから、生徒の知識の定着が高まっている。さらに、吉谷先生は多様な場面で生徒の思考の深まりを感じるようになった。

「3年生になると、多くの生徒は教科書をうのみにせず、『ここはさらっと書かれているけれど、具体的には何があったのだろう、どういう

単元の指導計画

【教科・科目】人間探究・世界史実践　（学校設定科目）　**【分野・単元】**イギリスの覇権と欧米の国民国家建設
【テーマ・作品】「国民」とは誰のことか、「自由」とは誰の自由か　**【設定時数】**全９時間中の８時間目の後半～９時間目の前半
【単元目標】18 ～ 19 世紀の欧米の経済的・政治的変革から産業社会と国民国家の形成を理解する。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	イギリスの覇権と自由主義	イギリスが産業革命で形成した競争力を基盤に、経済・政治面で自由主義改革を行ったこと、アイルランド人はそのイギリスの労働力の一部となり、発言権を得ていったことを理解している。【知識、思考力】	①ナポレオン戦争の影響、及び「国民」「自由」を考える単元であることも確認する。②兄弟げんかを例に、重商主義と自由主義の違いについて考え、理解する。③イギリスによるアイルランド併合を、「国民国家」形成の観点から考える。	【主体的な学び】①全体音読では、誤読や読みづらい語句がないかに留意。②年度当初に、音読や地図描画には生徒の弱点を把握できるメリットがあることを共有。【対話的な学び】①音読やダイアローグをペアで行う。②生徒が輪番で黒板に地図を描く。③ペア及び全体交流の時、ほかの生徒の発言を楽しめているか。④音読時、相手に読んで聞かせるように留意。⑤人物の図像や地図などをペアで確認する時、協力する姿勢があるように留意。【深い学び】①「自分より強い相手とけんかする時、ルールはほしい？　その逆なら？」②自由主義を強く志向する者は、その分野における優位を確信している傾向があるという点に留意させ、身近な例や現代の貿易交渉などにその事例があることに気づかせる。重商主義との比較にも留意。	・小テスト ・定期考査 ・論述課題 ・授業の感想
2	ウィーン体制の成立、ラテンアメリカの独立、ギリシア独立戦争	19 世紀前半、ヨーロッパをフランス革命前の状況に戻そうとするウィーン体制が成立したが、その体制は自由主義・国民主義運動と大国間利害対立によって揺らい	①ナポレオン戦争の影響を確認する。②ウィーン議定書の内容を資料集・地図で確認する。③ラテンアメリカの社会構造と独立運動の関係を整理する。④オスマン	【主体的な学び】①年号はしつこく発問する（年号比較は歴史的思考の必要条件）　②必要に応じてプリントの構成について説明し、１人で復習する時に迷わないようにガイドしておく。【深い学び】「自由主義と国民主義が、なぜウィーン体制にとって都合が悪いのか」を捉えさせる。	
8	イタリアとドイツの統一、フランス第２帝政から第３共和政	ウィーン体制崩壊で独伊で上からの国家統一の動きが加速し、プロイセン中心のドイツ統一も普仏戦争の勝利で完成したこと、またフランス第２帝政による対外戦争の失敗と第３共和政成立の流れについて理解している。【知識、技能、思考力、判断力】	① 1848 年までの独伊における自由主義・国民主義運動を振り返る。②地名が出てくるごとに地図上で確認する。③ビスマルク外交とその結果を地図上で確認する。④第３共和政下の政治的不安定さを「思想の定規」と教科書読解で理解する。	【主体的な学び】①「今日もいろいろややこしい。でも人間が面白い。頑張ろう」と確認。②「美しく青きドナウ」を聞かせ、文化史を歴史の事件と関連づけられるよう留意する。【深い学び】①「なぜオーストリア、ローマ教皇がイタリア統一に反対するのか」②「なぜ大ドイツ主義と小ドイツ主義が対立するのか」③「ビスマルク外交にとって最も大切な相手はどこか」	・小テスト ・定期考査 ・論述課題 ・授業の感想
9	アメリカの拡大と国家統合	領土拡張が続くアメリカで移民による西部開拓が進む一方、先住民への迫害が起きたこと、南北戦争が黒人奴隷制の是非や貿易政策を争点に発生し、その後、工業国として成長していく流れを理解する。【知識、技能、思考力、判断力】	①自然条件からアメリカ北部と南部で産業構造に違いがあったことを振り返る。②西部開拓の進展を地図上で確認する。③南北戦争の死者数などを資料集を用いて確認する。④「国民」とは誰かを考える。	【主体的な学び】①「ここからずっとややこしい。でも、そろそろ慣れてきたよね」。②単元の最後に出てくるアメリカは、歴史上特異な成立経緯を持つ国である点を押さえ、「国民国家形成」のまとめとして、これまでの学習を振り返り、整理させる。【対話的な学び】「アメリカの国民が国民意識を感じると思われるもの」について、その根拠をペアで話し合い、全体でも共有。【深い学び】①アメリカ民謡「線路は続くよどこまでも」を流し、「この歌を明るく歌える人は誰だろう」と問いかける。②参考資料として「なめらかな社会とその敵」の定期考査で出題した問題文を再度配布する。	

＊吉谷先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全９時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（https://berd.benesse.jp/）からダウンロードできます。「HOME →教育情報→高校向け」でご覧ください。

ことなのだろう』と、さらに深く掘り下げて捉える姿勢が見られます。自分なりに考えて理解しようとするからこそできることです」

廊下にあるホワイトボードには、吉谷先生が授業に関連した発展的な問いを書き、生徒が自由に議論する場としている。想定外の考えが書かれることもよくあり、生徒が世界史を楽しみ、自ら深く考えようとする姿を感じ取っている。

「世界史の授業で身につけた知識や思考力・判断力が、世界に羽ばたき、世界を動かす勇気と力の１つとなるよう、改善を進めていきます」

生徒の声

喜多章成さん　吉谷先生の解説は、事象の背景にある意味の説明に重点が置かれているため、覚えながら考えることを意識するようになりました。物事を批判的に捉えたり、過去と照らし合わせて未来を展望したりする考え方が身についてきたと思います。そうした授業を通して世界史が好きになり、大学でも専門的に学びたいと思っています。

橋本奈津美さん　吉谷先生の授業はテンポがよく、音読、既習内容の振り返り、面白い小話など、メリハリがあって集中できます。授業内容をすべて吸収しようと、必死に食らいついています。ペアの相手にいつでも相談できることが、大きな助けになっています。３年生になり、縦と横のつながりの中で歴史的事項を捉えられるようになりました。そのように立体的に物事を捉える学習が、吉谷先生の授業にはあります。

宮城県涌谷高校

学力向上・社会意識の醸成

基礎学力を定着させ、社会への関心を育む指導で、生徒の進路意識を高める

変革のステップ

背景と課題

- 学力に課題がある生徒や、進路選択において積極的に自己実現を図ろうとしない生徒が目立った

実践内容

- **朝学習における学び直しの徹底**　朝学習に全校で統一した指導方針を設け、学び直しの専用教材を活用しながら、基礎学力の定着を図る
- **「総合的な学習の時間」のカリキュラムの刷新**　生徒の社会への関心を高めようと、進路学習が中心だった「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）のカリキュラムを、地域や国際社会の課題をテーマにした探究学習を主軸とするものに改めた
- **研究企画部の新設**　さらなる指導改善を図れるよう、校内研修を企画・推進する専門部署を新設。ICTを活用したアクティブ・ラーニングの推進を始めとする以前からの取り組みと、総合学習での取り組みの強化を図った

成果と展望

- 多くの生徒に学力の伸びが見られる
- 自分のやりたいことを見つけ、積極的に挑戦する生徒が増加

学力と社会への意識を高め、生徒の主体的な自己実現を支援

100年近い歴史を持つ宮城県涌谷高校は、同県中北部に位置する遠田郡内唯一の共学の普通科高校だ。生徒の多様な希望進路の実現に応える学校として、地域の信頼を得ている。

生徒は明るく素直だが、学力には課題があった。例えば、基礎的な内容でつまずくと、それ以降の学習に前向きになれない生徒が見られた。生徒の学習意欲を高めるため、課外学習を実施したが、組織的な制度として定着してこなかった。学年やクラス単位の取り組みにとどまっていたこともあり、継続させることが難しく、思うような成果が得られていなかった。ま

PROFILE

宮城県遠田郡立涌谷実科高等女学校として開校。校訓に「質実・謙譲・自律」「勤敏・優雅・協同」を掲げる。ボランティア活動に力を入れ、2014年度には「キャリア教育優良学校文部科学大臣表彰」を受けた。

設立	1919（大正8）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約130人
2018年度進路実績（現役のみ）	私立大は、東北学院大、東北生活文化大、東北福祉大、宮城学院女子大、国士舘大などに延べ19人が合格。短大・専門学校進学41人。就職74人。
住所	〒987-0121　宮城県遠田郡涌谷町涌谷字八方谷3-1
電話	0229-42-3331
Web site	http://wakuya-h.blogspot.com

た、進学・就職先を安易な理由で決めてしまうなど、進路選択に消極的な生徒も少なくなかったという。そこで、2017年度、全校を挙げて指導改善に着手した。その推進者の1人である研究企画部の三浦学先生は、次のように語る。

「学力を高めれば、より多くの選択肢の中から進路を決めることができます。また、本当に進みたい道を見つけられるよう、社会への視野を広げてほしいという思いもありました。そこで、学力の基礎・基本を固めるとともに、主体的な進路選択に向け、社会への関心を高められるよう、取り組みを充実させようと考えました」

宮城県涌谷高校
三浦 学 みうら・まなぶ
教職歴18年。同校に赴任して4年目。研究企画部。地理歴史・公民科担当。「SDGsの理念に共感し、生徒の未来を変える教育を目指す」

宮城県涌谷高校
鈴木雅也 すずき・まさや
教職歴11年。同校に赴任して3年目。研究企画部。英語科担当。「『聞き上手であれ』『一生勉強』をモットーに生徒と接していきたい」

宮城県涌谷高校
髙橋 唯 たかはし・ゆい
教職歴3年。同校に赴任して4年目。進路指導部。理科担当（化学）。「『現状不満足』の精神で、生徒のさらなる成長を支えていきたい」

宮城県涌谷高校
大久千賀子 だいきゅう・ちかこ
教職歴1年。同校に赴任して2年目。研究企画部。音楽科担当。「常に生徒に寄り添い、生徒とともに成長できる教師でありたい」

全校体制での学び直しにより、学習に自信をつける生徒たち

基礎学力の定着に向け、毎日の始業前に行っている10分間の朝学習で取り組む国語・数学・英語の問題を見直した。以前は教科団が作成した問題を用いていたが、生徒一人ひとりの学力に応じた作問が難しかったため、ベネッセの「マナトレ」（＊1）を導入。1・2年次で基礎編、3年次で標準編に取り組ませることにした。1回の朝学習でマナトレのプリントに1枚以上取り組み、自己採点を行うという全学年共通の方針を設けたが、それ以外の方針については、担任や学年団が自由に決めることにした。例えば、教科を毎日替える学年がある一方、同じ教科を1週間続ける学年もあるなど、生徒の実態に応じて工夫している。また、週末課題として、マナトレのプリントを出す学年もある。

1学年担任の大久千賀子（だいきゅう）先生は、こう述べる。

「私のクラスでは、朝学習の時間に解ききれなかったプリントは、その日の放課後までに解いて提出するよう指導しています。毎日コツコツと継続して取り組む習慣をしっかり身につけることができれば、これからの3年間の伸びが大きくなるはずです。また、生徒の答案をチェックしていると、どの生徒がどこでつまずいているのかが分かり、生徒把握にも役立っています」

定期考査では、各教科・科目10点分、マナトレと同じ問題を出すことで、朝学習への意欲の向上を図っている。また、学習内容の定着に向け、マナトレの問題を抜粋して作成したテストを定期的に実施。基準に満たなかった生徒には、補習を行ったり、宿題を出したりしている。研究企画部の鈴木雅也先生は、担当する英語について、朝学習による生徒の変化をこう語る。

「以前は、定期考査ではよくできていても、模擬試験になると、初見の問題に焦ってしまうのか、動詞に三人称単数現在のsをつけ忘れたり、現在形と過去形を混同して解答したりするといった不注意ミスをする生徒が少なくありませんでした。しかし今では、模擬試験にも落ち着いて取り組み、しっかり結果を残せる生徒が目立つようになりました。マナトレを活用した学び直しを続ける中で、『分かるようになった』という実感を得ることができ、それが自信となっているようです」

生徒の視野を広げられるよう、幅広いテーマでの探究学習を推進

生徒に社会への関心を醸成する取り組みとしては、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）の改善を進めている。以前は、職業や志望校を調べたり、志望理由書やエントリーシートの書き方などを学んだりする進路学習が中心だったが、17年度1年次からは、課題の発見や問題の解決を図る探究学習に力を入れることにした。地域の課題から国際的な課題へと、探究する

＊1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲の学び直し専用プリント。
＊2 ベネッセの小論文・表現学習教材。表現力の向上・社会で生きるコミュニケーション力の育成を促進する教材。

テーマを段階的に広げていき、多様な視野から進路を考えられるようになることを目指している。次期学習指導要領への対応を進めるべく、思考力・判断力・表現力の育成につながる取り組みを増やそうというねらいもあった。

1年次には、地域への理解を深めることを目標として設定し、次のような流れで取り組みを進めた（**図1**）。まず1学期には、涌谷町の魅力を探るグループ学習を行い、町をよりよくするための方法を話し合った。メンバー各自の発言内容の整理には、ブレーンストーミングやKJ法を用いたが、そうしたスキルの習得には、ベネッセの「表現サポート」（P.33＊2）などを活用した。2学期には、職場探究として、同町の役場や企業を訪問し、職業についてのインタビュー調査を実施。各グループは、その内容をポスターにまとめ、発表した。そして、3学期には、町役場の職員による講話などから、地域の課題について考えを深めた。

取り組みを通して、地域の新たな魅力に気づいたり、人口減少の切実さを実感したりする中で、次第に地域への関心を高めていき、どのグループでも、率先して行動するメンバーが目立つようになった。一方、課題もあるという。

「総合学習では、正解やよい意見を出すことよりも、テーマに対して頭を働かせて考えたのかが大切になります。そうした意図が浸透せず、『答えが分からない』と言って手を止めてしまったり、評価を気にして優等生的な考えを述べたりする生徒もいます。結果よりも考えるプロセスが大切であるということを、しっかり伝えられるよう指導を工夫したいと考えています」（大久先生）

図1　1年次の「総合的な学習の時間」の取り組み（例）

テーマ	内容
自他理解	地域の人を始めとする「身近な人」へのインタビューを通して、職業観を養う。事前学習として、「表現サポート」を参照しながら質問項目をグループでまとめる。
ベーシックスキルの習得	涌谷町の魅力をグループで話し合い、ブレーンストーミングやＫＪ法を用いてメンバーの発言を整理・集約。
職業と私	グループで地域の企業などを訪問し、職業についてのインタビュー調査を行う。その結果や感想などについてメンバー同士で話し合いを重ね、地域の仕事の課題をまとめたポスターを作成。クラスで発表する。
	涌谷町役場の職員の講話を聞き、地域の課題について考える。

ブレーンストーミングやＫＪ法は、思考力の基礎となる「ベーシックスキル」として位置づけ、しっかり育成できるようグループワークを充実させている。また、地域でのフィールドワークに力を入れ、職場研究などに取り組む。

＊学校資料を基に編集部で作成

社会の出来事を自分事化するために、「ＳＤＧｓ」を活用

2・3年次の総合学習では、自分と世界のつながりに目を向けられるよう、国連が掲げる「持続可能な開発目標（以下、ＳＤＧｓ）」（＊3）を意識した取り組みを充実させていきたいと考えている。その一環として、18年度3年次の1学期には、「こども国連環境会議推進協会（以下、ＪＵＮＥＣ）」（＊4）の講師を招き、ＳＤＧｓのワークショップを行った。3学年担任の髙橋唯先生は、次のように述べる。

「推薦入試の志望理由書の内容を充実させるために何をすべきか、ベネッセの研修会で相談したところ、社会の課題と自身の将来を結びつけて考える視野を育むことが重要だと学びました。そうした折、ＪＵＮＥＣの研修に参加し、私自身もＳＤＧｓについて理解を深めました。これなら生徒が当事者意識を持って社会と進路を結びつけられるだろうと考え、ワークショップを企画しました」

ワークショップで生徒が強い刺激を受けていたのが、ＳＤＧｓのカードゲームだ。それは、教室を地球に見立てて、生徒一人ひとりが1国の代表として、互いに協力しながら、経済・環境・社会といった分野ごとに様々なプロジェクトを行い、自国の発展を目指すというもの。例えば、収益性を優先する政策ばかりに力を入れると、経済的には豊かになる半面、環境破壊が進むといった、社会変化を仮想体験できる。

「複数の要因の相互作用によって社会が変わっていくことを、生徒は実感したようです。社会の課題を自分事として捉え、自分は何が

＊3「Sustainable Development Goals」の略称。2015年9月の国連総会で採択された、環境保全や経済格差の解消といった17の国際目標であり、「誰1人取り残さない」というスローガンの下、30年までの達成を目指している。
＊4 国際連合大学（国連大学）と連携し、持続可能な社会を実現する人材を育成するために設立されたNGO。国連大学とは、日本に本部を置く唯一の国連機関。

したいのか、何ができるのか、考えを深めるきっかけになったと思います」（髙橋先生）

そうして高まった生徒の社会意識をさらに伸ばせるよう、ワークショップ後には、自分の担当する授業で国際問題を取り上げる教師が増えている。例えば、三浦先生が担当する地理歴史の授業では、民族紛争や貧困といった課題について問いかけ、必要な支援のあり方について生徒が考える場を設けた。

教師間の連携の強化を目指し、指導改善の中心を担う部署を新設

同校は、15年度、宮城県の「ＩＣＴ利活用授業力向上プロジェクト事業」に指定されたことをきっかけに、全学年でＩＣＴを活用したアクティブ・ラーニング（以下、ＡＬ）に力を入れるようになった。同県の教育長や学校関係者らを招き公開授業も盛んに行っている。

17年度からは、ＩＣＴを活用したＡＬの取り組み、総合学習の取り組み、校内研修を3本柱として位置づけ、組織再編を行った。教務部や進路指導部といった各分掌が縦割りで指導改善に取り組むことが多かった体制を変え、教師間の連携を強化したいと考えた。そこで、各分掌や各学年団を横断し、3本柱をより充実させるための部署として、「研究企画部」を新設。外部講師を招いた講習を含め、年間を通して、計画的に校内研修を行っている。

総合学習の支援も、同部の重要な役割だ。17年度は1年目ということもあり、企画の立案を始め、指導案の作成でも中心役を担った。

「年度当初に作成した年間計画に沿って、1週間ごとに指導案を作り、担任の先生に示しました。『表現サポート（表現トレーニング）』の教師用の指導書も参考に、三浦先生や担任の先生方の意見も取り入れながら、実践的な取り組みができるよう心がけました」（鈴木先生）

高い目標に挑戦しようとする生徒の意欲を、より高めていきたい

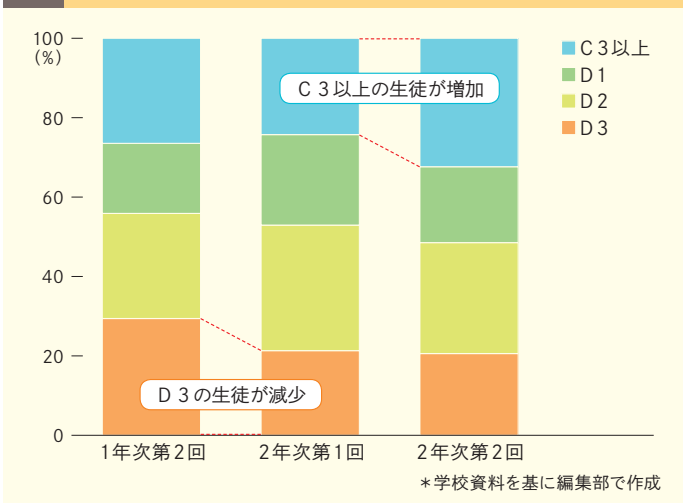
指導改善に着手して1年半だが、その成果は早くも実を結びつつある。マナトレに熱心に取り組み、ベネッセの「基礎力診断テスト」（＊5）のＧＴＺ（＊6）のゾーンを上げる生徒が増え、基礎学力の着実な定着がうかがえる（**図2**）。また、総合学習での探究学習を通して、自分のやりたいことに目を向け、積極的にその実現を図る生徒も目立つようになった。プレゼンテーションなどでは、自分の考えを過不足なく伝えられるようになるなど、表現力の向上も著しい。

生徒のそうした成果に手応えを感じたことで、教師の意識もより高まり、率先してＡＬに取り組む教師が増えている。18年度からは、年1回、全教師が指導案を作成し、ＡＬの推進やＩＣＴ活用をテーマとした授業公開を実施する予定だ。今後は、文部科学省の留学支援制度「トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ 日本代表プログラム高校生コース」や大学の体験プロジェクトなどに参加しようとする意欲を醸成できるよう、指導のさらなる充実を目指す。

一方、課題もあると三浦先生は語る。

「一つひとつの取り組みから効果が表れ、生徒の対話力や表現力、主体性が向上しているのを感じます。その半面、取り組み相互のつながりが浅く、今行っていることが次にどのように生かされるのか、教師・生徒ともに見えていない部分があります。今後は外部の協力も得ながら、生徒の探究心を刺激し、資質・能力を高めるようなプログラムを構築していきたいと思っています」

図2　「基礎力診断テスト」のGTZの推移（2016年度入学生）



＊学校資料を基に編集部で作成

＊5　ベネッセの教材「進路マップ」の1つ。GTZ（学習到達ゾーン）という指標で、生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、生活・学習指導用テスト。　＊6　ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」の11段階で評価される。

大阪府・私立初芝富田林中学校・高校

学校改革

「チーム初富」の精神とミドルリーダーの力で、目指すは第1志望決定率100%

変革のステップ

背景と課題

- 志願者が減少しており、大学進学実績が低下した

実践内容

- **校務の効率的運営に向け、校内組織を再編**　エンロールメント・マネジメントを基盤にしたPDCAサイクル定着に向け、「分権型リーダーシップ」を実践
- **校塾連携の強化**　学習塾や予備校などの教育関連企業との連携を密にし、生徒個々の進路実現に向けて協働する体制づくりを進めた
- **進路指導の改善**　「第1志望決定率100%」を目標に掲げ、妥当性・信頼性・客観性の伴うシラバス化を基盤とした教育実践と学校評価、変容しつつある大学研究の一助としてのOJTとOff-JTを強化
- **大学入試改革と次期学習指導要領への対応**　「カリキュラム・マネジメント委員会」を軸とした新教育課程策定と授業改善への取り組みを推進

成果と展望

- 「チーム初富」を意識し、各分掌でリーダーを中心に改革に取り組む教師が増加
- 生徒と教師のコミュニケーションが深まった

進学実績の低下への危機感から、抜本的な学校改革に踏み切る

大阪南部に位置する私立初芝富田林中学校・高校では、2018年4月、ドラスティックなまでの学校改革で定評のある平井正朗氏を校長に迎え、あらゆる教育活動を抜本的に見直す大改革に踏み切った。

1984年に開校した同校の歴史は、波乱の連続だったという。通学の利便性の影響もあり、生徒募集が思うようにいかず、創立後数年は学力に課題がある状況が続いたが、規律を重んじる生徒指導・学習指導により、次第に大学進学実績が向上し、近畿地方有数の進学校となった。ところが、15年ほど前からは同校が大切にして

PROFILE

大阪府・私立初芝高等学校富田林学舎（分校）として開校。校訓に「誠実剛毅」、教育目標に「一人ひとりの未来へとつながる夢を実現する」を掲げ、知・徳・体のバランスのとれた人間力の育成に力を入れている。

設立	1984（昭和59）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約330人
2018年度入試合格実績（現浪計）	国公立大は、東北大、東京大、大阪大、神戸大、大阪府立大、大阪市立大、和歌山県立医科大などに63人が合格。私立大は、上智大、中央大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ648人が合格。
住所	〒584-0058　大阪府富田林市彼方1801
電話	0721-34-1010
Web site	http://www.hatsushiba.ed.jp/tondabayashi/

きた「規律ある指導」を窮屈に感じる生徒・保護者が増え始め、志願者数が減少するようになった。開校時から同校に勤務する生徒指導部長の坂本学先生は、次のように述べる。

「生徒にも保護者にも本校の方針に共感してもらえた時には、学校が一気に伸びていくことができました。しかし、周辺校に比べて『規律の厳しい学校』というイメージが次第に広まり、『自分のペースで勉強したい』『もっと部活動を楽しみたい』といった生徒が本校を敬遠するようになったのです」

中学校で定員割れに至る年度も出始め、大学進学実績が低迷するようになった。様々な改革を行ったが、思うような成果は得られなかったと、進路指導部長の中島伸一先生は話す。

「教師の多くが『学校を変えたいが、どうすればよいのか分からない』というもどかしさを感じていたと思います。我々は他校での指導経験がなく、どうしても我流に陥りがちでした。全面的に取り組みを見直し、原点に立ち返って学校を再構築していく必要性を感じていました」

ミドルリーダーの教師が役割を分担し、校務の効率化を推進

平井校長のミッションは、立命館グループの学校として、かつての進学校への返り咲きをステップに、新たな教育を創造する超進学校づくりにあるという。平井校長の所信表明は、「超進学校化宣言」だが、大学を「優れた教授陣による最先端の講義、充実した研究環境、全国から集まる仲間たちと切磋琢磨し、人間的に成長するのと同時に、幅広い教養や高度な専門性を身につけ、社会に通用するスキルを磨く場」と位置づけ、進学指導の方向性として「現状の学力で合格できる大学を受験させるのではなく、より高い志望を持たせ、生徒個々の『伸びの実感』を体感させ、本当に入学したい大学に挑戦させ、合格させること」とし、「第1志望決定率（進路満足度）100%」を目標としている。

「カリキュラムの大幅改訂では、一昔前の進学校化した学校に見られる授業時間の多さや、過重な放課後補習といった『つめこみ』は撤廃しました。成績上位層の生徒は、自律学習をすることができ、学習意欲も高いので、必要以上の課題は受験勉強の妨げになります。中下位層の生徒こそ学び方を知らず、学習意欲に課題があるため、手厚い指導が不可欠なのです。本校の場合、課題や定期考査に追われ、それらを処理するので精いっぱい、反復練習による基礎学力の定着や活用力の育成が不十分になり、成果に結びついていません。定着度ではなく、『量』の処理に追われるという体質の改善が急務です」（平井校長）

そうした方針の下、同校を経営する学校法人・

大阪初芝学園教学担当常務理事
小畑力人 おばた・りきと
立命館大学の入試部長として入試改革を行い、4万人から10万人入試を達成。和歌山大学副学長、追手門学院大学教授等を経て、現職。

大阪府・私立初芝富田林中学校・高校校長
平井正朗 ひらい・まさあき
私学教育一筋、斬新な組織的学校改革でV字回復させる手腕は有名。私立中高の学校経営や英語教育に精通し、多くの要職を歴任。

大阪府・私立初芝富田林中学校・高校事務長
岡 秀吉 おか・ひでよし
同校に赴任して28年目。入試対策本部長。「保護者との連絡・伝達など、先生方と協力して教育活動の質を高めていきたい」

大阪府・私立初芝富田林中学校・高校教頭
菖蒲育弘 しょうぶ・いくひろ
教職歴31年。同校に赴任して32年目。「一人ひとりの生徒に寄り添い、授業を通じて学ぶ楽しさを伝えたい」

大阪府・私立初芝富田林中学校・高校
坂本 学 さかもと・まなぶ
教職歴35年。同校に赴任して33年目。教頭補佐兼生徒指導部長。「礼儀を重んじ、感謝と敬意を持って相手と接する生徒に育てたい」

大阪府・私立初芝富田林中学校・高校
中島伸一 なかじま・しんいち
教職歴25年。同校に赴任して16年目。進路指導部長。「自分の頭で思考し、行動することができる人間を育てたい」

大阪府・私立初芝富田林中学校・高校
竹内鉄二 たけうち・てつじ
教職歴20年。同校に赴任して16年目。研究開発部長。「なりたい自分を常に思い描き、それを誠実に求めることの価値を伝え続けたい」

大阪初芝学園
薮内靖郎 やぶうち・やすお
教学部副部長。『生徒とともに、生徒のために』をモットーに、学び続けたい」

大阪初芝学園の小畑力人教学担当常務理事と二人三脚で、改革を始めた（図）。

1つめは、校務の効率化であり、校内で分担・協力して学校改革を推進する「分権型リーダーシップ」を実現できるよう、校内組織の再編に取り組んだ。例えば、すべての分掌を総括し、重要事項を審議する部署として、平井校長自ら委員長となる「カリキュラム・マネジメント委員会」を設置し、率先垂範（そっせんすいはん）、陣頭指揮（じんとうしき）を執っている。また、「グローバル教育推進委員会」「理数教育推進委員会」「ＩＣＴ教育推進委員会」などを新設。校内での役割分担を明確にし、ミドルリーダーの育成にも努めている。

「校務固定による硬直化を防止すべく、目標管理制度を通じて校務の有機的結合を図り、社会に開かれた学校づくりを目指しています。さらに、単年度積み上げスパンの運営から、ビジョンに基づく目標設定に切り替えるとともに、事前管理を徹底し、前年踏襲や相互不干渉といった体質の排除を進めています。また、トップダウンとボトムアップを融合させ、全体最適の協働的職場風土に変容させようとしています。各分掌の仕事や教科指導は、教師個人の力量に頼りがちなので、各分掌や学校全体の結びつきを強め、『チーム初富（はつとん）』として機能させることを大切にしています。そうすれば、ベテラン教師から若手教師へのノウハウの伝承も進み、一丸となって動きやすくなるはずです」（平井校長）

図　学校改革で実現を目指す、教育活動の特色化

①進路指導の方向性：第1志望決定率（進路満足度）100％へのアプローチ
→「Will Frontier」コース：国公立大学［中堅～難関］。主に大阪府立大学、大阪市立大学レベル。成績上位層は、東京大学、京都大学、医学部医学科
→「未来創造」コース：国公立大学［中堅］＋有名私立大学。成績上位層は大阪府立大学、大阪市立大学レベル。私立大学は関関同立～中堅レベル。指定校推薦も活用

②授業改善：「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）への質的転換
→公開（研究）授業（ＰＢＬ〈※1〉型授業など）、校内研修、ＩＣＴ化（電子黒板・タブレットの活用）、「研究開発部通信」、Ｏｆｆ-ＪＴなど

③探究型学習カリキュラム：主体的に社会の変化や問題点を捉え、解決する力
→高校1年次：「探究総合」、中学3年次：「クエスト・カップ」、探究朝活、中学2年次：「クエスト・カップ」の事前学習

④英語教育・国際教育：4技能のバランス、コミュニケーション力、異文化理解力
→中学2～3年次のオンライン英会話、ネイティブ教師による「英語で英語の授業」、オックスフォード大学短期留学、エンパワーメントプログラムなど

※1「Problem Based Learning」もしくは「Project Based Learning」の略。問題解決型学習。
＊学校資料を基に編集部で作成

指導力の向上を推進すべく、学校内外の優れた授業実践を共有

校内研究・研修を推進する部署として新設したのが、「研究開発部」だ。現在は、部長の竹内鉄二先生を始めとする4人のメンバーが、学校内外から優れた授業実践の事例を集め、「研究開発部通信」で紹介したり、撮影した授業の動画を短く編集し、それを校内で共有したりして、指導力の向上を図っている。

「本校は、以前は外部のノウハウを取り入れる機会が多くありませんでした。そこで、情報収集に力を入れ、多くの先生の目に触れるよう、配信方法を工夫しています。今後は、授業改善に悩む先生へのアドバイスにも力を入れていく予定です」（竹内先生）

学校全体のガバナンスを機能させるために、事務室と各分掌の連携も強化した。岡秀吉事務長は、改革の現状を次のように語る。

「事務室では『ガバナンス力の向上』を目標に掲げ、適切な情報提供による保護者満足度の向上、コンプライアンスの重視、入試部と連携した生徒募集の強化に取り組んでいます。学校改革を円滑に行うためには、事務職員と先生方が対等な立場で合意形成を行う必要があり、各分掌との連携が欠かせません」

進路指導の改善の一環として、大学の実態を学ぶ研修を導入

2つめの柱は、中学校における定員割れを解消するための、校塾連携の推進だ。地域の塾を訪問して学校をＰＲするとともに、塾関係者を学校に招き、学校改革の構想や中学校入試について説明する場を積極的に設けている。特に、「校長ブログ」（同校ホームページを参照）は圧巻だ。また、平井校長は、用事がない限り、毎朝、バスのロータリーで生徒を出迎える。校長室のドアも基本的に開放されており、生徒と頻繁に話せるよう配慮されている。塾への配布資料には、クラス別、学部別・系統別に分けて大学進学実績を記載するなど、読みやすくなる

よう工夫が施されている。今後は、公開授業にも積極的に外部評価を取り入れ、現場にフィードバックしていくという。

3つめの柱は、「第1志望決定率（進路満足度）100%」を目指す進路指導の確立だ。学力向上だけではなく、学力と希望進路を踏まえ、本当に行きたい大学を考えさせることを重視。志望校決定後は、全生徒の志望実現に向け、教師が全力で支援する体制の整備を図っている。

「大学入試改革によって、大学は今、大きな転換期を迎えています。そうした中、以前のように合格者数ばかりを求めると、先生方の精神的な負担を増やし、さらには生徒にも過剰なプレッシャーを与えることになってしまいます。そこで、合格実績にこだわるのではなく、生徒が自分と向き合い、『自分は何がしたいのか』を明確に意識できるようになることを大切にしていきたいと考えています」（平井校長）

国公立大学や難関私立大学への合格者数にこだわらないという方針を浸透させるためには、大学入試に対する教師の意識改革が必要だ。そこで、月1回の職員会議を校内研修と併用し、内部からは小畑常務と平井校長が、外部からは有識者、大学教員や予備校・学習塾等から人材を登用し、情報提供の場であると同時に、教職員の資質向上にも資する取り組みとしている。

「国公立大学の中にも、資金不足で満足に教育・研究ができなかったり、教員数の削減によって黒字化を実現したりしている大学もあります。また、地方の国公立大学に入学しても、その地元の地域では就職先が少ないため、結局は都市部に戻らなければならず、就職活動で苦戦する学生もいます。先生方には、そうした現状を把握した上で、生徒の学力と志望に応じた適切なアドバイスをしてほしいと思っています」（小畑常務）

教師の「働き方改革」を進め、指導改善を図る時間を確保

4つめの柱は、次期学習指導要領を見据えた教育体系の改編だ。「論理国語」「歴史総合」といった文系の新科目については、研究開発部を中心に指導のノウハウの蓄積を図っていく。一方、新教科「理数」に対応するために、「理数教育推進委員会」を設置した。同委員会と「グローバル教育推進委員会」の委員長を務める菖蒲育弘（しょうぶいくひろ）教頭は、次のように語る。

「理数教育については、現在、情報収集の段階ですが、今後は教務部と研究開発部、数学科・理科と連携し、本校独自の理数横断的な課題研究を行う予定です。また、グローバル教育については、従来のオックスフォード大学などとの提携に加え、立命館アジア太平洋大学など留学生が多い国内大学とも連携し、より多くの生徒が海外の文化に触れる機会をつくっていきたいと考えています」

平井校長は、赴任して3か月ほどの間に、できうる限り多くの授業を見学した。その中で、多忙な教師が多いという事実に改めて気づかされたという。そこで、7時限授業から6時限授業にできるよう、カリキュラム改革も計画中だ。

「授業時数を減らすことで、先生方は授業研究などの自己研鑽（けんさん）の時間を確保しやすくなるでしょう。そうして、教師一人ひとりの指導力が高まっていけば、授業力アップ、すなわち、質の向上につながり、学校の教育活動がより充実すると考えています。また、国が進めている『働き方改革』を率先して行おうという思いもありました」（平井校長）

学校改革・指導改善に意欲的に取り組む教師が増加

改革の成果は、早くも表れている。ミドルリーダーの教師は、率先して改革を牽引するようになり、若手の教師の中には、研究開発部の活動を通じて指導力の向上に意識的になり、自分の授業を見に来てほしいと呼びかける教師も現れた。それらの成果以上に大きいのが、生徒の変化だ。4月当初よりも表情が明るくなり、生徒と教師のコミュニケーションが深まっている。

「成否のポイントは、授業力向上とカリキュラム・マネジメントにほかなりません。先生方の地道な努力はいずれ実を結ぶと確信しています」（平井校長）

時代のニーズに即応する教科指導・進路指導を再構築する同校の改革に、今後も注目だ。

改良！指導ツール

ビフォーアフター

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、夏季休業中に行ったオープンキャンパスなどの成果を踏まえ、志望大を絞り込み、行動変容につなげる「第1志望研究」について検討する。

北海道旭川東高校 花尻健明先生提供
「2年生2学期 第1志望研究」

Before

2年＿＿組＿＿番 氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

総合学習ワークシート

1 (1) 志望校を1つ定めて書きましょう。(決まっていない人は仮決めして考えましょう)

＿＿＿＿大学＿＿＿＿学部＿＿＿＿学科 (募集名称＿＿＿＿＿＿＿＿)

2 (1) 1 (1) であげた大学の特徴について調べて書きましょう。

(2) (1) を踏まえて、どのような大学であるか、大学に対する印象、その大学は何ができそうかなど**その大学に対する自分の考えを書いて**みましょう。また、オープンキャンパスなどに参加した人はその時に感じたことや印象なども書きましょう。

(3) 今後、高校生活のなかで志望校に対する理解を深め、志望校への思いを強めていくにはどうしたらよいか考えてみましょう。

3 (1) 2 (1) であげた大学のアドミッションポリシーを読み、どのような人材を求めているかまとめてみましょう。

(2) (1) であげた人材となるために、今後の高校生活で取り組むべきだと考えられることは何か書いてみましょう。

4 これから受験に向かうに当たって、キーワード3つとその理由をあげてみましょう。

キーワード	理由

課題

1. 第1志望大に対するあこがれやこだわりを強く持たせ、2学期以降本格化する大学研究への第一歩にさせたい
2. 第1志望大について調べたり、考えたりしたことを、生活面や学習面での具体的な行動変容につなげさせたい

志望大への思いを強く持たせ、具体的な行動変容につなげたい

北海道旭川東高校では、2年生に対して、夏季休業終了時までの進路研究の成果をまとめ、2学期以降につなげる「第1志望研究」を2学期開始直後に活用している。第1志望大を挙げ、その理由をオープンキャンパスの成果とともに考えさせ、さらに、その大学が自分に何を求めているかをアドミッション・ポリシーを踏まえて整理させている。生徒が書いた内容は、志望大への思いを感じさせるものの、志望大への思いが、学習・生活習慣の改善に結びつかない生徒もいる。部活動や学校行事が優先されがちな学年だが、受験を意識した行動変容を果たす生徒を増やしたいという思いがある。

検討メンバー

ツール提供者
北海道旭川東高校
花尻健明
はなじり・たけあき

群馬県立
太田高校
新井高広
あらい・たかひろ

宮崎県立
延岡星雲高校
柳井健二
やない・けんじ

2年生2学期 第1志望研究

After

改良ポイント

① アドミッション・ポリシーを今の自分に引きつけさせる

アドミッション・ポリシーで共感する点を書き出し、今の自分がそれを実現できているかどうかを考えさせることで、大学とのマッチングという観点での行動変容を促す。

② 他者、そして1年後の自分と向き合う場をつくる

志望大への思いや、アドミッション・ポリシーから自覚した行動変容を定着させるため、クラスの仲間の意見を聞き、1年後の自分を見通す。

ダウンロード

「志望校とこれからの私」検討シート

2年　　組　　番　氏名

1 志望校を1つ定めて書きましょう。（決まっていない人は仮決めして考えましょう）

＿＿＿＿＿大学＿＿＿＿＿学部＿＿＿＿＿学科

（募集名称＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

2 **1** で挙げた大学について調べたこと、感じていることを自由に書きましょう。オープンキャンパスに参加した人は、その時に分かったこと、感じたことなども書きましょう。写真や資料などを貼りつけても構いません。

3 **1** で挙げた大学のアドミッション・ポリシーを読み、「こういう学生を求めているのであれば、ぜひ自分はこの大学に行きたい！」と共感する点を挙げ、今の自分がそれを実現できているかどうかを○・×でチェックしましょう。できていることについてはその具体的な内容を、できていないことについてはその理由を書きましょう。

共感する点（抜き出しでも可）	できているか？	できていることは具体的な内容を／できていないことはその理由を

4 **3** の内容をグループでシェアして、×を○にするためにはどうすればよいか、クラスの仲間からアドバイスをもらいましょう。

5 志望大への思いを強めていくために、明日からどんなことができると思いますか。

6 部活動や学校行事が一段落し、いよいよ受験モードに切り替わった1年後の自分にメッセージを送りましょう。

アドミッション・ポリシーから2学期以降の変容を自覚させる

志望大について考える上で、重要な要素となるアドミッション・ポリシーを、大学が発信する情報として理解するだけでなく、自分の行動を変容させる指針として読み解くようにした。そのため、アドミッション・ポリシーを書き写すのではなく、「共感した点」を書き出させ、そこから自己理解を促すようにした。また、アドミッション・ポリシーで求められる要件を十分満たしていない点をどう克服するかをグループワークなどで考えさせるようにした。そうして大学とのマッチングを丁寧に求める一方で、オープンキャンパスでの気づきは、写真や資料を使って生徒がより自由に表現できるようなものへと改訂した。

次ページでは、3人の先生方の検討の様子をダイジェストで紹介！

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（http://berd.benesse.jp）からダウンロードできます。「HOME →教育情報→高校向け→生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。

2学年2学期 第1志望研究

早期化する受験生への切り替え 行動変容を促す機能を強化

まず、今回の議論の前提となったのが、「受験生への切り替えの早期化の必要性」だ。学習習慣の改善などの行動変容は、時間をかけて少しずつ進む場合が多いため、2年生の秋から促していくことが求められる。また、昨今の入試改革を踏まえると、志望大のアドミッション・ポリシーをできるだけ早期に理解しておくことが必要である。そうしたことから、2年生秋の志望大研究がこれまで以上に重要になっていることが、検討会の中で確認された。

生徒の志望大への思いや、それを土台とした行動変容の進み具合の把握は、面談が中心となるため、生徒に記入させるシートには「面談資料としての使いやすさ」が求められる。改訂後のシートでは「アドミッション・ポリシーの中でなぜその点に共感したか」「オープンキャンパスではなぜそのことが心に残ったのか」など、生徒に質問しやすいという点で教師にとってメリットがあり、また、生徒にとっても、併願大を選ぶ際の自身のこだわりを理解するきっかけになるという声が上がった。

また、生徒の具体的な行動変容を促すためには、ポリシーと自分をマッチングさせるための方策を語り合うような、生徒同士、生徒と教師の対話の場を多くつくっていくことの重要性が確認された。

活用の流れ

1. 夏季休業後、シートを生徒に配布
2. 夏季休業中に調べたことを生徒が記入
3. シートの内容を基にグループワークを行い、シートを完成させる
4. シートを基に面談を行い、生徒の行動変容をサポートする

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話しいただきました

「合格のための資質・能力」を2年生の秋に知る

北海道旭川東高校 **花尻健明** はなじり・たけあき

本校の生徒を見ていて感じるのは潜在能力の高さです。特に、浪人した生徒が夏前の模試で好成績を収めるのを見ると、あと数か月、受験生の切り替えが早ければと思うことが少なくありません。3年生0学期よりも前、2年生秋の重要性を強く感じています。

アドミッション・ポリシーを漫然と読むのではなく、どこに共感したのか、今の自分とどの程度マッチングしているかを考えることは、学習習慣などの行動変容を促す土台になると思います。アドミッション・ポリシーは確かに「大学からのメッセージ」ですが、今の自分、これからの自分とそれを照らし合わせることで、これからの高校生活をよりよくするためのエネルギーが生み出されると思うのです。志望大合格のためには、入試教科・科目の学力は確かに必要ですが、それだけではなく、「地域社会に対する貢献心」「異質な価値観への寛容」など、点数では表せない資質・能力も求められるのだと気づき、2年生秋からの高校生活を過ごしてほしいと思います。

花尻先生プロフィール 教職歴11年。同校に赴任して4年目。進路指導部。数学科。「常に前向きに、あたり前のことをあたり前にする」

学校プロフィール 全日制・定時制／普通科／共学／1学年約280人／2018年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、旭川医科大、北海道大、東京大、東京工業大、一橋大などに158人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ184人が合格。

APを自分と照らし合わせ、第１志望校にこだわらせる

群馬県立太田高校 **新井高広** あらい・たかひろ

本校でも2年生には複数のオープンキャンパスに参加させ、大学について分かったことなどをクラスで発表させたり、クラス担任に面談でプレゼンさせたりしています。ただ、大学を複数校見に行っても、話題にするのは第1志望校のみ。第1志望校への思いを強く持たせることが目的だからです。本校は「現役合格よりも、行きたい大学へ」という指導をしていますが、それでも3年生になると弱気になって、「合格できる大学」を探し出す生徒が出てきます。できるだけ早い時期に、第1志望校へのこだわりを持たせることが必要です。

今回の検討会では、2年生2学期の段階で、アドミッション・ポリシーと今の自分を照らし合わせて、「既にやっていること」「これからやるべきこと」を整理させることにしました。大学からの発信を受け止めるだけでなく、自分のこれからを考えることに大きな価値があると思いますし、双方向性があるからこそ、その大学への思いがより高まるのだと思います。

新井先生プロフィール 教職歴27年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。数学科。「正しい道を選ぶのではなく、選んだ道を正しいものにできる生徒を育てたい」

学校プロフィール 全日制／普通科／男子校／1学年約280人／2018年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東北大、東京大、東京工業大、名古屋大、京都大などに130人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ559人が合格。

アドミッション・ポリシーを身近な観点で自分化させる

宮崎県立延岡星雲高校 **柳井健二** やない・けんじ

本校には、進学に対する意識がアバウトで、「国立大ならどこでも」という生徒が数多くいます。大学について広く知るためにも、1、2年次でのオープンキャンパス参加を生徒に強く勧めています。今回の改訂後のシートには、生徒に第1志望だけを書かせています。本校であれば、生徒の視野を広げるという意味で3、4大学を書かせるかもしれません。ただ、今回の検討会を通して、まず1つを深く調べ、考えるという利点もあると感じました。どちらがこれからの生徒に合っているのか、考えてみようと思います。

アドミッション・ポリシーと今後の自分については、具体的に考えられるヒントを与えたいです。例えば、自分が共感したアドミッション・ポリシーと、そこで描かれている人材像に1番近いクラスメートを考えさせたり、自分の苦手科目をどう頑張ると、その人材像に近づけるかを聞いてみたりしてはどうでしょう。身近な観点で聞くことにより、日々の授業の受け方を見直す契機になるかもしれません。

柳井先生プロフィール 教職歴26年。同校に赴任して10年目。主幹教諭。教務部。英語科。「活躍できる場を与え、対話を通して導き、生徒一人ひとりに成長や自立を実感させたい」

学校プロフィール 全日制／普通科・フロンティア科／共学／1学年約200人／2018年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、山口大、宮崎大、大阪府立大などに25人が合格。私立大は、駒澤大、近畿大、福岡大などに延べ133人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています！

「改良！　指導ツール　ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項❶～❹をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前にいま一度、生徒情報が削除されているかご確認をお願いいたします

❶学校名・お名前
❷分掌・ご教職歴
❸ツールの内容（目的・活用時期・活用方法）
❹ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良！　指導ツール　ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。（株）ベネッセコーポレーション　CPO（個人情報保護最高責任者）
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

理論と技術の体系的なカリキュラムで実践的な港湾・貿易業務を学ぶ

港湾職業能力開発短期大学校神戸校 港湾流通科

貿易に必要な書類の実物を作成しながら実践的に学んでいます

憧れていた貿易業務は、思ったよりも記入書類の種類が多く、驚きました。就職後に役立つ知識を少しでも多く身につけたいです。（大塚さん）

貿易業務に必要な資格取得のための授業もあります

パソコンを使った授業も多いです。２年次の「港湾情報処理実習」という授業では、企業でもよく用いられるソフトウエアを使って実践形式で学び、資格取得もできます。（長谷川さん）

1年間の研究活動の成果を校外に向けて広く発信します

２年次の「総合制作実習」は、仲間と協力して研究を進めます。１人で取り組むよりも、アイデアや知識が広がりやすいことを実感しています。（大塚さん）

港湾業務に特化した実践技術者を育成

日本における貿易量の99％以上は海運であり、港湾には貿易事務や通関業務、倉庫管理業務など、多様な仕事がある。港湾職業能力開発短期大学校は、港湾業務の実践技術者の育成を目的とする、厚生労働省所管の２年課程の短期大学校だ。神戸校と横浜校があり、神戸校では、港湾流通・港湾技術・港湾ロジスティクスの３科を設置し、地域の実情に合った教育を展開する。

港湾流通科の定員は20名で、学生たちは国際物流のルールや輸出入手続きなどを学び、貿易業務のスペシャリストを目指す。２年生の大塚

港湾短大神戸校
港湾流通科２年
長谷川裕菜
はせがわ・ゆうな
兵庫県立加古川南高校卒業。神戸港の企業に貿易事務職としての就職を志望。

港湾短大神戸校
港湾流通科２年
大塚真随
おおつか・なおゆき
徳島県立小松島高校卒業。貿易・物流企業に事務職としての就職を志望。

真随（なおゆき）さんは、「高校1年生の時に先生から貿易事務の仕事についての話を聞いて興味を持ち、関連する勉強ができる大学を探しました。この学校は、神戸ポートアイランドにあり、港の近くで貿易の業務が学べる点にひかれました」と話す。

IT化の進む現場の実情を反映した授業で学ぶ

カリキュラムは、業務に必要な知識・技能の習得、貿易関連の資格取得に向け体系的に構築されている。現場の実情が教育内容に反映されているため、即戦力として活躍できる力が身につけられるのが特徴だ。

例えば、港湾物流業界では現在、生産性向上や効率化に向けて自動化・機械化・IT化が急速に進み、データ処理能力の高い人材が求められている。そこで、1年次には表計算ソフトの実践演習を、2年次には貿易業務に必要なデータベースのプログラミングを学ぶようになっている。

「ほぼ初心者の状態から始めて、1年生でマイクロソフト オフィス スペシャリスト（エクセル）の資格を取得しました。その知識をベースに、2年生では業務を想定したデータ処理を学んでいます」（大塚さん）

同様に、物流センターなどでも機械化が進んでいるため、1年次の「物流機械実習」ではロボットを操作するプログラミングの演習を行う。

書類作成などもシステム化が進んでいるが、授業では最初はあえて手書きでの作成方法を学び、本質的な理解を促すことを大切にしている。例えば、2年次の「港湾情報処理実習」は、輸出入における書類や貨物の流れを理解し、必要な手続きについての知識・技能を身につける科目だ。2年生の長谷川裕菜さんは次のように述べる。

「手続きや書類の種類は多岐にわたり、英語で記入するケースも多くあります。まず手書きでしっかりと作成できるようになることを目指し、一つひとつの知識を確認、理解しながら学んでいます」

そうした業務能力の習得と並行し、港湾物流の企業や現場を訪れ、将来へのイメージを膨らませる。

「企業訪問では、授業内容と企業での業務の様子が結びつき、貿易業務をより具体的に理解できました。一方で、『もっと書類作成の勉強を頑張ろう』などと、目標を再確認できました」（長谷川さん）

1年間を通した研究で問題発見・解決能力も育む

これからの港湾物流の現場を支える人材に求められる問題発見・解決能力の育成も行う。2年次の1年間を通して取り組む「総合制作実習」では、港湾物流に特化した研究テーマが設定され、ゼミ形式で探究的な活動を行う。4月に研究テーマを決定し、以後は学生主体で調査・研究に取り組み、その成果を2月の最終発表会で披露する。長谷川さんは、物資の運搬など、物流へのドローンの活用方法について研究しており、大塚さんは、フェアトレード（＊1）について調査を進めている。

「昨年、国内のフェアトレードに関する先輩の発表を聞いて、世界の貧困問題にアプローチする意義深い取り組みだと思い、興味を持ちました。今後、海外企業の取り組みの調査を検討しています」（大塚さん）

2人とも卒業後は港湾関連企業への就職を目指し、現在は実践的な港湾や貿易の業務の習得や研究を進めるとともに、就職活動にも取り組む充実した日々を送っている。

大学の思い

3つのスキルを融合させて高度な業務能力を育む

港湾短大神戸校
校長
松原元一
まつばら・げんいち

本校は、1998年に短期大学校となり、今年で20年目を迎えます。港湾物流業界の期待に応え、新しい時代を担う高度な知識と技能を兼ね備えた実践技術者を数多く送り出しています。

本校が育てたい学生の資質・能力は、「テクニカルスキル」「ヒューマンスキル」「コンセプチュアルスキル」の3つです。テクニカルスキルは、港湾業務の遂行に求められる知識・技能であり、これらは実践重視を徹底したカリキュラムを通して習得します。ヒューマンスキルは、コミュニケーションを通して良好な人間関係を構築する力であり、円滑に業務を進めるために欠かせません。本校では、ヒューマンスキルを少人数のグループ演習などを通して身につけていきます。そして、物事の本質を把握し、問題発見・解決につなげるために必要なコンセプチュアルスキルは、主に「総合制作実習」を通して育成します。

これらの3つのスキルが高いレベルで融合して初めて、港湾業務の実践技術者として十分な力が発揮されると考えています。

＊1 fair trade、公平貿易。発展途上国の生産物を、その生産者の生活を向上させるため、適正な価格で生産者から直接購入し、労働条件や環境保護などにも配慮して行われる貿易のしくみ。

1年次から複数の実習を同時に行い、地域社会のマネジメント力を身につける

北九州市立大学 地域創生学群

1年次の実習で仲間と協働する難しさに気づきました

１年次の実習で１時間のラジオ番組制作に取り組みました。私のチームは、意見の衝突等から準備不足で本番の放送内容は成功とは言えず、その悔しさが次の実習に生きています。（金子さん）

車いすソフトボール[*1]大会に出場。体験するからこそ分かることが多いです

大会運営のほか、自分も車いすに乗り、ソフトボールをプレー。車いすで運動する苦労を知り、競技の普及に向けて、何が必要なのか身をもって学ぶことができました。（早川さん）

高校の先生に課題をヒアリングし、高校生にキャリア教育を行いました

演習（ゼミ）では、高校生のキャリア教育について研究中です。高校の先生から生徒同士の対話が深まらないと聞き、解決するための授業を行いました。（金子さん）

1年次から地域の課題解決を目指す実習に取り組む

北九州市立大学地域創生学群は、地域創生学類のみからなり、地域社会で指導的役割を担い、地域の再生と創造に貢献する人材育成を教育理念に掲げる。その実現に向け、1年次から地域で行う実習を複数設置し、実践的なスキルを育んでいる。

数多くある実習科目の柱となるのが、1～3年生が約30人ずつのチームになってプロジェクトに取り組む「地域創生実習」だ。農村部の地域活性化、子どもの学習支援など、地域の団体と連携して活動するプロジェクトがコースごと（＊2）に設定されている。学生は入学時に希

地域創生学類地域マネジメントコース4年
金子美咲
かねこ・みさき
福岡県立小倉西高校卒業。学外でも教育系の地域活動に取り組んでいる。

地域創生学類地域ボランティア養成コース3年
早川優吾
はやかわ・ゆうご
岡山県・国立津山工業高等専門学校高校課程卒業。大学では硬式野球部に所属。

＊1 障がい者・健常者が老若男女を問わず、車いすに乗りながらソフトボールを一緒にプレーするスポーツ。
＊2 地域創生学類には、地域マネジメントコース、地域福祉コース、地域ボランティア養成コースの３つのコースが設置されている。

望するプロジェクトを選び、原則3年間は同じプロジェクトで活動を行う。地域創生学類地域マネジメントコース4年の金子美咲さんは、1年次から大学生が町の課題に取り組むプロジェクトに入り、若者のシビックプライド（町に対する愛着）の醸成・向上に取り組んだ。

「1年生の時に高校生向けの進路イベントで、北九州市で活躍する社会人の講演会を実施しました。参加した高校生が話を聞きながら涙する姿を見て、人の心を動かす場面もプロデュースできると分かり、実習に積極的にならなきゃいけないと思いました」

ラジオ番組制作を通して実習に必要なスキルを学ぶ

1年次から実習に積極的に参加できるよう「地域創生実習」と並行して全学群生が履修するのが、1年次前期の必修科目「指導的実習Ⅰ」だ。コミュニティFMのラジオ番組制作を、コースや出身地が異なる約5人のチームに分かれて行う。地域ボランティア養成コース3年の早川優吾さんは次のように振り返る。

「私たちはボランティアに必要な『傾聴』に関する企画を考え、まず先生にプレゼンテーションしましたが、『消費者側からプロデューサー側に視点を切り替えるように』と徹底的に指導されました。他チームでは、泣き出す学生もいるほどでした」

金子さんもこの実習での経験が、以降の実習で役立ったと話す。

「自分とは全く価値観が違う人たちが集まって、1つのものをつくり出す難しさを実感しました。まずは、メンバーが本音を言い合える場をつくることから始めました」

1年生だけの実習で、人数も少ないため一人ひとりの責任は大きい。この実習で、協働の難しさや事前準備の重要性を学んでいく。

複数の実習を同時に進めマネジメント力を磨く

学生が参加する実習ごとに、目的はもちろんメンバーや連携する地域の団体も異なるため、一人ひとりに求められる役割が異なり、学生は多様な知識・技能を習得していく。また、複数の実習を並行して履修しているため、事前準備、実際の活動、振り返りなどの活動時間を合計すると、週30時間以上に及ぶという。

「実習や打ち合わせの予定は、スマートフォンのアプリと手帳で管理し、メンバーにも共有します。学年が上がるにつれてスケジュール管理やマネジメントが上手になりました」（金子さん）

学生は実習のほかにも、必修で専門性を深化させる演習科目（ゼミ）を2年次から履修し、同科目でも地域活動に取り組んでいる。

「ゼミでは、車いすソフトボールの普及活動を行っています。実際に自分もメンバーとして参加し、障がい者スポーツでは一人ひとりに合った用具の工夫や改良の必要があることを知りました。そうした課題をゼミの授業で先生や仲間と共有し、対応策を模索して、専門性を深めています。大学と地域、双方で学ぶ意義を実感しています」（早川さん）

そうした経験を積み重ね、力をつける学生が多く、同学群の就職率は6期連続100％を誇る。

「地域での実習や演習を通して教育にかかわる仕事がしたいと思い、教育系の企業に就職予定です。後輩にも、多くの実習体験から自分の道を見つけてほしいと思います」（金子さん）

大学の思い

日常的に地域とかかわり失敗から成長してほしい

地域創生学群長
眞鍋和博
まなべ・かずひろ

どのプロジェクトも、実際の地域課題に根づいたものばかりです。一定期間だけ地域に入り、実習を行うのではなく、3年間同じプロジェクトを続けることで、日常的に地域とかかわり、目的を達成していきます。

理論を十分に学んでいない1年生からあえて複数の実習に取り組ませるのは、コミュニケーション力や社会人としてのマナーはもちろん、チームビルディング、プロジェクトマネジメント、リスク管理などの課題解決に必要なスキルを身につける必要性を体感してほしいからです。失敗経験を積む中で、学生は必要な知識や技能を主体的に学んでいきます。

次年度はカリキュラムを改訂し、演習科目でさらに専門性も追究できるようにする予定です。また、これまでは地域課題を解決できる人材の育成を主眼に置いていたため、北九州市中心に活動をしていました。ただ、海外に視野を広げれば、より自分の地域を相対化して見ることができると考え、学群独自の海外スタディツアーの開発にも力を入れていきたいと考えています。

職員会議・教員研修を充実させてチーム学校をつくる

これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

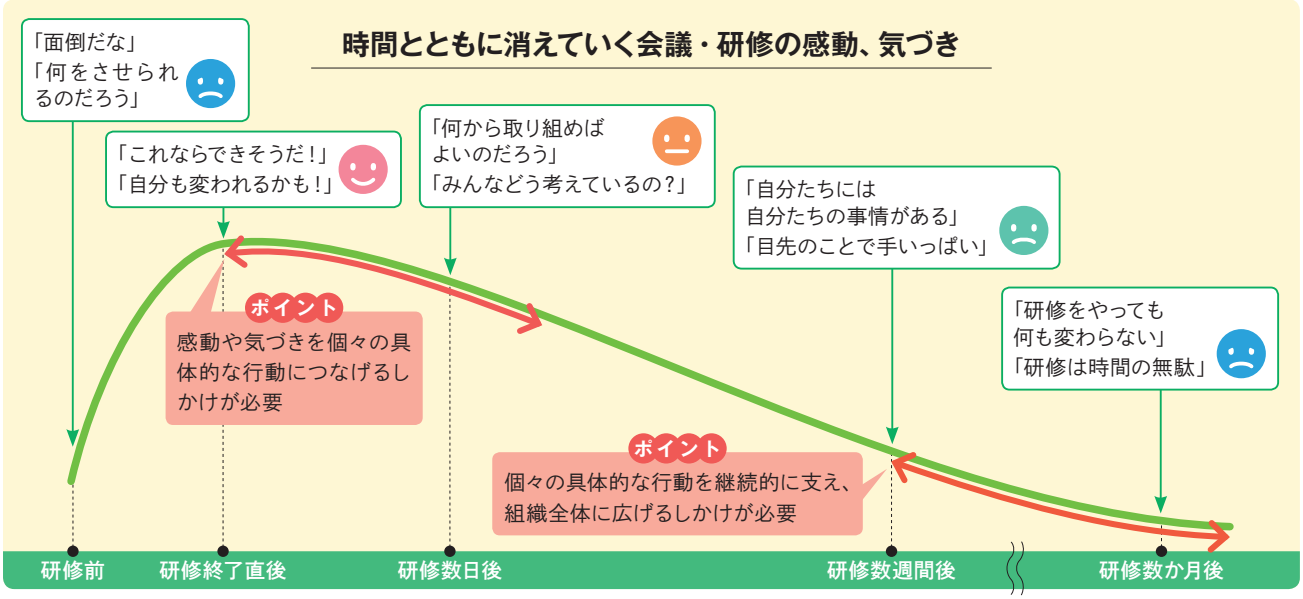
監修　日賀優一　「答えが1つではない問い」を考える高校生向け対話型ワークショップを開催する「三四郎の学校」事務局長。本誌 2016 年 6 月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりにも携わる。

テーマ　行動変容を促す振り返り

会議・研修の感動や気づきを、「個」に定着させ、「組織」に広げる

2017年10月号の本コーナー **P.46 ～ 47** では、「前向きになれる振り返り」として、成果が担保されていたり、結果がすぐに表れたりするとは限らない取り組みについて、どのように振り返りを進めれば「引き続き頑張ろう」「次はこれを改善してみよう」といった意欲が高まるのかを考えました。

今号では、振り返りを通じて得られた感動や気づきを、参加者の内面に長くとどめることで、個々の具体的な行動変容を起こし、それを学校全体に広げていくために、司会・進行役ができる振り返りのしかけについて考えます。



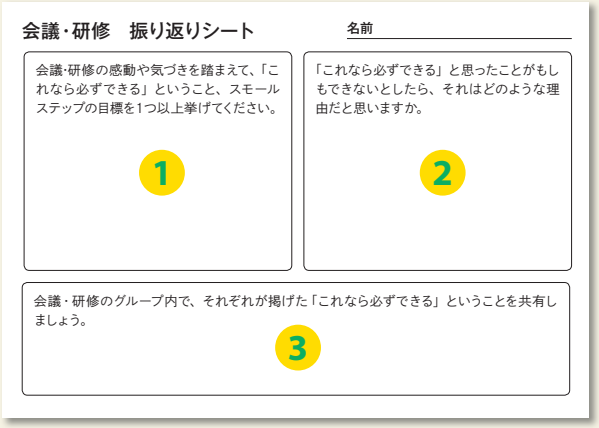
会議・研修の感動、気づきを「明日からの自分」につなげる

これからの教育活動について校内で話し合ったり、有識者の意見を聞いたりする場が多くの高校現場で設けられています。では、そうした学びの場が個々の教師の変化や成長にどれほど役立っているのでしょうか。授業改善を目的とした校内研修が頻繁に開催されている現状に対して、「研修に時間をとられすぎだ」「同様の研修を繰り返しているが現状は変わらない」と不満を持つ先生もいるようです。コンピテンシーベースへの授業改善など、今、現場に求められている変化は一朝一夕で実現できるものではありません。

だからこそ、会議・研修で得られた感動、気づきを参加者それぞれが具体的な行動に落とし込み、さらにその行動を実行・継続していけるようなしかけと、そこで生まれた変化を校内で共有する仕組みが、これからの会議・研修には求められます。一人ひとりの行動変容が促されるよう、参加者の心境を見通し、それに寄り添った振り返りを会議・研修後に行うことが、企画・運営役の先生の重要な役割と言えるでしょう。

変容を促す！　会議・研修の振り返りの仕組み

会議・研修終盤　参加者個々が「必ずできること」を具体的に挙げ、仲間と認め合う


会議・研修　振り返りシート　名前

会議・研修の感動や気づきを踏まえて、「これなら必ずできる」ということ、スモールステップの目標を1つ以上挙げてください。

1

「これなら必ずできる」と思ったことがもしもできないとしたら、それはどのような理由だと思いますか。

2

会議・研修のグループ内で、それぞれが掲げた「これなら必ずできる」ということを共有しましょう。

3

会議・研修後の振り返りシートでは、上記のほかに、参加して気づいたことや感じたこと、今後の会議・研修に対する要望など、学校や参加者の状況に合わせて項目を設定するとよいでしょう。

1 「必ずできること」を具体的に書く

会議・研修の最後に、参加者に振り返りシートを配布し、「これからの自分」について考えてもらいます。その際、「こうなりたい」といった願望ではなく、「これならば必ずできる」というスモールステップの変容を具体的に書くように伝えます。

2 「必ずできること」を妨げる要因に注目

目指す変容が小さなものであっても、実際に一歩を踏み出す際には様々な壁に直面します。「『これならばできる』と考えたことができないとしたら、それはなぜか」を考えさせることで、参加者に状況のメタ認知と問題の解決を促します。

3 「必ずできること」を仲間と承認し合う

個々の参加者が振り返りシートで掲げた「これならば必ずできる」ことを、4、5人のグループで共有します。他者の承認を受けることで実際に取り組む意欲が高まり、他者の考えを知ることで会議・研修での学びがより多角的になります。

数週間後　感動・気づきを深めさせ、個々の変容を組織として共有する

❶会議・研修の内容を企画・運営役が再発信

会議・研修のねらいや実際に話し合われたこと、会議・研修の最後に参加者が書いた振り返りシートの内容を抜粋したものなどを、企画・運営役がレポートとしてまとめ、それを参加者に配布することで、参加者個々が改めて感動や気づきを深められる機会をつくります。

❷参加者個々の変容の様子を校内で共有

教科団や学年団の枠を超えて、参加者の変化の様子を知ることができるように、参加者に簡単な事後アンケートを実施し、「会議・研修が自分にもたらした小さな変容」を聞きます。そのいくつかを学校全体に紹介することで、行動変容は校内で着実に進んでいることを伝えます。

「変わらなかった」ではなく、「変わるのかも」と希望の明かりをともす

会議・研修を無事に終わらせるだけではなく、そこでの感動や気づきを、参加者個々のその後の行動変容につなげるまでが、これからの会議・研修の企画・運営役に求められる役割と言えるでしょう。そのためにも、終了後のフォローが大切になります。

「数年前、アクティブ・ラーニングの校内研修が繰り返し実施されたが、変化の機運は一過性で、多くの授業は今も本質的には変わっていない」。先日、ある先生から聞いた言葉です。その学校では、研修後の個々の変容を組織全体につなげる仕組みがなく、全校的な授業改善に至らなかったばかりか、校内研修に対して無力感を抱く「負の記憶」が一部の教師に残ってしまったのです。どんなに素晴らしい講師がどんなに心に残る研修を行っても、すぐに組織的な行動変容を起こすことは困難です。だからこそ、明確に変われない中でも個々の「変わろうとするもがき」を拾い上げ、「研修に参加したA先生の小さな挑戦」などと校内に紹介していくことで、「みんなでいつか変われるかも」という希望の明かりをともし続けることが大切です。

貴校の会議・研修づくりをお手伝いします！

VIEW21編集部が本コーナーの監修者とともに、貴校の会議・研修づくりをお手伝いいたします（会議・研修の様子は、本誌誌面で紹介させていただく場合があります）。現状の会議・研修のあり方に課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項❶～❹をご入力の上、下記のe-mailアドレスにご送信ください。
※送信前にいま一度、生徒情報が削除されているかご確認をお願いいたします

❶学校名・お名前　❷分掌・ご教職歴　❸改善したい会議・研修の内容（目的・時期）　❹会議・研修に対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

※ご応募いただいた学校すべてを必ずお手伝いできるとは限りません。

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「これからの会議・研修のあり方、つくり方」の会議・研修づくりの募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。（株）ベネッセコーポレーション　CPO（個人情報保護最高責任者）
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

早稲田大学政治経済学部が2020年度、一般入試改革を実施

グローバルリーダー育成に向け、思考力や主体性等を測る入試へ

早稲田大学では、創立150周年にあたる2032年を見据えた中長期計画を策定し、様々な改革を進めている。そのトップに据えられているのが入試改革だ。今回は、入試改革を進める学部の1つである政治経済学部の須賀晃一学部長に、そのねらいについて話を聞いた。

独自の学科試験を廃止し「大学入学共通テスト」を利用

2018年6月、早稲田大学は、2021年度入学者に対して行われる一般入試における全学共通の変更点と、政治経済・国際教養・スポーツ科学部の一般入試の変更点を発表した。

このうち、政治経済学部では、学部独自の学科試験を廃止し、「大学入学共通テスト」及び英語外部検定試験の活用と新たな学部独自試験の実施を公表した（**図1**）。今回の入試改革の背景を、政治経済学部の須賀晃一学部長は次のように説明する。

「これまで本学部のカリキュラムは、政治・経済・国際政治経済学科の3学科で異なっていました。しかし、国際的視野を持ち、社会の様々な領域で活躍するグローバルリーダーを育成するためには、学部全体としての専門性をさらに深め、グローバルな教育環境を整える必要があると考えました。そこで、カリキュラムを大幅に見直し、学科問わず政治と経済のいずれも学ぶという当学部の特徴をさらに推し進めるため、2019年度から3学科共通の必修科目を設置し、政治経済の基礎から段階的に学べるようにする予定です（**図2**）。また、現在の英語学位プログラムを発展させ、英語で行う授業をさらに増やします。そうした中で、一般入試も入学後の学びに必要な資質・能力を求める内容にすべきだと考え、大幅な入試改革に踏み切りました」

グローバルリーダーに必要な能力を入学時に測る

今回の入試改革で注目すべき点の1つは、学部独自の学科試験を廃止して「大学入学共通テスト」を利用し、その中で「数学Ⅰ・A」を必須とすることだ。そのねらいを須賀学部長は次のように話す。

「これまでの本学部の一般入試は、専用の対策が必要なほど難解な問題だと言われていました。ただ、将来の予測が困難な時代において、グローバルリーダーには、『学力の3要素』（＊1）が必要だと我々は感じています。そこで、『大学入学共通テスト』を活用し、高校時代に幅広い学問に触れ、多様な経験を積み、豊かな人間性を育んできた生徒が評価される入試にしたいと考えました。また、『数学Ⅰ・A』を必須としたのは、数学は政治経済を学ぶための基礎となるものであり、カリキュラム改訂でも統計学やミクロ経済学入門などを3学科共通必修科目としたため（**図2**）、入試で数学の基礎学力を測ることに

図1　政治経済学部の2020年度実施の一般入試の内容

（1） 大学入学共通テスト （各科目25点、合計100点）	①外国語②国語③数学Ⅰ・A④選択科目（地理歴史、公民、数学Ⅱ・B、理科の中から1教科を選択）
（2） 英語外部検定試験及び学部独自試験 （100点）	• 使用できる英語外部検定試験は、大学入学共通テストで活用される試験を前提として検討中。 • 英語外部検定試験の配点割合は〈（2）の3割程度、全体の15％程度〉とする予定。 • 学部独自試験は、日英両言語による長文を読み解いた上で解答する形式とし、記述解答を含む。

＊大学資料を基に編集部で作成。

＊1「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」

しました」

学部独自試験の内容も、入学後に求められる力を強く意識したものだと、須賀学部長は強調する。

「学部独自試験の記述式問題では、論理的思考力はもちろん、『主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度』（以下、『主体性等』）も測りたいと模索しています。また、受験生に入学後どのような学習をするのかをイメージしてもらえる内容にする予定です。具体的には、社会科学に関する長文や図表を読み解き、自分の考えなどを記述する形式を考えています。英語と日本語の長文問題のいずれも出題する予定です」

また、新カリキュラムでは、グローバルリーダー育成に向けて英語4技能の育成も強化しており、チューター教員による4対1の少人数制の英会話の授業や、英語による学術的文章の作成とディスカッションの授業などを既に必修化している。併せて、留学生の受け入れを拡大するほか、卒業までに海外留学も推奨していく。そのため、入試でも英語外部検定試験の結果を活用し、英語4技能を評価するという。

早稲田大学政治経済学術院長、
政治経済学部長
須賀晃一

すが・こういち◎亜細亜大学経済学部助教授、福岡大学経済学部教授等を経て、2000年から早稲田大学政治経済学部教授。2014年から現職。

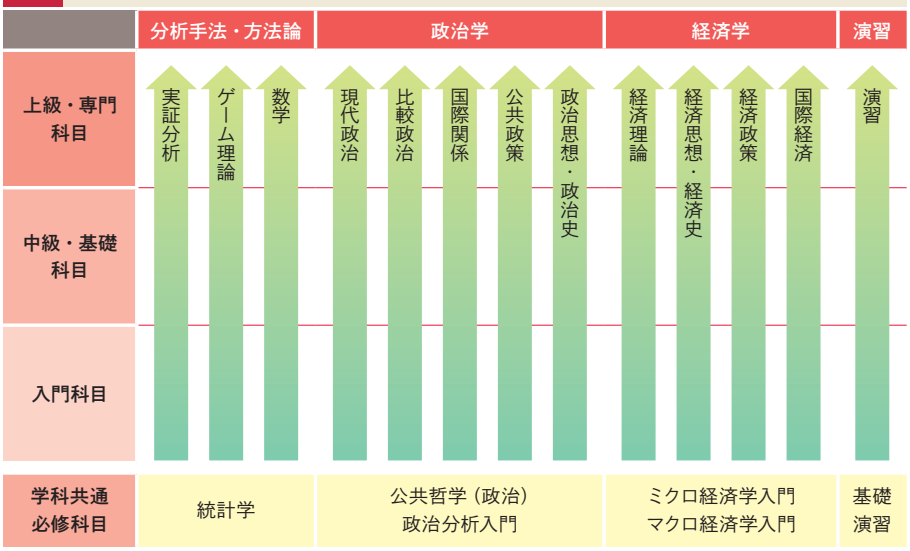
将来的には、ポートフォリオの得点化の可能性も

全学共通の取り組みとしては、全学部の受験生を対象に、Web出願時に受験生本人が「主体性等」に関する経験を記入することを出願要件にすると発表した。政治経済学部では、入学後の学生サポートのヒントとして活用するほか、入試結果と記入内容を照らし合わせて、入試制度の改善の参考にもする予定だという。

今回の改革では、記入内容は得点化しないと発表されたが、今後、政治経済学部では、記入内容をより重視していきたいと須賀学部長は語る。

「採点方法など課題はありますが、高校での学習や活動の経験を記入したポートフォリオを活用して選抜できるようになることが理想です。現在、高校の先生方は、探究学習やアクティブ・ラーニング等の指導に力を入れられ、『主体性等』を始めとする『学力の3要素』を育成されていると思います。そうした高校の教育を、入試によって曲げてはいけないと強く責任を感じています。グローバル入試や推薦入試だけでなく一般入試においても、高校時代の様々な学びや経験を十分に評価するような入試を行い、高校での学びや経験と大学入試がスムーズに接続するように改革を進め、全国から多様な学生を迎えたいです。そして、大学教育改革にも一層力を入れ、知識・技能に加え、教養も兼ね備えた真のグローバルリーダーを育成していきます」

図2　2019年度 政治経済学部 カリキュラム概要



＊学科の差は、独自の必修選択科目と領域ごとの取得単位数による。
＊大学資料を基に編集部で作成。

シリーズ 私立中高一貫校に聞く

「リーダー」を育む6か年デザイン

FILE 1

東京都・私立豊島岡女子学園中学校・高校

「志力」と「基礎力」を備えた世界で輝く女性リーダーを育てる

◎設立　1892（明治25）年
◎形態　全日制／普通科／女子校
◎生徒数　1学年約270人（中学校）、約350人（高校）
◎建学の精神　「道義実践　勤勉努力　一能専念」
◎2018年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、東京大、京都大などに163人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ928人が合格。
◎URL　https://www.toshimagaoka.ed.jp

◎探究学習での試行錯誤が、生徒を成長させる

東京都・私立豊島岡女子学園中学校・高校では、世界で起きている諸問題の解決に貢献できる女性の育成を目指している。教務部長の十九浦理孝先生は、こう語る。

「グローバルに活躍するためには、何よりも高い志を抱く力『志力』が必要です。また、社会への広い視野、協働性や粘り強さといった汎用的な資質・能力も、より重要になります。本校ではそれらを『基礎力』と位置づけ、『志力』とともに、全教育活動で育成を図っています」

その一環として、探究学習に力を入れている。例えば、「社会科シンポジウム」は教科融合型の取り組みであり、「捕鯨の是非」などの社会的なテーマについて、地理歴史・公民科や理科といった複数の教科の教師による講義を受けた後、生徒同士が話し合う。

また、中学3年生～高校2年生の希望者を対象とする「モノづくりプロジェクト」では、自分たちのアイデアを形にする。2018年度は、夏季休業中にチームで生物を模した飛翔体を製作し、9月に大学の研究者を審査員として招くコンテストを行う。同プロジェクト担当の田尾裕介先生は、次のように話す。

「成果物の完成度も大事ですが、同じ目標に向かってメンバーと力を合わせるという経験を重視しています。製作過程ではうまくいかないこともあると思いますが、試行錯誤する中で大変な思いをすればするほど、学びが深まり、意志や根気も育まれていくと考えています」

写真　高校1年次の探究学習では、物事を「深く考える」基礎を定着させることを目指す。そこで、工作用紙1枚を用いて、耐久性のある橋を作成するというモノづくりを行った。

◎生徒一人ひとりの成長を多面的・総合的に見取る

同校の探究学習は、以前は課外活動として希望者が行うものが多かった。そこで、全校体制で取り組めるよう、18年度にSSH（＊1）の指定を受け、高校の授業で探究学習を進めることにした（**写真**）。SSH推進委員会主任の根岸靖先生は、こう述べる。

「3年間の探究学習の目的は、調べて得た知識を活用し、アウトプットする力を生徒に定着させることです。そこで、『科学的リテラシー』を様々な観点で学び、自ら深く学ぶ『探究』と自然とつながるようにしたいと考えています」

18年度には、あらゆる探究学習のeポートフォリオ化を進めるべく、「Classi」（＊2）を導入。生徒一人ひとりの成長の可視化に力を入れていく考えだ。

「生徒には、探究学習を通して、夢中になれるものを見つけてほしいと思っています。そうなれば、生徒はさらなる高みを目指して挑戦を続けるため、本校が重視する『志力』『基礎力』両方が高まるでしょう。目標に向かって努力する生徒を多面的・総合的に見取ることは、中学校・高校の次期学習指導要領の目指すところにもつながると考えています」（十九浦先生）

東京都・私立豊島岡女子学園中学校・高校
十九浦理孝 つづうら・まさたか
教職歴21年。同校に赴任して22年目。教務部長。教務部進路進学指導委員会主任。

東京都・私立豊島岡女子学園中学校・高校
根岸 靖 ねぎし・やすし
教職歴29年。同校に赴任して30年目。SSH推進委員会主任。

東京都・私立豊島岡女子学園中学校・高校
田尾裕介 たお・ゆうすけ
教職歴8年。同校に赴任して7年目。

＊1　文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール。
＊2　株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

少子化という社会課題、そして次世代リーダーの育成という時代からの要請に対応すべく、
これまで以上に特色化が図られているのが、私立中高一貫校だ。
今号から3回にわたって、変革を進める学校を取り上げ、
次期学習指導要領の捉え方を含めた、私立中高一貫校が向かおうとしているその先を考える。

FILE 2

大阪府・私立高槻中学校・高校

世界を舞台に活躍できる「次世代リーダー」の育成

◎設立　1940（昭和15）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約270人（中学校）、約250人（高校）
◎建学の精神　「国家・社会を担う人材の育成」
◎2018年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、東京大、京都大などに148人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ519人が合格。
◎URL　https://www.takatsuki.ed.jp

◎生徒が「ホンモノ」に触れて学ぶ場を設定

大阪府・私立高槻中学校・高校は、スクールミッションに「Developing Future Leaders With A Global Mindset」を掲げ、GL（グローバルリーダー）・GS（グローバルサイエンス）・GA(グローバルアドバンスド）の3コース制の下、「次世代リーダー」の育成を目指している（図）。重視する取り組みの1つが探究学習であり、コースに分かれる中学3年次から、各コースの特色に応じて本格化させる。工藤剛（つよし）校長は、こう語る。

「国際社会で活躍するためには、知識・技能を十分に身につけた上で、それらを活用し、新しいものを創造できるようになる必要があります。そこで、SSHやSGH（＊3）の指定を受け、課題研究を中心に、生徒が国際的な第一人者や一流の研究者・専門家と直接交流し、『ホンモノ』に触れることができる場を積極的に設けています」

さらに、同一法人である大阪医科大学とは、所属するコースにかかわらず、希望者を募って、夏季休業中の1週間、医師や看護師に同行して在宅医療の現場を見学する「地域医療体験」を行う。

「医療の現場で足手まといになることもあると思いますが、真の成長には、失敗や苦労が欠かせません。本校では、生徒に困難な状況を経験させることも学校の大切な役割と位置づけ、全コースで取り組みを工夫しています。生徒には、その中から自分が興味のあるものに挑戦してほしいと考えています。また、多様な経験を通して学びを深められるよう振り返りを重視し、『Classi』を活用したeポートフォリオに蓄積させています」（工藤校長）

図　次世代のリーダーに必要な10の資質

個人の能力や思考
1. 全体を見渡して判断し、主体的に行動する力
2. 論理的に思考し、日本語および英語で表現する力
3. 自己管理能力
4. 創造性（知識や情報を発展的に活用する力）

他者との関係
5. 多様な他者を理解し思いやる力
6. コミュニケーション力
7. コラボレーション力（チームワーク）

社会や文化との関係
8. 国際社会の持続的発展や平和に貢献しようとする意志
9. 日本の伝統・文化を尊重する心
10. 倫理観

◎全校体制で取り組むという文化を構築

教師の多様なアイデアを募れるよう、校内の組織編成も工夫している。その1つとして設けられた部署が、新規教育プログラムの立案などを行う「教育推進企画室」だ。教職歴や分掌にかかわらず、希望すれば誰でもメンバーになれるため、教科や分掌の垣根を超えた企画を生み出すことができる。ほかにも、生徒がSGHの課題研究でより幅広いテーマを設定できるよう、「SGH推進部」のメンバーには、地理歴史・公民科の教師も加えている。

「全教師が協働しやすい体制を整えることで、探究学習を始めとする教科横断的な取り組みも、一層充実していくでしょう。そうなれば、『次世代』リーダーに不可欠な広い視野の涵養につながり、本校のスクールミッションの実現に近づきます。また、高校の次期学習指導要領で学ぶ最初の学年である19年度中学1年生を迎える準備として、教員が次期学習指導要領のポイントを把握するための研修を計画しています。学習指導要領はその時々の社会のニーズを反映しているため、その理解を深めた上で、私学として、本校のスクールミッションを実現させる具体的なルートを策定していくことが大切であると考えています」（工藤校長）

大阪府・私立高槻中学校・高校校長
工藤　剛　くどう・つよし
教職歴29年。同校に赴任して30年目。進路指導部長、教頭、副校長を経て、2018年度より現職。

＊3　文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

Reader's VIEW

先生方からのご意見を紹介します

2018年6月号へのご意見

対話的な研修を進めていきたい

次期学習指導要領が示され、教育課程や授業のあり方、評価、「大学入学共通テスト」を踏まえた対策など、見えない部分は多々あるが、6月号の特集を読み、「対話的な研修」を進めていきたいと思った。主体性や協働性など、見えない資質・能力を可視化しなければならないが、大学がそれらをどう評価するのか、どのレベルを評価するのか、疑問点は多い。教師や生徒が徒労に終わらないことを願う。各大学には明確な指針を示してほしい。

兵庫県立相生高校　西 茂樹

生徒の気づきを待つ重要性を再認識

専門高校に勤務しているため、「『学校教育デザイン』を描く道標」で紹介された京都市立京都工学院高校の先駆的な取り組みは参考になり、工業担当の同僚にも記事を勧めた。工業高校ならではの「資質・能力」が設定されていたが、高校卒業後すぐに社会人としてそれらの資質・能力が求められるからこそ、「～する力・態度」が具体的に示されているのだと思った。こうした資質・能力を生徒に確実に身につけさせていくことは難しいことであると共感するとともに、築山富司彦先生の「生徒の気づきを粘り強く待ちました」という言葉に、我々教師が生徒の3年間を見通して、「手を差し伸べる」時と「じっと見守り待つ」時を判断する重要性を再認識した。

静岡県立御殿場高校　美那川 雄一

生徒自身が振り返る課題一覧を工夫したい

夏期課題一覧を配布する際に、これまでもいくつかの工夫をしてきたが、「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」で示された、①生徒自身が課題を選ぶ、②課題を通して身につけたい力を記入させる、③何ができるようになったかを記入させるといった視点にハッとさせられた。それらを参考に、生徒自身が振り返り、次の学習に結びつくような課題一覧を作成し、配布したいと思った。

鹿児島県　匿名希望

教育ちょこっトーク

テーマ
探究学習で生徒が設定してきた思いもよらないテーマ

- 「明日はいつからか」。時間の流れを話した後だったが、その純粋な疑問に、答えが全く出せなかった。　**千葉県**
- 「ツチノコなど、未確認の生物の研究」。まとまりあるレポートにはなっていなかったが、目のつけどころはよかった。生徒には既存の価値観にとどまってほしくないので、その事例を後輩に伝えている。　**新潟県**
- 「コミュニケーション力と学力の関係性はあるのか」。生徒自身が学力について出してきたテーマだったので、定義やどのように言語化するのかに興味が湧いた。　**静岡県**

『VIEW21』高校版 公式アカウント

LINE@

友だち募集中！

『VIEW21』高校版や教育に関連する最新情報をタイムリーにお届けします。お友だちの登録方法は、下の2次元バーコードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」＞「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。

ぜひ、お友だち登録をお願いいたします！
アカウント名：@view21

編集後記

「生徒と紡ぐ情熱教師File」（表表紙裏）や「教師を育てた言葉たち」（裏表紙裏）は1ページですが、人気のあるコーナーです。今号の「教師を育てた言葉たち」の取材では、北海道岩見沢農業高校の熊谷孝宏先生が書き続けた学級通信の厚さに、26年間、生徒と向き合い続けてきた重みを感じました。最後のページには体育祭の表彰状などともに、先生のメッセージがありました。生徒が自ら気づくまで「待つ」ことを大事にされているのは、「生徒と紡ぐ情熱教師File」の三重県立松阪高校の尾邊英也先生も同じで、生徒たちが「指導してくれた、指示してくれた」ではなく、「背中を押してくれた」と表現していたのが印象的でした。（荻原）

VIEW21 高校版 2018 10月号

次号は 10月15日発行（予定）

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた
言葉たち

No. 009

北海道岩見沢農業高校
熊谷孝宏先生
くまがい・たかひろ

◎教職歴 26 年。同校に赴任して 5 年目。キャリアガイダンス部長。英語科。

北海道岩見沢農業高校 全日制／農業科・畜産科・食品科・生活科・森林科・農業土木工学科、環境造園科／共学／1学年約 280 人／ 2018 年度進路実績（現役のみ）：4年制大は、帯広畜産大などに45人が合格。短大、大学校、専門学校進学 83 人。就職121人（うち公務員25人）。

教職４年目、初めて担任を受け持ったクラスは、その年度で閉科となる商業科の３年生でした。学力的に厳しく、生活態度にも課題が見られる生徒たちとどう向き合えばよいのかと、不安でいっぱいの私に、「あなたの売りは若さだ。それに加えて、もう１つ強みをつくらないか」と、教頭から提案されました。自己肯定感が持てず、何事も諦めがちな生徒に、小さなことでも積み重ねれば大きなことを達成できると、「先生自らが継続する姿を示してほしい」と言われたのです。

教頭の言葉を自分なりに考え、毎日、学級通信を出そうと決めました。１枚１枚は薄くても、１年間書き続ければ相当な量になります。連絡事項や行事予定、学習のアドバイスなどを書き、毎朝、生徒が登校する前に机の上に１枚ずつ置いて、重要なことはＳＨＲでも話すようにしました。停滞していたクラスの雰囲気を何とか変えたいと奮闘しましたが、生徒との関係は良好と言えるものではありませんでした。ただ、私にできることはこれしかないと、学級通信を書き続けたのです。気づけば、１年間で約 200 枚、とじると厚さ２㎝程の冊子になりました。そして、卒業式の日、積み重ねることの大切さを感じてほしいと願いながら、一人ひとりに冊子を手渡しました。

生徒のためにと思って続けていた学級通信でしたが、それで学んだのは私の方でした。生徒一人ひとりをよく見ること、どんな行事でもその目的を理解して取り組むこと、１年間の流れを見通して指導を考えることなど、どれも書くという作業を通じて気づかされたことです。また、仕事の段取りも改善しました。予定外の仕事が入っても、学級通信を書く時間を確保するよう意識して進める習慣が、毎日続けることで身についたからだと思います。

その後も、担任を持つ度に学級通信を書き続けました。生徒の状況を見て、伝えるべき内容や時期を判断できるようになったからなのか、「小論文のヒントを得ました」「自分が学びたいことに気づきました」などと、生徒から言われるようになりました。また、「あれは自分に向けた言葉ですよね」と、私のメッセージに気づく生徒もいました。そうすると、生徒をもっと触発させたいと思い、外部の研究会に参加して学級通信のネタを探すなど、一層力が入りました。学級通信は、生徒とのコミュニケーション方法の１つであり、自分の指導力を高める軸にもなっていました。

年度初めには、学級通信を床に落としても、そのままにする生徒がいます。私はすかさず、「人が時間をかけて作ったものを大切にできない人間は、大成しないぞ」と大げさに叱ります。その時はピンときていない生徒も、毎日机の上に置かれ続けると次第に学級通信を読むようになり、継続することの大切さを説くと深くうなずきます。言葉だけでなく、行動してこそ伝わることがあるのだと実感します。

今はＳＳＨ担当者として、週１回のＳＳＨ通信を出しています。実験や実習、大学訪問など、盛りだくさんの活動を見通して取り組めるように書くのがポイントです。毎日ではなくても、続ければ必ず伝わると信じ、自分の姿を示し続けたいと思います。

大学入学後も使える英語力を。

中学生・高校生対象
スコア型英語４技能検定

GTEC

継続的に英語力の伸びが測定できる

「GTEC」は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の４技能を測るスコア型英語４技能検定です。多くの大学・短期大学の入試で「GTEC」のオフィシャルスコアが活用されています。また、日常生活で使える英語の育成を目指すテスト設計になっており、大学入試で必要な英語力だけでなく、大学入学後も使える英語力を育みます。

2018年検定日

第1回検定日 終了 16(土) ▶ 第2回検定日 9/1(土) ▶ 第3回検定日 12/1(土) ▶ 大学入試

www.benesse.co.jp/gtec/ GTEC 検索

※「GTEC」は、(株)ベネッセコーポレーションの登録商標です。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume3 2018年8月号
2018年8月20日発行／通巻第371号 発行人 山﨑昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング12階

©Benesse Corporation 2018

お客様サービスセンター
［フリーダイヤル］0120-350455
受付時間 月～金8:00～19:00／土8:00～17:00（祝日、年末・年始を除く）
株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17

Benesse